

【資料紹介】江戸東京たてもの園 情景再現展示・学校連携事業等関連資料

友 野 千鶴子*

目 次

- 1 はじめに一本資料紹介にあたって
- 2 資料紹介
 - (1) 『江戸東京たてもの園 綱島家年中行事展示の手引き』
 - (2) 『一古いたてものの中、人間が暮らすにはどんな知恵がひつようなんだろう?—平成12年度「昔くらし体験」事業のまとめ』
 - (3) 『江戸東京たてもの園 平成13年度学校連携事業報告書』
- 3 むすびにかえて

【資料1】『江戸東京たてもの園 綱島家年中行事展示の手引き』

【資料2】『平成12年度「昔くらし体験」事業のまとめ』

【資料3】『江戸東京たてもの園 平成13年度学校連携事業報告書』

キーワード 江戸東京たてもの園 ボランティア ひじろ会 綱島家 年中行事 昔くらし体験
子どもボランティア ひじろっ子 むかし塾 学校連携事業 教育普及

1 はじめに一本資料紹介にあたって

江戸東京博物館分館の江戸東京たてもの園は東京都立小金井公園の一画に位置する野外博物館であり、「たてもの園」の名のとおり建造物を移築し、「情景再現」と称してそれらの建物に即したくらしの様子の再現展示を行っている。たてもの園を積極的に児童生徒の学習に活用してもらう学校連携事業は、この建造物や情景再現展示を生かす形で平成12年度の試行実施を経て、平成13年度から本格実施となった。今でもその主軸となっているのが「昔くらし体験」である。情景再現や体験事業には何を基準に再現するか—材料や道具の調達が可能か、人や文化財の安全管理面をどうするか等の細心の注意が必要である。また、定型的に実施できれば準備も定型化できやりやすいが、来園者の規模や特性によってカスタマイズするとより効果的に楽しめ学習成果が期待できる。実施者側もそこからさまざまなヒントを吸

*東京都江戸東京博物館学芸員

収することができる。ただし、いずれのやり方も時代に応じて変えざるを得ないことがあり、繰り返しつつも常に検討が必要となる。そのためには、博物館として核に何を据えるか、目的は何かを明確にしておき、常にそれを忘れないことが重要となってくる。

例えば、たてもの園では年中行事やくらしの中の道具の使い方など生活習慣に即した再現や体験などを行う際はボランティアの補助が不可欠であったが、知識ではなく実生活で具体的な経験をお持ちのボランティアが「園のやり方は自身の経験したものと違う」と戸惑うことがあった。各家庭や地域ごとに違いがあるのは当然なのだが、博物館としてどのポイントを押さえ、なぜ違うのかを説明し、ともに実施するスタッフのコンセンサスを得る必要がある。

そのような状況下で作られたここで紹介する資料は、いわゆる博物館の所蔵資料ではなく、博物館として業務を行うにあたり担当者がその業務用に製作した冊子である。つまり、当時、その事業を行う手引きとして策定したもの、と同時に、事業実施後今後の参考になるようにとの意図でまとめた業務記録である。掲載内容には現在でも一部エッセンスが活用されているものもあるし、今は行われていないもの、また、事業として続いていてもかなり中身が変わったものもある。博物館の教育普及事業は展覧会に比してどのような意図でどう行われたかの資料が後日まとめられないことが多い。作業が多忙で詳細記録が困難な場合もあることや、まとめ作業よりも新しいイベントを実施したい—という意欲が先に立つのが記録がない原因と思われる。加えて、分館のたてもの園を含む江戸東京博物館は組織編成が頻繁に変わる傾向があり、その改革のあおりでデータの保管や継承に難があり、引き継いだはずの後任部門でさえ前任の軌跡を後日辿れないものが出ている。後発の事業が成功すればよし—という考え方もあるかも知れないが、その事業を行った背景や博物館のあゆみの中で何をし何をしなかったのか—という軌跡を追える資料は残しておくべきだろう。本資料を提示することにより、江戸東京たてもの園の学校連携事業の創始期の工夫や現在との違いを認識・分析しやすくし、これからも続くであろう学校との連携の在り方を考える一助となることを期待するものである。

2 資料紹介

(1) 『江戸東京たてもの園 綱島家年中行事展示の手引き』 巻末【資料1】

この資料は江戸東京たてもの園ボランティアが復元建造物「綱島家」にて情景再現事業として年中行事展示を行う際のテキストとして作成したものである。テキストの利用者としてボランティアと職員を想定している。現在も年中行事展示は形を変えつつ行われており、2014年（平成26）に筆者が再びたてもの園に着任した際も年中行事を担当するたてもの園スタッフがこの原本を所持しており大変驚かされた。複数人に配布し携帯活用してもらう目的で作ったため表紙に氏名欄がある。この年中行事をはじめとするボランティアの情景再現のための活動などの事業の繰り返しから、学校連携事業の児童生徒への対応能力の有無を職員が判断するよすがを得ることができた。また、年中行事の実施はボランティアが各自に適した手作業等を習熟する肩慣らしの一つでもあった。実際、この種の活動がある程度スムーズにできるボランティアが揃っていたことで、当時浮かんだアイデアをその後の学校連携事業の対応につ

なげることができたと感じている。

この手引きの特徴としては、ボランティアとたてもの園が協働する際注意すべきと感じた点やたてもの園の置かれた状況で考えられる限りの留意事項を詰め込んでいることがあげられる。状況や留意事項を詳細に記述することにより、環境が変わった場合の対応策も練りやすいと考えてのことである。以下、回顧談も含めて紹介していく。

① 概要・原本体裁等

発行年：2002年（平成14）3月

A4版 たてもの園内印刷機等利用印刷 ホチキス止め自家製本

発行部数（利用対象） たてもの園ボランティア＋たてもの園職員

本文25ページ 色紙表紙（桜色）

内容目次： 1 はじめに（目的・注意事項等）
2 梅の土用干し展示テキスト
3 お月見飾り（十五夜・十三夜）テキスト
4 干し柿展示テキスト
5 大根吊し展示テキスト
6 小正月飾り（繭玉団子）テキスト
7 節分行事テキスト

参考：たてもの園復元建造物・綱島家とは？：旧所在地 世田谷区岡本3丁目、建築年代 江戸中期、復元年1997年（平成9）

綱島家では「綱島家年中行事」と称し年間を通じて季節ごとの習慣・行事を再現し、情景再現展示をしている。この建造物は江戸東京博物館資料収集委員会（建造物部会）においてたてもの園への移築復元を検討する経過で、それまで復元して来た建造物よりもより動的な季節感あふれる展示をボランティアの助力を得て行う方針が策定されていた。

② 概要と本手引きの特徴

●作成の経緯1—実務上で活用できるテキストの必要性

当時、綱島家年中行事を実施するにあたっての学芸員の分担体制は試行錯誤の連続だった。ある年は、綱島家の担当学芸員¹⁾がほぼすべてをボランティアとともに実施、また、ある年はボランティアと園の全学芸員はもっと交流すべき—との意見から、ボランティア担当学芸員がサポートしつつ、その他の建造物担当の学芸員にも年中行事を振り分け交流をはかりながら実施した。しかし、綱島家担当外の学芸員も一緒に実施するにはその職員に対してもそれなりの説明や経験則からの注意事項を伝える必要がある。とくに、安全管理面の注意事項については各学芸員の示すポイントの足並みが揃わないと協働するボランティアが混乱し事故に通じる。このため、綱島家の担当者は、担当以外が行事を担う際にはその都度注意事項や手順のメモを渡したり、OJT対応のために補助として立ち会うなどの役目が生じた。

その積み重ねデータを最終的に平成13年度末に手引きとしてまとめたわけだが、まとめるに至った最大の要因は当時の都政の文化施設に対するマイナスシーリング対応にある。

たてもの園には組織として平成13年度に常勤学芸員1名減、14年度も1名減の割り当てがあった。この調整要求はあくまでも江戸東京博物館全体（本館・分館）に対してのものであった。しかし結果的に、とくに平成14年度の江戸東京博物館全体に対する学芸員の減員は定数分母の大きい本館が飲み込むことはなくたてもの園にすべて割りあてられた。このため、前年度に引き続き常勤学芸員減員マイナス1名となった。これは小所帯には大変な痛手である。あわせて平成14年度には課長職である園長の定数もなくなっている。園長職の消滅は当初学芸員については常勤学芸員1名減、非常勤学芸員2名減の回答があったのだが、これではたてもの園が立ち行かなくなる－との当時の園長の判断で、園長職を失くす代わりに非常勤学芸員の定数を確保したとの説明を職員は受けている。また、平成14年度は各復元建造物に1名ずつ配置されていた案内解説員の委託契約予算がつかず各建造物の常駐スタッフが不在となる予定であった。このため平成13年度末の人事異動で転出する筆者をはじめとする一部学芸員には在任中の最後の仕事として、担当建造物に展示してある道具・調度などで無人状態での展示が危険な物や紛失しても気づきにくいものなどは「着任早々の後任には判断がつかないからすべて前任者が撤収してから引き継ぐように」との指示が出ている。離任最後の仕事としてはあまりにも悲しいものであった。

本手引きの表紙裏の目次欄の下にある記述では、たてもの園をとりまく厳しい状況があることや、今後当該事業を行うにあたり不明点がある場合は編集担当に遠慮なく問い合わせるように－と大変情緒的なトーンで記載している。厳しい状況とはこの組織的な定数の変更を指しているのだが、と同時に、当時のたてもの園職員にはそれがあっても行事の実施を止め難い状況があることも暗に示している。この後、東京都は廃館とする博物館を選定していく²⁾。たてもの園へは入園者数の定量目標は課されていても当時まだ利益面の定額目標は示されていなかった。そのため、人的制約を理由に事業を減らし博物館としての活動を鎮静化したために入園者が減る－というのは必ずしも園の将来にとって得策とは言えないとの考え方があった。また、東京都市民でもあるボランティアの学びと活躍の場である綱島家の年中行事の維持は都民にとってたてもの園が存在するメリットの一つであり、ボランティアは園の主要なサポーターともいえる。手引きの中には ①目的、②行事の意味、③安全管理の要点（現場の構造・法規）、④実施場所の特徴、⑤準備、実施方法の型（参加型・実演型）や手順などの具体例を現場の実経験に即して記載している。制約があってもとにかくこれを読んで従えば不慣れな職員やボランティアでも安全に正確に行事が遂行できる－というテキストが必要だと考え、内容もそれを目指している。

●作成の経緯 2—ボランティアと適確に作り上げていくために

たてもの園ボランティアの活動は綱島家の年中行事の実施だけでなく園内のその他の茅葺建造物（吉野家・八王子千人同心組頭の家・天明家）の囲炉裏や竈に火を入れ情景再現展示を行うことを基本としている。このため、多摩の囲炉裏のことを示す民俗語彙「ひじろ」からヒントを得て「ひじろ会」と名乗っていた³⁾。煙で建物を燻すことは茅葺屋根を保存管理することに通じ、それを基本活動としつつ綱島家を中心とした年中行事の展示を行う。現在もこの展示や活動は形を変えて続いている。その他に「自

主活動」と称し、ワラジ作りや竹細工など各自の持つ技量に合わせて園の承認を得た上で得意な活動をしていた。たてもの園ボランティアの特性は、現居住地は東京であるが出身地は東京以外の方も多数含まれていたことである。このため、茅葺民家で行われるイメージにマッチした手仕事に長けているということでその方の技能を信頼し頼り切ると自身の育った地方の特性が出てしまうことがあり、常に点検が必要であった。また、本業は職人で手仕事としての専門技術を持つ方や、茅葺民家のくらしに憧れてサラリーマンとして勤めあげてから参加する方、手芸や自然が好きな方―等、各自の特技やボランティア活動参加の動機はさまざまである。技術や経験のある方ほど自身の経てきたやり方に誇りとこだわりがある。一方、経験がないため一からやり方を覚えようという人もいる。この双方が納得する理由をあげてたてもの園としての目安を示す必要があり、①公共施設としての安全管理、②東京という地方の特性を考えること、③材料や場所の調達の限界と代替品の許容範囲の見極め、④お客様の特性、⑤ボランティア全体の技量、を多角的に見て無理のない範囲で目安をどこに定めるか判断していた。

例えば、藁仕事が得意なボランティアの中には、民具研究の分野で「あしなか（足半）」と呼ばれるタイプのワラジを好んで製作し、来園者にも積極的に「これが一番いいワラジである」と勧めつつ実演する方がいた。「あしなか（足半）」の特徴は、端的に述べると足を載せる平たい部分（台）の長さが短く踵まで覆う台に比べて半分ほどしかないため踵が収まらず地面にはみ出るものである。鼻緒の起点も台のへりから少し間をとった中央部分ではなく、前方の縁により近い位置を起点に編み上げたり、下駄や草履で見られるすげ緒タイプではない結び方（角結び）等の特徴がある。この形態は、足を地面に前のめりでずった際につま先周辺の台の部分が反って土にひっかかる危険が少ないためつまづきにくく歩きやすいという。平地ではなく起伏のある場所を歩く場合や動きの激しい仕事に適している。作者であるボランティアは「これは私の故郷の新潟の漁師が船上で履いていたもので、滑らないようにこのような構造で、転んだり滑ったりすることがない。一番いいワラジだ」と来園者にしばしば説明していた。本人が構造としては劣ると考えている多摩の平地のワラジ作りの実演をお願いするには、園の所蔵品や周辺地域の調査結果に即した具体的な説明が必要である。作者が誇りに思うあしなかの良さを否定していると誤解されないような表現で博物館がどこに力点を置いているかを理解してもらうのには大変苦労した。また、「良いものを勧めたい」という良心があって「これが一番いい」という表現をしているように見受けられた。しかし、とりようによっては文化を採点しているようにとらえる方もいるため、「一番いい」という表現は避けてほしい―と繰り返し説明・依頼した。

また、ボランティアは人に喜んでもらう良いことをするのが役目であるという意識があって、梅の土用干しの情景展示では「出来上がった梅干しを食べてもらい喜んでもらいたい!」という思いに至る。「知ってのとおり梅干しは伝統的な毒消しじゃないか、だから大丈夫」、「旅行で行ったスカンセンの博物館（スウェーデン）は伝統的な菓子をボランティアが作って売っており、それがとても美味しく皆喜んでいたよ! 友野さんにも見せてあげたかった」「主婦である私は毎年梅を漬けている。あなたより経験がある」という夢や意見やご好意からの報告を聞きつつ調整していく必要が生じた。私自身はもちろん経験は尊重すべきと考えてはいるが、都の博物館施設としては日本の法規にのっとり基準を満たした提供が必要である。東京都の施設として法的基準や衛生基準は重視しなくてはならないこと、年齢から

の経験は私は少ないかもしれないが、各地の行事や行事食の調査・見分経験はおそらく皆さんよりあること、そういったものを活用した各種文化施設の事業実施状況も調べた上で今のたてもの園では準備不足であること等を繰り返し話した。食べ物という魅力のある物を扱ってはいても食べることを目的に行っているわけではない。飲食物が絡む行事の場合は何のためにそれをしているのかボランティアにも来園者にも目的を明確に伝える必要がある。強いて言うならば－文化の伝承と言うことならば、見て帰って自分でも家でやってもらうために私たちはこれをしているのである。

以上のような日常があったため、本資料の内容は、突然各行事のやり方の説明から入らずに、年中行事展示をたてもの園で行う目的、実施時期の選び方、運営の際に心がけていること等を冒頭で詳細に説明している（【資料1】 p.1～p.3）。引き続き各行事の説明では、準備から当日の対応の流れ、いくつかパターンが考えられる場合はそのパターンとそれを選ぶ理由など運営に直接関係する点も極力具体的に記載している。また、行事の中には綱島家移築復元時の担当学芸員の調査データが少なかったため別の地域の同様な行事を調査しそれに基づき展示をしているものがあり、それはその旨も記載している。別の地域の事例は材料の入手がしやすいだろうとの目算で、たてもの園になるべく近い小金井市の事例を実見・調査の上選んでいる。

冊子の体裁としては、実作業に使えるよう担当者の氏名や月日を記入する欄や、メモ欄も設け、また、言葉では説明しきれない部分やボランティア間でやり方でよくもめるものには手書きの図を豊富に交えている。この種の行事を見たことがない人には図や写真があるとわかりやすい。また、ビジュアル資料には漫画のような子どものイラストを添えるなどして、「うちのやり方は違う！」とのボランティアの気持ちをほぐせるように、印象がきつくならないようにしつつ、各行事における注意点もはっきりと掲載するように努めた。

●作成の経緯 3 継承が困難な場合のために

整ったテキストがあれば、それに従えば難なく運営ができる。手引きの多くはこの前向きな意図で作成される。実施者はそれを読めば全体の作業量や要点が分かる。反面このことは、後ろ向きに考えれば、組織として対応できる体力がない場合は、読めば、それをするのはもはや無理であることも分かるということである。この手引きは、どうしても無理であると考えた場合に、どこを変えるべきか？すべてやめるべきか？を判断するための材料としても利用可能であると考えた。ただし、「綱島家年中行事」はボランティアとの協働作業で本来たてもの園はそのための体制を整える立場である。変更点が生じる場合はより慎重に判断する必要がある。また、一度やめてしまうと再開までの間にボランティアの顔ぶれが変わると復活する際に以前どうだったのかわからなくなりがちである。手作業が伴う事業は担当する学芸員の得手不得手（器用不器用）が大きく左右することもあり、これは学芸員の仕事ではないと及び腰の傾向がある者もいないわけではない。当時のたてもの園は、既になるべくその職員の専門に近く得意な部分を担ってもらわないと周囲のサポートに限界がある定数となっていた。そのような状況での事業の存続やボランティア活動の場の確保を考えるとこのような「手引き」「まとめ」は博物館として用意すべきものと考えた。つまり博物館がどんな状況にあったとしても「やってやりっぱなし」にしない

ための手がかりを残すことは必要であるということである。

（２）『一古いたてものの中、人間が暮らすにはどんな知恵がひつようなんだろう？—平成12年度「昔くらし体験」事業のまとめ』 巻末【資料２】

網島家年中行事の実施や茅葺民家で火を焚く活動の経験を活かし、ボランティアに平成12年度から学校連携事業の試行に協力してもらった。それまでのボランティア募集時の活動内容として示されていなかった事業であり、園としても模索しながら進めていたため、あくまでも「試行」という位置づけで実施している。筆者がたてもの園に着任し２年目の年で、準備をしつつの実施—つまり、同年度に調査・調整をしながら実施する形となった。また、この時期、学習指導要領の大きな改訂があり伝統文化や伝統産業に着眼した教育が叫ばれ、また、「総合的な学習」の本格実施が控えており（【資料２】p.1 1 はじめに 参照）、結果的にたてもの園もそれに備えて従来していなかった学校来園者を対象とする建造物を活用した道具類の体験学習対応に踏み込んだ形となっている。本資料は、その意図・準備経過・実施結果についてまとめ、見込みがあると判断した場合、翌年の本格実施を視野に入れた近隣市町村への周知に利用するためにまとめている。そして、最終的には本格実施へつなげることができた。

なお、この資料は、ターゲットとしていた小金井市・小平市の教育委員会へ持参し傘下各校に配布して周知をはかることを目的に作成したため、残念ながら残部が手元に残っていない。このため、筆者が所持していた担当用の控えを掲載する。担当の控えのため、書き込みがあり、また、資材と手間を省くために試し刷り印刷段階のものを校正用兼担当業務利用としていたものを掲載していることをお断りしておく。実際の本紙は【資料２】にあるものと異なり訂正記入部分の修正や変更がなされていると思われる。【資料２】表紙右下に「表紙は持参する分20部は訂正する」「追って誤字・脱字は直す」等、業務経過での対応について鉛筆での断り書きがある。担当者は節約のためこれを携帯し手元に置き、各教育委員会の指導主事、校長会、研究主任会議等で説明する際も、自身の分はこの訂正準備版を使っている。

① 概要・原本体裁等

発行年：2001年（平成13）５月

A4版 たてもの園内印刷機等利用印刷 ホチキス止め自家製本

発行部数（利用対象）：小金井市・小平市内公立小中学校数＋たてもの園職員

本文14ページ 色紙表紙（桜色）

内容目次： 1 はじめに（たてもの園の紹介と本誌作成の目的等）
2 平成12年度昔くらし体験実施スケジュール・規模等
3 提供プログラムメニュー
4 事業の実施体制（実際実施したプログラムの例・参考資料・写真・アンケート等）

② 製作の経緯と視点・特徴

（【資料２】p.1 1 はじめに）に記載があるとおり、本資料を製作するに至る「昔くらし体験」実施

の経緯は、学習指導要領の改訂に合わせてたてもの園の特性を生かした活動を行い教育現場に積極的に協力できれば—というものである。が、そこに至る前提として、筆者には自身の分担業務のボランティアの調整で解決したい事項が生じていた。子どもたちの来園はボランティアに良い刺激になるのではないかと考えた。それと併せて、入園者数の落ち込みの回復の一助にもなると考え、直属の上司に提言を行い実施に向けての了承を得られたのが「昔くらし体験」試行へ向かうきっかけである。ただし、ボランティアの抱える課題が先行していたため、すでにこの目的につながる調査は前年度から学校連携という視点ではなくよりよいボランティア活動のための調査として実踏を進めていた。

また、平成12年度は学習指導要領の改訂に合わせた学校対応について一つの課題として江戸東京博物館全体に対応調査の働きかけがあり、たてもの園では別の学芸員が学校連携担当となり教育委員会への調査訪問などを開始した。しかし、今一つイメージがわからないのかヒアリング内容の絞り込みや実施案の策定が遅滞していた。このため、いずれのやり方をするにしても児童生徒の来訪はボランティアが関与せざるを得ないだろうとの判断から学校連携事業の検討実務は第二四半期にはボランティア担当へスライドしている。

●視点1 学習指導要領の改訂に合わせた方向性

江戸東京たてもの園への遠足、社会科見学を行う保育園・幼稚園・小中学校はそれまでも存在した。しかし、その大部分はあくまで先生方がたてもの園を随時実踏した上、園の大きな助力なしに組み立てた指導メニューで来訪していた。当時既に、昔の道具を博物館で体験するという事業は他の博物館では珍しくはなく、小学校3年生の社会科の授業では郷土学習の单元として昔のくらしを知るために茅葺民家を見学したり、古い道具を体験しに博物館を訪れるということは頻繁にあった。先行館では冬季に学校がこの单元に入るのに合わせて展示をしたり石臼体験を行うなど、毎年恒例の展示・催しとして定着していた。学校にもそれだけ期待されており、それに合わせて各校授業を組むので、この事業は勝手に他の事業と差し替える—というたぐいのものではない。とくに、市区町村立の博物館は地元の学校と密接なつながりがあるせいかなチラシやポスターでの宣伝も活発で、この意味ではたてもの園は周回遅れの後発である。当時のたてもの園がこの種の郷土学習での活用に至って注目していなかったのは、武蔵野郷土館からたてもの園にリニューアルし建築の博物館となった際、郷土学習のイメージに変化があったためではないかと筆者は考えている。また、東京都の江戸東京博物館の管理監督部署は生活文化局（名称当時）で、公立小学校の管理をしている教育委員会とは別の部署である。生活文化局は学校教育というよりは、イベント実施に長けたイメージが強かった。そのうえ、たてもの園の本館である江戸東京博物館は、その斬新な建築構造から施設的に躍動的な体験をしにくい建物であり、それに倣ってか、たてもの園も野外に大勢で利用できる水洗い場がない等、ボランティアが年中行事展示を行う際も設備に支障があると感じることがあった⁴⁾。

しかし、たてもの園の建造物はごく特殊な幾つかを除き基本的に人が使い居住していたものである。人の生活に火は不可欠なので、教科書で題材としてとりあげている火の扱いに関する道具はほぼすべての建造物に展示されている。加えて、ボランティア・ひじろ会の面々は、囲炉裏や竈で火を焚くなど具

体的にその設備を守り、使い、来園者に問われるとそれに即したいろいろな会話をしている。また、火は入っておらずとも火鉢を展示している座敷がある。どのように置かれているか見ることができ、火の明るさを実際の古建築の中で見ることができ、どうしてそこにあるのか考えることができる。小学3年生が学ぶ題材は各種揃っていた。

新たに提示される指導要領では、日本の伝統文化や伝統産業を題材に応用力につながる知識を体得するための核となる体験をより重視していた。それまでも行ってきた小学校3年生の郷土学習の体験は指導要領の例示が比較的明確で歴史がある方だったが、それ以外の学年では新たに対象を選択し、どうかみ砕いて教えるか～という調査検討に大変な苦労があるようだった。地元教育委員会の研究主任会議の議題が丁度総合学習の体験部分の議論となった場に同席したことがあったのだが「どこでどういうことができるという一覧を提示して上は現場におろしてくるべきでとてもその準備時間がない。校長会ではこの点について議論があった上で我々を招集しているのか?」「今後リストの提示等あるのか?」等、かなり逼迫したやり取りを拝見した。当時は現在のようにネットで即座になんでも探せる時代ではなく、また、「良質なプログラムを民間で実施していたり、近在の学芸大学の良いプログラムがあっても採用するための基準があり利用できない」との悩みを伺うこともありさまざまな制約が現場にあった⁵⁾。このように選択肢が限られる中で博物館の協力は望ましいことで、周回遅れの博物館も時を得た状況にあったといえる。

次の課題はたてもの園と言う場所を使ってやる意義はどこにあるか?である。昔の道具の体験自体は学校の体育館でも校庭でも教室でもやる気があればどこでもできる。どうしてそのようなものを使ったのか?ということも書物である程度勉強できる。古民家の中でやるからには、建物の構造を含めて、そこで行う必然性、昔の暗い家の中での火の明るさ、煙の煙たさやその行方―など、実際の本物の古民家の中ならではのものを具体的に体感し知ってもらうことが道具を知ることと同様に大切であると考えた。道具を上手に動かすだけでない総体的な存在や気づきはのちに応用力に通じるのではないか?粉が細かく挽ければ成功、時間内に多く回せるのがよい体験―ということではない―多く回すことを園として目指すのではなく、家の中で効率的に安全にスマートに火鉢や臼など道具を扱うにはどうしていたか?という家の構造や工夫をまず感じ取ってもらいたい―と考えた。（【資料2】表紙）のタイトルにあるリード「―古いたてものの中、人間が暮らすにはどんな知恵がひつようなんだろう?」は、たてもの園で行う意義を表わした表現である。学習者だけでなく、実施する職員やボランティア側も一所懸命すればするほど、ともすれば、「時間内で〇回ずつ臼を回して〇人公平に体験させた!」という達成感・ノルマにとらわれがちになるので、その自戒の意味も込めたリードである。

実際に火鉢や石臼を使っていた古民家の中で具体的な雰囲気味わいながら体験ができ、体験以外の伝統文化についても学ぶ要素が豊富にあることを小金井市教育委員会を通じて各校に働きかけた結果、打ち返しのあった学習利用は小学校3年生以外でも受け入れた。（【資料2】p.6・p.8）掲載の小金井市立小金井第二小学校2年生の事例は、国語の授業「かさこじぞう」の理解のための利用である。笠を地蔵にあげたジイの家に地蔵が真夜中にお礼に年越しの食料や燃料の入った俵を曳いて届けに来る。奇妙な音に恐れながらジイとバアは雨戸をそっと繰って外を覗き見る。この「雨戸を繰る」という表現が雨

戸がない家に住む児童が多くなりわからない。説明しづらいーということでの来園だった。開園・閉園のためにいつも雨戸の開けたてをしている案内解説員が実演をし、ボランティアは笠こ地藏朗読と囲炉裏の火と囲炉裏周辺管理、来園した児童は囲炉裏を囲んで話を聞く形とし、他に蓑笠の体験も加えた。校外学習には学校内の手続きや安全な引率要員が必要である。来園したどの学校も前年度からの調整ではない急な依頼にもかかわらず、緊急要員としての副校長や保護者の参加協力を得るなどして工夫し、校外学習の態勢を整えてやってきた。保護者の同行があるということは、その保護者にも園の良さを知ってもらえるということでもあり非常に有意義である。昔話にある用語や道具の理解のために資料を見学したり、座繰り等の道具を貸す事例は、博物館の民具活用としてよく耳にするものである。動きや音、重さを知るには実物にまざるものはない。

●視点2 地域連携事業としての学校連携事業

【資料2】p.1) 掲載の昔くらし体験実施スケジュール、(p.4) 参加校記録をみると、試行実施の声がけは小金井市教育委員会宛に実施したこと、また、参加校も小金井市を中心に多摩地域の学校が参加していることが分かる⁶⁾。手がかりとしてたてもの園の至近の教育委員会に声をかけたと単純に考える向きもあるかもしれないが、たてもの園としては、学校連携を地域連携として位置づけ、東京都広域に広げる意図は当初なかった。理由は以下のとおりである。

- ① たてもの園の職員定数からみて体力的に東京都全域に対象を広げる余裕はない。つまり、学校教育が関係する体験事業については準備や打ち合わせ等手間がかかるという自覚があった。また、手数をかけないと良い形では実施できないと考えていた。あくまでも限られた人数できちんと回すことを考えた。
- ② 東京都域には、既に同様な学校を対象とした体験事業や展示を行っている博物館が散見された。それらの施設は継続的に毎年同事業を行っている。そのような市区町村宛に都立施設だからと後発のたてもの園が声がけをするのは、何か趣旨が違うのではないかという考えがあった。一方、小金井公園の位置する小金井市・小平市⁷⁾の博物館等文化施設は、逆にこの種の事業は行っていなかった。都域の学校連携事業の穴を埋めるという意味でも地元との地域連携の学校連携事業として絞り込むのが適当と考えた。
- ③ 郷土学習の単位としての「昔くらし体験」としては、より参加校に近い地元で行うのが望ましい。学校全体での学習終了後、復習のために子どもの足で来園したり、家に帰ってその体験を話し、その話を元に家族揃ってまた訪れる際も居住地に近い方が足を運びやすい。郷土学習を学校内で終わらせるのではなく、家族で共有してもらいたい。これは郷土を知るという意味でも重要なことであり、ひいてはそれがたてもの園のリピーター、ファンの獲得に通じる。

このような意図から地域連携事業としての学校連携事業との位置づけとした。このため、【資料2】p.4 表1)にあるように、地元の学校には極力対応し、例えば、小金井第三小学校3学年については、

3回受け入れている。引率者を含め総数169名の来園である。次の「●視点3」にあげている冬季来園者数の獲得という意味でも大勢の来園はありがたいことなのだけれども、何よりも地域連携の趣旨として地元小金井市で希望する学校はすべて取りこぼさずに受け入れるという姿勢だった。三小は小金井市下一番のマンモス校である。それを一度に受け入れることは、対応する人的な面でも、活用する文化財としての建造物の保護の観点からも難しい。そこで、回数を分けての来園を依頼した。一方、引率者の不足からの緑小の3回に分かれての来園も認めている。しかし、この工夫は現在の「昔くらし体験」では行われていない。一部の学校を回数多く迎えるのが公平性に欠けるという意見があったり、全クラス一度が無理な場合は当該学年のクラスをいくつかに分けて来てもらうという発想が忘れられたためと思われるが、地域のファン・サポーターにつながる地域連携の観点からは大変残念なことである⁸⁾。

●視点3 冬季来園者と身近な応援者の獲得

筆者が1999年（平成11）にたてもの園に着任して驚いたことの一つは、冬季（1、2月頃）の1日の来園者数がわずか12名という日があり20名に満たなかったことである。冬の寒い日であったが晴天だった。これは筆者が以前勤務していた非常に規模の小さな市町村施設と変わらないかそれ以下である。駅から遠くバス下車後の公園内も歩かなくてはならない立地とはいえ、都立施設のこの規模で大丈夫なのか？その分この時期に来園者がいるとできない修復や資料整理などに充てているとアピールしているのか？等々、少々問題なのではないかと感じた。この不安は的中し、当時の都政下で文化施設の整理作業が数年後開始する⁹⁾。

野外施設はどうしても冬場の入場者はふるわない。1日12名の入園者が通常運転のところに単式学級でも30人、複式学級ならば100人程度の子どもたちが学校連携事業の参加校として授業来園することは、たてもの園が冬眠状態とならないという意味でも有意義である。また、近隣の児童は学校での来園後遠隔校の児童よりもリピーターとしての来園がたやすい。学校が終わってすぐ、まだ日の明るい時間¹⁰⁾に授業の復習でもうちょっと調べに寄ってみようかなーと思わせる動機づけが大事である。あるいは、たてもの園で「こんなことをした」「こんなものを見た」ーと家で話し、次は家族で一緒に来てもらう、次の学年に上がっても遊びに来てもらうーこの繰り返しにより身近な応援者・応援団が形成できればと考えた。何も学校連携に頼らなくてもたてもの園を愛するファンは既に全国に大勢いるのではないのか？という意見もあると思う。しかし、学校教育現場の組織的な教育での利用面や、都民の中でもとくに地元の地域住民に「なくてはならない施設」として認識・応援してもらうことが、たてもの園の将来にとって大切だと考えたからである。博物館の廃館問題も関わる自身の保身のためともいえる大変浅ましい理由ではあるが、数次に及ぶ減員にそれだけの危機感を持っていた。

●視点4 ボランティアの活性化

当時のたてもの園ボランティアは火曜日から金曜日までの曜日班に分かれて活動し、土日祝は各曜日班が当番制で囲炉裏の火を焚いていた。原則毎週参加なので、月3回は活動してもらいたいのだが、活動率が著しく低い人もいた。また、「私はボランティアなんだから（来なくても仕方ない）」との言葉を

しばしば口にする人もいた。つまり、約束を最終的に守れなかったり、責任感が各人により異なった。ボランティア会長（ひじろ会会長）がこの点を調整するのであるが、「これ以上は仲良くしていくために注意できない」ということも多々あり、園の担当の助力を求めてきた。「ボランティアは無責任でも仕方ない」ということにはなりません。あなたが介護のボランティアだったら、突然連絡もなしに休みますか？」「来ない人の代わりを必ず他の方がやることになるのです」－何度もこの言葉を私の親にあたる年齢の方に繰り返さねばならない。また、不平不満を抱かせないよう、自らも熱意を持ち一所懸命実践して一緒にやろうという機運を盛り立てる必要がある。ボランティアは成人ばかりである。いろいろ複雑な対応があったり、大人同士のもめ事は解決が非常に難しい。この状況は大人同士で甘えが出ている点も原因なので、子どもたちと積極的に関わる場面が生じれば、「さすがに大人だけはある」という変化が見られるのではないかと考えた。学校の児童生徒は概ね彼らの孫くらいの年齢である。孫の面前で見苦しい姿は見せないで欲しいと願い－士気が上がることを期待した。

残念ながら、この士気が上がる度合いは人それぞれであった。しかし、当時のたてもの園ボランティアは参加申し込み時の活動要件に学校連携事業への協力は含まれていなかったため、理解を得るためにも試行実施期間を設けることは不可欠であったと思う。熱意を持って「楽しいものになる」「得るものが多い意義ある活動である」と説明をし、近在の施設の子どもボランティアの活動を調査に行く際などには希望者を募り職員だけではなくボランティアも一緒に現場を見学し、ヒントを得た。また、試行の経過でどうしても無理と判断せざるを得ない場合もあると考えて、今後のやり方をどうするか常に念頭に置きながら協働した。皆よく食いついてきてくれた、ボランティアの皆さんにはいろいろなことをお願いし助けられた。反面、楽しみであっても遊びではないので厳しい規律も課した。しかし、その分丁寧に対応をしたつもりである。

その後、ボランティアは一時期たてもの園で花盛りとなったさまざまなイベントに駆り出されるようになったが、筆者には実は少々疑問がある。どの華やかな活動も理解を得るための試行期間があったのだろうか？また、華やかなものを好む人もいる。現在はボランティアがらみの事業は多少落ち着いてきており、ボランティアの活動形態も変わってきているが、ボランティアといっても、たてもの園ボランティアが当初目指していたのは、園の規則に沿っても自身で考えるボランティア、一緒に考えるボランティアだったはずである。筆者が最後に着任した2018（平成30）年度に一緒に活動した方々からは、「園がやれというならばやるけれど～」「決めてくれればやる」という発言をしばしば耳にした。代替わりがうまく出来ず高齢化した等いくつか要因はあるのだが、元気の良さや自律的マナーが減ってきているように見受けられる。今は職員が直接ボランティアの毎朝の朝礼に出る形ではなく¹¹⁾、人材派遣スタッフのボランティア担当が配置されており諸般調整している。しかし、この担当には権限があるようでない。ボランティアは一緒に活動する人なのか・場を貸している人なのか・お客様なのか？等－たてもの園自体の接し方に長い期間を経てゆらぎがあったのではないかと筆者は感じている。この差異によってはボランティアの皆に押さえてもらいたいポイントがかなり違ってくる。今後も博物館は新たなボランティアを募る機会があるだろう－その前にきちんと考えておきたい点である。

（３）『江戸東京たてもの園 平成13年度学校連携事業報告書』 巻末【資料３】

本資料は、2000（平成12）年度の学校連携事業施行実施後、小金井市・小平市教育委員会に正式に学校連携事業のスタートを申し入れ、学校連携事業を本格実施した2001（平成13）年度１年間の実施内容を記録・紹介したものである。この年の学校連携事業は「とにかくやれることは何でもやった」の一語に尽きる。当時従事した学芸員各位にはまたそれぞれの考え方があると思うが、二度とこれをする機会がないかもしれないと考えていたことや、やっておけばこれからのつながる－との期待があったためである。この冊子も先に挙げた２冊と同じく、記録をしておけば同様な事業を行う際に参考になるという意図でまとめたが、小金井市・小平市両教育委員会の指導主事に最終的に提出している。その他の利用方法として、たてもの園がスタッフの人員要求をする際、一概に「学校連携事業の継続のため」と称し説明しても、それに全く着手していない江戸東京博物館本館職員には内容がわかりにくいいため、その説明資料として使用するとのことであった。

また、この報告書は主担当であった筆者が異動したため、自身の余暇にたてもの園に残った上司と連絡を取りながらまとめたものである。ちなみに筆者は異動後の主担当の業務が廃館（閉館）となった東京都近代文学博物館の資料を江戸東京博物館へ移管するという仕事だった。担当建造物の展示資料の撤収に引き続き行う業務が廃館施設の資料の引き取りとはなんとも切ないものであったが、あれほど恐れていた廃館とはこういうものかと思ひ知らされた。その上、作業期限が１年残されていないという状況にあり、たてもの園へOJT的な形での業務引き継ぎ等で訪問する余裕がほとんどなかった。このため、2002（平成14）年度の学校連携事業の運営体制については不案内であるが、極端に切羽詰まった状況になったとは聞いていない¹²⁾。ただし、職員数が限界のため、在籍者のなかでとにかくそれに一番適した人に各業務が割り当てられていた。しかも、この年度からたてもの園の建造物各棟に１名ずつ配属されていた案内解説員がいなくなり、警備員のポストも減らされている。そのことを考えても、この平成13年度の記録冊子にあるものと全く同様に進めていたとはいえないかもしれない。しかし、そのような経過を繰り返し、この中のいくつかはその後淘汰され、また形を変え、今に残っているものもある。

① 概要・原本体裁等

発行年：2002年（平成14）３月

※実際の発行は2002年（平成14年）８月頃

A4版 たてもの園内印刷機等利用印刷 ホチキス止め自家製本

発行部数（利用対象）：小金井市・小平市教育委員会（本庁提出）＋たてもの園職員

本文99ページ、口絵写真7ページ、白色コピー用紙表紙

内容目次： はじめに

- I 平成13年度事業および事業の背景について
- II 事業の実際（藍の育成と藍染め）
- III 事業の実際（ひじろっ子むかし塾）
- IV 事業の実際（大根の育成と大根干し）

V 事業の実際（「昔くらし体験」と「昔の暮らしと道具展」）

VI その他の事業

- 1 稲の脱穀調整体験の試行実施
- 2 学校教職員対象講習会
- 3 周辺校への出張授業
- 4 中学生への対応
- 5 高校生への対応
- 6 子どもミュージアムトーク

VII まとめにかえて—東京都事業上の課題

② 事業の視点・特徴

前掲の2冊で事業の意図や特徴に触れたものもあるため、ここでは本格実施で初めて実現したものやその特徴について述べる。本格実施は、小金井市教育委員会に加えて、対象範囲に小平市教育委員会を含めた。どちらも、教育委員会指導主事に趣旨を説明し、公式文書の回付を市の教育委員会宛に行い両市域の学校に広く周知してもらいスタートしている。

本格実施の大きな特徴の一つは冬場の小学校3年生の郷土学習対応だけではなく、たてもの園で行っている催事・情景再現活動を絡め、年間を通じて学校連携の流れを作ろうと意図したことである。これには、教育現場で課題となっていた総合的な学習の日本の伝統文化や工芸技術、産業等を取りあげる視点を活用した。二つめの特徴は、来園参加ができない小学校には出張講座（授業）に出向いた。これは、たてもの園お膝元である市域を対象にしたからこそ行えたことである。三つめとしては、小学校以外の学校も受け入れている。のちの中高生の職場体験の受け入れの先鞭をつけている。

●衣食住の文化を学ぶ（衣：藍染め【資料3】p.4～p.22）

たてもの園の茅葺民家のそばにある畑では、ボランティアによる自主的な情景再現活動として農園活動が行われていた。これは、天明家裏に作った藍の畑の藍を育て、生葉染を行う講座である。同時期に本館で長く続いていた「ふれあい体験教室」の建藍染講座が藍甕の手入れが学芸員の手之余り部分もあり中止となったため、その甕¹³⁾を譲り受け、生葉と建藍2種類の染めを学習している。ボランティアには藍甕の管理と畑の管理面、藍染め当日の作業に協力を得ている。ボランティアの児童の対応には試行実施年の学校対応での経験が生かされた。児童は毎日水やりと観察を行う。たてもの園至近の小金井市立緑小学校が連携校となり、児童が交代で放課後に観察来園した。水やりや観察の対応は、天明家に常駐する案内解説員が行う。この案内解説員の存在は安全管理上非常に重要であるが、平成13年度は一部減員となり、平成14年度には配置がなくなったポジションである。

藍染めは人気があり藍の育成に2校から申し出があったが、同プログラムでの複数校対応は難しかったため、同様に希望のあった小金井第二小学校5年生に対しては出張授業を行った。たてもの園に来園した場合は、建造物の「仕立屋」の見学を含めて着物や染めの話をするが出張の場合は見学がないので

この部分は話だけになる。

また、建藍は四季を問わず使えるため、伝統工芸についての授業として小金井市立前原小学校4年生も3月に建藍染に来園した。前原小教諭はたてもの園が毎月行っている伝統工芸の実演を学校の配布資料に掲載するなど、伝統工芸関連授業のヒントを細かく拾い活用している。

●衣食住の文化を学ぶ（食：大根の育成と大根干し【資料3】p.52～p.60）

綱島家の晩秋の情景再現のために綱島家裏の畑の農園活動で大根を作っていた経験を生かしたものである。干した後の大根の措置に園では苦慮していたこともあり、種まきから干した後の引き取り活用までを体験参加校にしてもらうことを視野に入れて実施した。たてもの園でたくあんを作っても来園者に提供するだけの条件は整えられないため、ボランティア間で誰が持ち帰るか？等々、大根干し展示後、いつも一悶着あったためである。この企画には、小平市立の3校の参加があり、各校それぞれ明確な指導計画案や希望を持っていた。敷地が狭く畑が作れない、また、学校の構造上軒先吊るしができないなどの構造的な理由から、是非ともたてもの園で体験をしたいという学校（【資料3】p.55小平第八小）、広大な畑が校内にあるので体験よりも講話や見学に期待し、また、児童数が少ないため単式学級外出ができないため他の学年と組み合わせての来園になる＝両者に理解できる用意が必要（【資料3】p.56花小金井小学校）－等、各校の特徴を知ることができた。植物を育てる－というと、種からじっくり腰を据えて－と考えがちであるが、先生方のアイデアも相まって、大根を育てていく過程をピックアップしてうまく活用することができた。また、この時期は園内雑木林に落ち葉が積もる。落ち葉で堆肥を作れることを説明し、落ち葉を掻いて背負い籠で背負う体験もした。希望があれば落ち葉は持ち帰ってもらうことも可能である。

●子どもボランティア・ひじろっ子むかし塾（【資料3】p.22～p.52）

夏休み期間の学校の来訪はないため、教育委員会を通じて「子どもボランティア」を募集し、綱島家にて「むかし塾」を運営してもらう企画である。以下が活動内容であり、平成13年の7月20日～8月30日までの休園日を除く毎日実施した。成人のボランティアにならって、子どもボランティアには「ひじろっ子（囲炉裏の子）」のニックネームをつけた。ボランティア参加者は以下のことをする。

1. 養成講座への参加（心構えや実技、場所の確認や注意点を学ぶ。自己紹介）
2. 茅葺農家（吉野家・綱島家・八王子千人同心組頭の家）の掃除（はたき・雑巾がけ、土間に水を打つ、掃除の手順）
3. むかし塾用おもちゃの管理
4. むかし塾での遊びの手本（遊びを教える）
5. 吉野家・綱島家の解説
6. お客様への挨拶や簡単な案内、大人ボランティアの手伝い
7. 反省会への参加（茅葺民家の大掃除、記念撮影、反省昼食会、終了書授与）

この講座を実施するにあたり、埼玉県大宮市（当時）の旧坂東家住宅見沼くらしっく館の子どもボランティアの活動を大いに参考にした。この古民家には園のボランティアとともに実踏を行っている。見沼くらしっく館との違いは、たてもの園の場合、子どもボランティアは自主的に活動するがその活動の現場には大人のボランティアもいてそれぞれの活動をしていることである。このため、子どもボランティアはどうしても難しいときには大人に頼ることもできる。たてもの園としては、甘やかしすぎる大人ボランティアが出るのではないかと思ったが、存外そのようなことはなく良い距離感であった。また、大人のボランティアにも、むかし塾の種目のベーゴマや独楽、剣玉についてうまくできないでやり方を聞く子が出ると思われるので、勘を取り戻しておいて欲しいと依頼した。が、この世代にとり、とくにベーゴマは悪い遊びとして子ども時代に禁止されていたものだったため「本当にそんなことやっていいのか？」と複数質問が来た。現在は、子どもの集中力を高めるため学校でも授業に取り入れている旨説明した。大人のボランティアにとっても時代の変化を認識する良い機会となった。

子どもボランティアが開催する「むかし塾」は運営といっても、清掃修練であったり、また、逆にお客様である大人に遊んでもらう、同年齢ならば一緒に遊ぶ感覚のものである。子どもが古民家で遊んでいる姿の情景再現であり遊ぶことや掃除する姿が情景再現となるボランティア活動であるとの意図も根底にあったのだが、雑巾がけやぬか袋で大黒柱を磨くことにより、文化財を大切にすることを肌で感じてもらえる。また、大人や見知らぬ人に対する丁寧な言葉遣いを覚えてお客様をお迎えする一等、学習というよりは、礼儀作法や積極性を学ぶ、文化財を大切にする—という意識を持ってもらうことを重視した。来園者にわからないことを聞かれたら、「わからない」と答えて職員にあとで質問することによしとした。また、剣玉などの遊び技術の向上には目標があった方がいいと考え、活動期間に検定を実施した。

もちろん、この「ひじろっ子むかし塾」の手引きも作成したのだが現在手元にない。見つかることがあったら、アーカイブ資料として紹介したいが、【資料1・2】と同様な体裁で、色表紙に女の子・男の子の絵が描いてある。手引きにはお客様の対応で答えられないときには、「わかりません、後で調べておきます」と、大きな声で答えればよい、と記載している。参考とした見沼くらしっく館では、「くらしっく館に行くと子どもがよい子になる」との評判で、子どもボランティアへの参加は保護者に歓迎されていると聞いた。

この「子どもボランティア」企画は2018年（平成30）まで続き、その後、突然に打ち切りとなっている。当時一緒に行った学芸員の所見では、人手の問題（手が回らない）との事情からではないか？とのことである。この最後の年には筆者も運営に携わったが、その時点での直近のやり方を踏襲して行っている。子どもボランティアの活動期間も1週間と大変短く、（【資料3】p.33・34）にあるように夏休み期間中はほぼ毎日していたわけではない。同僚から「昔は毎日やってた—信じられない、さぞ大変だったろう」との話が出ていたが、子どもボランティアの受け入れ方を比べてみて、表現が適切でないかもしれないが「昔の方がずっと楽だった」との感想がある。子どもボランティア創始期はイレギュラーな対応はその分手間がかかり、また、子どもを混乱させるため、とにかく園の開園日に開催した。実施最終年となった年には開講式を休園日に行っていたが、開始当時はボランティア活動のために特別に休園

日に扉をあける等の特別対応をする人的余裕はなかったため、すべて開園時間内に行い終えるものだった。また、地域連携事業の観点から地元の教育委員会を通じて募集していたため、近在のたてもの園の立地をよく知る子ども達が参加していた。災害時の連絡・送り迎えが必要な場合もこの方が対応しやすい。参加児童は遊びや建物の展示物や構造を覚えたら自身で案内し、遊び、掃除や水打ちをする。お客様が来ないときには自身が遊んだりおしゃべりをしていても、お客様がいらしたらシャキッとすればいい。安全管理面の注意が必要だったが、大人ボランティアも若く案内解説員の存在もあり手厚い対応が可能だった。打ち切り前年にあたる終盤の子どもボランティアの活動は、活動期間が短い分あくまで講座であり、「教えてもらいに来た人たち」が参加しているという印象だった。時代の差もあり、創始期の方法がそのまま生かせない部分はあるのだけれども、講座式のやり方では職員の手がいくらあっても足りないとの印象を受けた。当初、敢えて講座方式をとらず、また、広く東京都全域に声をかけなかったのは、職員が少数でも負担なく回すために準備や連絡体制が複雑にならないように－との意図があったのだが、担当者や時代時代で嗜好が異なるようである。もっと講座式にして－と考え出すと、「やっています」という形式は一見整うのだが、逆に参加者の自主性は失われる。その分準備の負担は大きくなるように感ぜられる。いずれにせよ、手が回らずに実施年度（この場合は2019年（平成31）度）に入り突然打ち切れる事業はもはや学校相手の連携事業とは言えない。つまり、「子どもボランティア」は学校連携事業ではなく、あくまでも「たてもの園の子ども事業」に変質した結果、最終的に終了したと言えるであろう。

●昔くらし体験にあわせた展示「昔の暮らしと道具展」（【資料3】 p.81～p.85）

小学3年生の郷土学習での「昔くらし体験」には本格実施年から小平市の小学校の参加があった。初参加校・試行時に参加した学校の別を問わず新たに相談にのり、その学校規模や意図に合わせて内容のカスタマイズをしている。これは、参加校範囲を2市に限って、その立地を理解していたからこそできている。また、この年、ビジターセンター内の展示室の展示替えに間があったため、展示室で「昔の暮らしと道具展」の名称で、稲作関係の道具や、縄^{なわ}縄^{なわ}機等藁仕事の道具類、衛生用具の蠅とり器等をケース内に展示した。また、展示室内に体験コーナー（【資料3】 p.84～p.85）を設け、ワラジ等を履いたり、手^な縄^ないの荒縄と機械編みの荒縄の感触を触って比べたり^{こざ}藁^{もしろ}座や^{もしろ}筵に座る、あるいは、蠅とり紙の展示を前に蠅叩きの模擬体験を行えるように用意した。この展示の準備は2週間なく、また、たてもの園内収蔵庫にある資料しか使えなかったので展示資料量としては多くない。「もっと多くの資料があればよかった」との感想が引率教諭から出ていた。準備を整えれば今も活用できる方法である。

●その他の事業（【資料3】 p.86～p.98）

その他の事業として本資料目次にあることを行っている。

1. 唐臼を用いた稲の脱穀調整作業（小金井第二小学校5年生：総合的な学習参加）（【資料3】 p.86～p.89）

稲を育てている学校が数あったため、稲の脱穀調整の体験を模索しており、この年試行実施した。

この体験は小金井市教育委員会に依頼し、試行実験参加校を推薦してもらった。児童の体験には、極力来歴がはっきりしている道具を使うように注意しているが、ここで使用した唐臼は、おそらく関東では最後の唐臼職人といえる職人が製作した唐臼を埼玉県立博物館（名称当時）の仲介で寄贈いただいた。職人から使う前の準備や水の打ち方等、扱いをきちんと学芸員が学んだ上で使用している。唐臼という道具は、博物館に収蔵されたものは崩れて傷んでいるものが多く、実際に使っている光景を見たことのあるボランティアはいなかった。この唐臼は江戸東京博物館所蔵の登録資料よりも形態的には完全形で丈夫である。来歴もはっきりしていて資料価値が高い。使用の際には水を打つなど手順があるため、博物館に収蔵されたものも原理が分からないまま扱うと破損の原因となる。たてもの園ではこの作業のために綱島家の梁に長い曳き手を設置した。

このように学校連携事業で使う道具類を極力生産者から入手したということも特徴の一つと言える。店頭に並ぶ安価な品は手作りでも外国産のものが増えてきており、都内で作られたものが無理な場合も、国産の来歴がはっきりしたものを使いたいと考えた。製作を依頼した職人に子どもが体験学習で使うと説明すると、通常の売りもの場合は針金で縛った箇所を切りっぱなしにするものを、きちんと中に折り畳み子どもが腕を擦る等の怪我がないように手をかける等多くの配慮をいただいた。本資料口絵写真にある背負い籠、落ち葉を詰める多摩のハチホン籠は清瀬市の職人に、ひじろっ子がおもちゃをしまう籠は白菜運搬の籠を小型にしたもので、調布の職人に製作を依頼した。当時は今のようにネットで生産者が躁れる時代ではなかったので、民具の報告書や文化財指定の対象者、伝統工芸の職人団体や産地の博物館への問い合わせなど、色々な手を尽くして依頼している。残念なことに、この唐臼はその後使われていない。しかし、現在のたてもの園の知識と技量では、展示が限界であり、使うことは望ましくない。しかし、来歴が明白で資料価値が高いもので、大切に伝えていってほしいものである。

2. 学校職員対象講習会（【資料3】 p.89～p.92）

来園して行うだけでなく簡単なことは校内で出来ないかとの考えの学校もあったことから藁仕事につながる藁の扱いに狙いを定めて講習会を実施した。これは、稲を育てている学校が多かったためと、藁を持って体験に来園したい学校から、下準備をしてくるように言われてもわからないとの発言があったため実施している。藁の取り扱い（藁すぐりや、藁打ち、縄^な縄^な等）をボランティア講師から学ぶ形で、参加した先生全員が技術を習得した。これは毎年園が行っている「正月お飾り作り」でのボランティアの講師の補助活動や、ボランティアの藁仕事の自主活動の応用である。その学校で1名でも先生が覚えれば、持ち帰って全員に伝授できるメリットがある。また、この年は研究主任教諭が総合的な学習に苦慮している時期だったため、研修会の依頼の話がたくさん寄せられた。取り扱い年度外となるため本報告書には内容の掲載はないが、この講習会をきっかけに、平成14年度国分寺・小平市・小金井市合同教職員研修会を8月にたてもの園で受け入れてほしいとの要請もあった（【資料3】 p.89）。

3. 周辺校へ出張授業（【資料3】口絵写真最終頁、p.92～p.94）

学校連携においては、来園してもらうだけでなく、学校に出向いた方が信頼関係が構築できるとの小金井市校長会のアドバイスがあった。数多くは実施できないので、年1、2校の割で訪問した。この年は、たてもの園で毎年開催している情景再現事業「七夕折り紙教室」「正月お飾り作り」と、綱島家年中行事の「お月見飾り」の経験を応用する形で対応した。学校連携事業担当だけではなく、各情景再現事業担当学芸員が臨機応変に活躍している。その事業を生かした授業となるので直接の担当者の協力がないと実現しない。

4. 中高校生への対応（【資料3】p.94～p.98）

小金井市立南中学校の卒業記念ボランティアは研究主任教諭の小学生の体験よりも高度で責任のあるものをとの要望をもとに組み立てた。建造物の保護につながる清掃活動については、小学生が茅葺き民家を清掃した際と手順や要点は同じであったが、実技指導ではなく事前に説明資料を渡し、雑巾も各自が縫ったものを持参するよう教諭から指導があった。それを用いて掃除をしている。子宝湯の脱衣籠も丁寧に拭き清めた（【資料3】口絵写真最終頁）。清掃とは異なるメンテナンス作業としては建造物に展示してある展示品（園では演示品と呼ぶ）のメンテナンス作業を「お客様の目に触れる大切な活動」として実施した。小寺醤油店に展示した缶詰の日焼けしたラベルを貼り替えてもらう作業や、店で用いる一升瓶を運ぶ木箱に銘柄の名称を厚紙で型を抜き作り、スプレーペンキでペイントする工作作業がある。これらは、もともと展示業者に発注していたが、そこまでの演示品のメンテナンス予算がなくなかったため、展示業者よりは安価な印刷業者にシールだけ発注をしたり、近在の大工に頼み杉の荒材で木箱だけ製作し、自分たちで当初の演示品を手本にラベルの貼り替えや木箱に銘柄の文字を書くつもりで用意してあった。同様なことを夏期に博物館実習生が来た際にも経験してもらったのだが、驚いたことに、総じて中学生の方が手先が器用で作業の速度も精度も高い。仕上がりの出来も良い。南中の生徒だけでなく、2018年頃に再度博物館実習生と職場体験の中学生を同様に比較した際も同じ様相であった。中学生までは美術や生活科など手先を使う授業は選択科目ではなく毎週ある等、慣れの問題で大学生にはハンデもあるのかも知れない。が、実際自分がしなくてもどの程度そのような作業に時間がかかるものなのか－経験的に理解することも大切なことだと思われる。

高校では都立桐ヶ丘高校の単位取得授業の相談を受けた。美術系の高校なので縄文土器作りの講座の応用で受け入れる方向だったが、のちに縄文土器作り講座がいち早くとりやめとなる状況だったため継続受け入れはしていない。縄文土器作りは、たてもの園ならではの建築関連業者から廃棄予定の解体材をいただいて焼成用の薪にする切断作業や土の調合など下準備や屋外作業準備が結構ある。引き継ぎ時、他の学芸員は既にいくつも事業を持っていたため、この事業は不向きであろうと選択の余地なく後任を決めざるをえなかった。考古学専門の講師を招くだけの体制は維持していたため、正確に遅れずに準備ができれば継続可能なはずだったが、講師が当日行うための準備や園に依頼している準備の意図が理解できなければ継続は困難である。学校連携を継続して行う体制に

は手数としての人数だけではなく適材適所の能力的な部分も重要である。

5. 子どもミュージアムトーク (【資料3】 p.98)

通年の学校連携事業の仕上げとして、園を活用して学んだ成果を3月に「子どもミュージアムトーク」と称してたてもの園のミュージアムトークの時間に児童に発表してもらう企画に最終的につなげる意図があった。しかし平成13年度は応募がなかった。本冊子内でもその原因や今後のやり方についてのヒントを分析して記載しているが、成果を披露する機会は学内で用意を既にしていたり、学校公開日に広く来校者に対して行うなど、学校行事の中での対処もある。すべて博物館本意で考えるべきではないだろう。しかし、この時点では、地域連携事業としての視点から、近隣校にそのような機会もたてもの園で設けられる旨周知し、学習成果の発表や思い出作りとしても協力したい、より園に親しんでもらいたい—という趣旨であった。このようなことを行う場合は、応募がなかったり少ない場合も毎年繰り返し周知し呼びかけることが肝要である。また、多数の応募があった場合、園としては対処が難しい実情は認識していたし、それまでの学校の授業の組み立て方法を拝見していて、それほど応募はないことも予測していた。それらを見越した上で呼びかけたものである。

3 むすびにかえて

以上、3冊の資料を紹介しつつ、学校連携事業創始期のたてもの園をとりまく社会背景を回顧談も含めて述べてきた。当時、共にこの事業に関わった学芸員諸氏の意見はまたそれぞれ違うものと思われるが、このことについて深く相互に議論する余裕なく今に至っているし、また、その後いくつかのエポックになる変革期のそれぞれの担当も、その変革の背景や自身の感想・分析を記録しているわけではない。その後、とくに新型コロナウイルス感染症によるパンデミックの際はどの博物館も映像やネット公開を駆使するなど工夫をしたが、たてもの園も同様である。

現在の「昔くらし体験」は、広く都域全体に来園を呼びかけており、そのメニューは時間ややること、全体の流れ—等、かなりシステムティックに組まれている¹⁴⁾。各校に応じたカスタマイズも原則としてない。筆者が再びたてもの園に着任し、このどの学校にもある意味公平・画一的に行う「昔くらし体験」の受け入れ当番に2015年(平成27)に当たった際、創始期に相談をし合った先生が引率補助に来園した。その機会にこの間の学校の体験授業の経過を伺えたのだが、教える側も世代交代し、若手教諭の生活経験・習慣が以前の先生方とはかなり異なるため、「昔くらし」を教えるにはより準備が困難な状況があるという。また、安全管理面でかつて可能だったものでも今は避けるべきものもある。「昔くらし」の「昔」とはどの時代を指すのか?—郷土学習に昔の道具が取り上げられた際に議論となって久しいが、「昔」の何を博物館として示すのかは、たてもの園の姿勢だけではなく外部要因からそうせざるを得ないものもあったのだろうと考えさせられた。その変革期の当園の担当者は誰で、どんな工夫をしたのだろうか?是非話を聞きたいものである。

たてもの園の「昔くらし体験」は、周回遅れで始めたため先行館に学ぶところが多かった。また、分

館といえども大規模な江戸東京博物館の分館のため、小さく始めたものが時を経て園の体力が戻ってくると大規模館の理屈の援用で拡大され、結果、その後簡略化やシステム化され変質したものも多々ある。内部の者から見ると勢いで広げた結果手に負えなくなりやめただけではないかと思えるものもある－残念なことだがこれも博物館の歴史の一つであり、たてもの園に限らず江戸東京博物館として事業の突然の変更・中止は珍しいことではない。しかし、学校連携事業は、毎年繰り返す学校教育の現場に協力するものである。外部に対する責任と自負を持って今後も工夫を重ね続けて欲しい。

私はこの間たてもの園が変化のエポックごとに、前向きな理由や、説明しがたい理由－さまざまな理由から内容をそぎ落とししたり、微少でも付加しつつ、しかしやめずにずっと続けてきた事業のその時々
の工夫には、他の施設にとっても大変有用なヒントとなる対処が散見していると感じている。江戸東京たてもの園はある意味本館である江戸東京博物館よりも長い歴史があるといえるし、江戸東京博物館自体、もはや新しく歴史がない施設とはいえない。来し方をおろそかにせずに点検・記録・分析し、決して刹那的にならず今後に生かせる事業展開を期待するものである。

【註】

- 1) 網島家担当学芸員は網島家の年中行事展示をボランティアが行うことになっていたため、必然的にボランティア担当を兼ねていた。
- 2) 東京都近代文学博物館、東京都高尾自然科学博物館等の文化施設が閉館している。高尾自然科学博物館は当時のたてもの園と同じく冬季の入館者が少ない施設である。
- 3) 彼らは当時、川崎市立日本民家園のボランティア集団「民技会」の手仕事の技や活動、手仕事のテキスト等を刊行する息長い活動に憧れており、自分たちにも「たてもの園ボランティア」以外の適した名称があると楽しいと考案したのがこの名称である。これから続けていくボランティア活動への期待や意欲が感ぜられる。
- 4) 大勢で使える水洗い場等、団体の児童生徒の来訪や体験に備えた工事を伴う設備は、たてもの園管理事務担当者との調整で、平成12年度に園内のトイレ整備に合わせ旧来の水道施設を整えるという名目で新設し、学校連携の開始に間に合わせた。当時は新収蔵の建造物が建って間もなかったため、設備的な予算が執行できたため助けられた。
- 5) 小金井市校長会会長小金井市立第二小学校校長（当時）の説明による。
- 6) 小金井市立の小学校以外の2校も多摩地域と至近であるだけでなく、毎年たてもの園を利用している常連校である。
- 7) 学校連携事業本格実施年には小平市教育委員会に呼びかけ、参加を得ている。しかし、のちに、小平ふるさと村で昔くらしの体験を始め、小平市からの応募はなくなっている。郷土学習は、より近い場所で行うのが望ましい。
- 8) 「昔くらし体験」準備調査のため、群馬県立歴史博物館の同様な展示と体験企画を見学させていただいたことがある。その際、担当学芸員の神宮善彦氏から、この展示が学校には非常に人気で入館者数が大変多いこと、遠方では県外の松戸市からもバスを仕立てて一日がかりで小学三年生がやってくるとの説明があった。松戸市は興味深い展示が多い博物館なので地元の施設なのに使われていないことを不思議に感じたのだが、「学校で毎週1コマずつその授業を行い1か月かかるものを、見学すれば1日で終わるだけの内容を博物館で組んでいるならば、遠方でも先生方は必ず利用しよう考える」とのご意見だった。この言葉から考えると東京都域津々浦々からの参加は見込めるのだろうが、それだけに、至近の小金井市のマンモス校の来園をお断りしたというのは残念な話である。歩いて来れる学校は何があっても来る。地域を歩くのも郷土学習であるので近隣校は尊重したい対象である。
- 9) 当時の都政下、東京都立近代文学博物館、同じ多摩地域の東京都高尾自然科学博物館が閉館となる。東京都三多摩公立博物館協議会に筆者が出席した折、この自然科学博物館学芸員から「高尾山からの下山者の多く立ち寄る夏季ではなく、雪の残る冬季の閑散期を選ぶような形で抜き打ちで、いかにも場違いなスーツ姿の調査官が訪れるから一目で分かる。結論ありきの調査方法だ」との発言があった。たてもの園も含めてどの施設も入館者数は博物館整理の大きな判断基準の一つとなっていたようである。

- 10) 実は、小金井公園は近隣小学校や保護者が「午後4時過ぎに公園を通らないように」と注意喚起する場所だった。広く茂みや死角があり、人が常に通るとはいえない公園に子どもが遅い時間にいるのは危険であるとの認識である。学校連携で相談に乗っていただくことにより、地域の方が小金井公園をどのようにとらえているか知ることができた。一過性の観光客ではなくその場所に住んでいるからこそ注意する点である。学校連携でのたても園の利用に伴う子どもの自主的な動きに対しても先生方はこのような視点を踏まえて、児童に復習や宿題をする際の注意事項を伝えている。
- 11) これはこれで大変である。学校連携事業立ち上げ時は、ボランティアの朝のミーティングに出席していると職員の朝礼に出られず、園長から叱られる。ボランティアは朝一堂に会している際に伝えないと、「聞いた」「聞かない」「質問がある」の繰り返しとなる。
- 12) 縄文土器作りの講座担当として引き継いだ学芸員が、人を使った委託業務的な作業の経験しかほぼなく人手がないところで手ずから行うのが難しかったため、準備作業に出向いた程度である。小さな博物館は自身が体を動かさないタイプの人には向いていないことがある。
- 13) 蓋つきゴミポリバケツを利用した建藍の甕で、風情としては情景再現として目につく場所には置けない。ただし、江戸東京博物館の「ふれあい体験教室」の藍染めは染事業をしているその他の博物館をこの事業の準備のために調査した際には、「水場の設えもない都会の博物館のやり方として大変工夫をしている」と非常に評価が高かった。たても園では新たな建藍を買えるだけの予算がなかったため、機をとらえて引き取っているが、せっかく長く続いていた藍染め講座がなくなったのは大変残念なことである。経験してみれば分かるが、理屈では建藍は毎日かき回し手入れする必要がある。しかし、2、3日出張で触れることができなくてもそれで完全にダメになるものではない。このため、実際は職員定数が多い施設では維持管理できない素材とは言えない。「体験教室」を開催しているならば、実験のつもりで維持管理方法を模索してみれば続けられた講座だったのではないかと考える。また、楽しいだけでない管理の大変さを参加者に説明し、それを知った上で体験してもらうことも博物館講座で工芸技術を紹介する際の重要なポイントである。
- 14) 例えば、石臼体験には綱島家土間で脚付枠内に石臼を据えて立ったまま粉を挽くものと、吉野家土間にムシロを敷いた上に臼を置き、靴を脱ぎ座って挽く形の二通りがあった。ムシロ上に臼を置き座って挽く場合、他の児童は周りを囲み立ったままその様子を観察できるので、後ろの子からは見えにくいということはないし、画一的でない可変性の高い土間の使い方を知ることができる。しかし、現在は両家ともに脚付きの台に臼を載せて体験している。靴を脱ぐ手間の省略、立ったままの方がより複数人が一緒に挽き手を持てるため一度に体験者をさばけ時間を効率的に使えること、また、ボランティアが高齢化し、座って作業をするのが困難となったこと一等の理由から画一化が進んだと思われる。土間の暗さも高齢のボランティアが目が効かないとの理由で体験時は仮設補助電灯をととしてほしいとの要請がありその意を汲んでいる。どの学校にも公平に対応できているのだろうが、特徴を生かした体験要素が薄らいでいる。

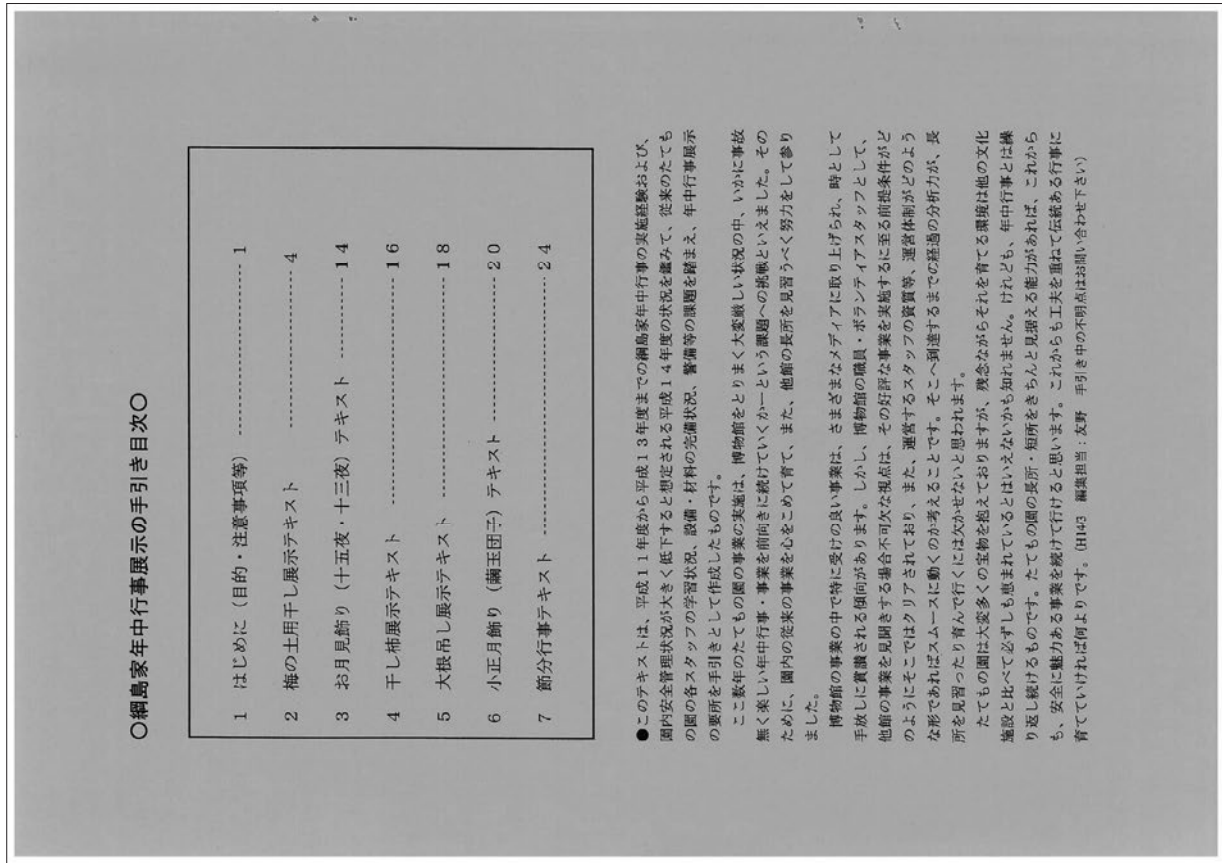
【参考文献】

- 『江戸東京博物館要覧1999』（江戸東京博物館/編、(財)東京都歴史文化財団/発行、1999年7月8日）
『江戸東京博物館要覧2000』（江戸東京博物館/編、(財)東京都歴史文化財団/発行、2000年7月8日）
『江戸東京博物館要覧2001』（江戸東京博物館/編、(財)東京都歴史文化財団/発行、2001年8月10日）
『江戸東京博物館要覧2002』（江戸東京博物館/編、(財)東京都歴史文化財団/発行、2002年8月31日）

【資料1】『江戸東京たてもの園 網島家年中行事展示の手引き』



【資料紹介】江戸東京たてもの園 情景再現展示・学校連携事業等関連資料（友野千鶴子）



伝承されており、また、全国に広く分布します。たてもの園では、小正月の綱玉団子飾りについては、行事に使う植物等の調達の手配を考慮して、小金井界隈の小正月飾り行事の例をとりあげて展示しています。

5 たてもの園の綱島家年中行事として実施・運営するために心がけていること

- ① たてもの園の資源を活用するため、天候その他の環境条件で、資源的制約がある年は、規模を縮小、見送ったり、購入した資源を多く活用するなど工夫をします。
- ② 実施する内容について考慮していること。
公共施設としての事故管理（来園者、従事スタッフすべてを含む）、設備上の制約、建造物の保護を考慮して決めます。公共施設・博物館施設としては、必ずしも留意点に以下の通りです。

- 建造物の保護をまず念頭に
 - たてもの園は「野外博物館」であり、「体験博物館」ではありません。博物館そのものは類似体験的要素を持ちますが、来園者を思うあまりに、本来の趣意に反しては建造物が傷むばかりで、建造物保護の姿勢が来園者に伝わります。この点を留意して運営します。
- 参加型で設定する場合、参加来園者に不公平のない受け入れ・運営方法をとる。
 - 締め切り厳守、抽選などで参加者を決定した場合、その待ちから外れた特別を受け入れをすることは、他の来園者に対して公平性を欠き、また、当人もいつまでもその形のスタックアップもあらかじめ想定された来園者の参加人数に応じてボランティアその他のスタックアップに声をかけているため、臨時の変更が生じると、うまく対応できなかったり解雇で安定感のない運営になります。注意しましょう※
- 家族で年中行事をおこなうのとたてもの園で行う場合の環境の違いを考慮して内容を組みます。（公共施設としての実施のため）
 - ※ ともに質問の多い食料関係や、危険なもの（火や刃物）を扱う行事などについて※
 - 「博物館」は事に深山ありです。館の設備・用意されたスタックアップ、通常の施設、その博物館のある地域（国）の法律等で前提条件が違っているため、同じような行事でも、実施する内容やレベルが異なっています。
 - たてもの園の古建造物には体験用の基準をクリアした台所はありません。また、貸し出し用の野外炊事場とは異なります。いずれの保険衛生基準もクリアしていないため、炊きだしの炊き事を行う資格要件を満たしていません。
 - 文化財を保護するために、建造物や中に展示してある道具類のエキゾチック・プラン・ガロン・燃焼（化学物質の燃焼＝不妊作用があります）を行っているため、人体

- 1 はじめに
この手引き書は、いろいろな人が綱島家やたてもの園での年中行事展示を行う際、行事をうまくおこなうために基本的な工夫事項や安全留意事項を踏まえて行事を運営できるようにまとめているです。「年中行事」は毎年繰り返すものを指す言葉で、このため、何回も年中行事運営を経験した人には経験則からの慣れや工夫やコツがあります。ここには、「たてもの園」で今まで年中行事展示を行う中で蓄積してきた工夫やコツを集めています。初めての行事の運営を行う人はとくに参考にしてください。また、すでに経験のある人、人生経験の中で多く行事を行ったことのある方も、「たてもの園の年中行事」として行うわけで、から、漏れや変わって覚えている点がないか、どこが我が家と違うか、行事を始めるまえの点検に利用しましょう。

- 2 年中行事を行う目的
建造物の中で営まれ伝承されてきた年中行事を行い、古建造物の空間認識や、住み方の理解に役立てます（一空間の認識には、居住面の美学的なものや、行事の運営など儀礼的・精神的な認識などさまざまな要素があります）。また、トピックとして年中行事を行うことにより、その建造物に対して興味を持つきっかけをつくれます。

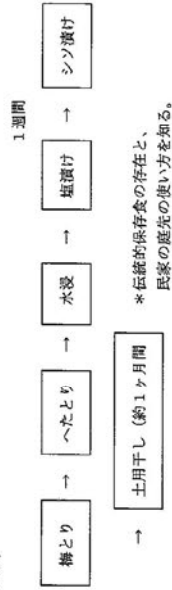
- 3 行事の実施日について
以下の観点で決めていきます。
 - ・ 各家庭でも行事をしたり考えたりしてもらうきっかけづくりをねらう場合。（各家庭でやりやすい行事をえらぶ）
 - 暦上の行事日より先行して行う。
 - ・ 飾り置きに達さない時間帯に終わる行事で、暦上の実施日が決まっている。
 - 暦にあわせて当日に行う。
 - ・ 天候などの影響が大きい行事
 - 適した時期を見に行う。

- 4 行事の例
綱島家はたてもの園の復元建造物の中では、居住者の関心書きが比較的高いにできた民家です。家例としての年中行事は家々の違いが大きいので、綱島家の例を基本として行事を選んで実施してきています。また、農家の年中行事で特徴的なものでも綱島家ではとくにおこなった行事に小正月の綱玉団子飾りがあります。綱島家自身は綱島家のあった世田谷区岡本地域では

梅の土用干し展示テキスト

主な手順と内容・目的

◎塩漬けに一部来園者（10人）に参加してもらい展示に協力していただきます。これらの作業は土用干し展示で農家の庭先の使い方を展示することが目的です。また、参加来園者が自宅で復習し伝統食を伝えるために、作業終了後、お土産に生梅を持ち帰ってもらいます。四半期チラシや園内の掲示で参加者は募りますが、当日先着順で網島家で受け付けます。



注意点・Q&A

①お客様には、生梅をかじることを絶対にすすめない（シアン中毒防止のため）。

例年、「熟し切っていれば大丈夫」とのコメントをつけて来園者に勧める方がいます。自分は大丈夫だったとしても、人の体調により反応は異なるため、安易に勧めるのは考え物です。お勧めして何らかの問題がおきた場合、お勧めしたご本人の責任も問われます。絶対に来園者に勧めたり、「自分なら大丈夫」と、かじらないように。（スタッフが梅をかじる姿を見てまねをする人がいたり、あくまで園の梅のため、その姿を快く思わない来園者もいます。）

②たてもの園のボランティアとして、事業実施の結果の学習をしたいので漬けた梅を食べてみたいのですが？

ボランティアスタッフも園の利用者です。このため、たてもの園では園の現在の状況を考えたとお勧めできません。園で実施した後、来園者の方と同じように、家でもう一度作って復習してみるつもりでやってみてください。とくに平成14年度からは、園内が無人数化してしまいましたため、物品の管理にも慎重が必要となっています。皆が仲良く安全に活動できるように考えて行動しましょう。結果の学習は、生梅を入手して、自宅でもできることを念頭におきましょう。

4

への影響を考えると、建造物本体や建造物内に燃焼時あったものを使っても口に入るものを作っても、食べるのは控えるを得ません。

これは、群馬県立博物館、栃木県立博物館等、石臼での粉ひき等、伝承行事の展示や体験学習の要領が多く定評のある施設でも第一の注意事項としてあげているポイントです。環境・健康に対する近年の意識の高まりも念頭に置く必要があります。

●お客様の安全の確保をする。

→ お客様にかわって職員・ボランティアが事故にあった場合も、設備・体制・意識の欠如を外部から問われることは変わりありません。また、ボランティア活動で実施した催事でお客様に万が一のことがあった場合は、たてもの園だけではなく、ボランティアにも法的責任が生じます（平成13年度研修資料「ボランティア活動と法的責任」参照）。

楽しく有意義なたてもの園の事業、ボランティア活動には、安全の確保は不可欠です。けがや事故がないように慎重に行いましょう。

5 その他

行事をする当日や行事の様子をしばらく展示する場合は、たてもの園のインフォメーションの催事看板に「網島家年中行事 小正月飾り」という具合に掲示をして宣伝します。担当職員は忘れずにインフォメーションに展示目録・期間を連絡しましょう。また、展示期間中は展示物について網島家傳煙中に質問されることがあると思います。疑問点は解説シートや担当学芸員にもたずねてみましょう。



3

●使う道具類

カメラ (復元作業棟2階 4カメラうち講師実演用1) 重石4 (洗って少し乾かしからビニール袋に入れる)、カメラ用木蓋 (網島家座り流しあたり・下屋にあり・解体している時があるので事前に直しておく)、ざる (2〜3個 網島家座り流しあたり・復元作業棟2階)、ポリバケツ (2個 地下ポンプ室: 梅等の事業用の表示あり) ボール (1〜2個 塩をはかるための小さな物も: 復元作業棟)、ござ (6枚: 復元作業棟)、来園者用エプロン (復元作業棟より搬出)、へたとり用竹串 (復元作業棟・職員給湯室)、ふきんや雑巾、石鹸とタオル (来園参加者が手を洗う時使用)、合羽 (雨天時の梅もぎに使用: 来園者分とボランティアの準備協力分)、吊り手付きビニール袋 (下足用袋の新品で可)、台秤 (1階事務室の郵便用の大きな秤)

●材料の用意

梅がなっていないときには塩漬け前日に入手できているように買う (あまり早くても梅に傷がつくのでため)

塩・焼酎 (なるべくアルコール度が高い物) の在庫量点検 → 購入

その他の足りない物の点検 → 購入

2 梅ちぎとへたとり・水浸準備 (漬ける前日)

月 日

必ずしも
ぎでする

八王子千人心同周辺の梅の木の梅を手もぎでとります。高いところは、植木屋梯子でとります。

1.5kg必要

多くとれた場合は、1kgずつ袋に詰め、来園者に梅漬けの日

に配る

* 15kgの内訳

①当日漬け込み使用分 公丸み3匁分 2キログラム×3カメラ分=6kg

* 4カメラ目は講師実演用。実り悪い年は講師用カメラは作らず、お客様のカメラについて扱えます、ある程度確保出来る年は、+2キログラムを講師のカメラ用として準備。

②当日へたとり体験 9キログラム (塩漬け日が雨天の場合は、梅もぎは参加者の意向を聞いて中止することがある

ので、中止時の参加者待ち帰り分兼へたとり体験のことを考えてへたとりのものをとっておく)

※②の梅と来園者が自分でとった梅・計10kg (1人=1kg) でへたとりをして、それを持ち帰る。

* 来園者参加梅もぎ用に比較的とりやすいような場所の梅はそのまま残しておく (10人程度の交代体験作業を考えて ← 志願者には二人を3人ほどを上手にまわらう程度残しておく。あまり多くとらせなくて可。

* 採取した梅は網島家士間へ

* 網島家にて①の梅はへたとりする。②の梅は水洗いせずざるかポリバケツにそのまま入れておく

* 梅はへたとったものは水洗いしてポリバケツに水をはった中につけておく。

* ガール、カメラ、重石など網島座り流し前とロママへ。

* 梅の量を組み立て、足りない場合は前日に青果店にて仕入れ

梅の塩漬け (網島家)

月 日 ()

参加ボランティアの最終集合 13:00 網島家

() 役割分担

午前中: いる人

追加諸道具網島家へ運搬 (秤、ふきん、タオル、焼酎、塩、エプロンなど ()

立て看板準備 ()

ござを広間に敷く (板の間にゴミが散らかるため ()

カメラを焼酎でふく ()

空きポリバケツ網島家はす向かいの水道の所へ配置 ()

6

事前の準備

1 カメの準備他必要物品確認 (梅ちぎる前日あたりまでに)

月 日

() 内分担

●使う道具類

カメラ (復元作業棟2階 4カメラうち講師実演用1) 重石4 (洗って少し乾かしからビニール袋に入れる)、カメラ用木蓋 (網島家座り流しあたり・下屋にあり・解体している時があるので事前に直しておく)、ざる (2〜3個 網島家座り流しあたり・復元作業棟2階)、ポリバケツ (2個 地下ポンプ室: 梅等の事業用の表示あり) ボール (1〜2個 塩をはかるための小さな物も: 復元作業棟)、ござ (6枚: 復元作業棟)、来園者用エプロン (復元作業棟より搬出)、へたとり用竹串 (復元作業棟・職員給湯室)、ふきんや雑巾、石鹸とタオル (来園参加者が手を洗う時使用)、合羽 (雨天時の梅もぎに使用: 来園者分とボランティアの準備協力分)、吊り手付きビニール袋 (下足用袋の新品で可)、台秤 (1階事務室の郵便用の大きな秤)

●材料の用意

梅がなっていないときには塩漬け前日に入手できているように買う (あまり早くても梅に傷がつくのでため)

塩・焼酎 (なるべくアルコール度が高い物) の在庫量点検 → 購入

その他の足りない物の点検 → 購入

2 梅ちぎとへたとり・水浸準備 (漬ける前日)

月 日

必ずしも
ぎでする

八王子千人心同周辺の梅の木の梅を手もぎでとります。高いところは、植木屋梯子でとります。

1.5kg必要

多くとれた場合は、1kgずつ袋に詰め、来園者に梅漬けの日

5

- 176 -

13:00 全員集合 スタッフ相互挨拶・打ち合わせ
塩、カメ、ざる、焼酎 網島家ヒロマ（板の間）ござの上に配置
秤は網島家座り流しの前に出す

13:15 実施アナウンス放送（インフォメーションに事前に依頼しておく）

受付開始（10名まで） 場所：網島家土間入り口すぐそばのヒロマの
きまぐれ

用紙にお名前・ご住所を書いてもらい、受け付けたい見印にエプロンを渡す。
「網島家をこちらになっただけ、受け付けたい見印にエプロンを渡す。」

13時半になったら、網島家の庭へお集まり下さい

13:30

(1)・はじめの挨拶、スタッフ紹介（ ）
・網島家と年中行事の概説、食生活や慣習の中の梅について説明
（ ）

網島家の庭・土間・板の間どこでもよい

※10人に満たない場合も遅れての受け付けはここまで。以降は受け付
けない。

受け付け役（ ）は、ここで受け付け解除

(2) 梅干しの作り方についての説明（ ）同じ場所に集って
スタッフ全員土間のあたりで説明を一緒に聞く。
梅干し作りの再確認のつもりで真剣に聞きましょう。

作り方の説明を担当する方へ

*伝統食は各家庭の個性があるため、今回のテキストを丸暗記
するのはかえってむしろ悪癖になると思います。

ただし来園者には目安としての作り方を説明する必要があり
ますので、テキストの内容が自身の経験と違う場合は、その旨
を一言添えて、「ただし、今日はテキストの例で説明します」と
前置きをしてください。あちよこにあたるテキストを見ながら
話しても、見た目が格好良く体裁が整います。

(3) 梅とり（雨天時は、するかどうか参加者について決める。合羽を貸す）
・2班に分かれて 1班 → （ ）
2班 → （ ）

「貴重品以外の手荷物はこちら（ヒロマ流し近く）に置いていただいて
結構です」 ← 荷物着来たとり用の梅をざるに入れて板の間に出す
当番が残る

※前日に行った梅もぎの話。家庭での梅もぎの思い出話があればよい。

・梅を探りながら、道宣、参加者に指導やこつなどお話しして下さい。

・とった梅は手つきビニール袋に全員の分をまとめて入れておく

●厳守事項●

生梅を「そのまま食べられる」

「このくらい熟していればかじっても大丈夫」等
来園者にすすめないこと

*梅の生食は生命に関わります。

また、人の体調は他人にはわからないため、「大丈夫」とは限
りません。このため、この場面では、経験則で察知しないよう
ぐつとこらえる。

13:50

網島家残り準備兼参加者の荷物見張り（ ）
塩漬け体験用の梅を水からあげて3等分にざるにあけておく（ ）

14:15

網島家へ戻ってとった梅と昨日とりおいた梅のへたとりが済んでいない
方のへたとり。
へたとり指導（ ）

14:25

梅の水浸体験（網島家はすむかいの水道でへたとりをした梅をポリバケツ
やたらいで洗う。洗ったそのまま水につけ置く。

*バケツやたらいの数で適量に分かれる。もしくは交差で水浸りする。ある
程度洗われたら、そのまま水につける。

※梅の水浸の意味についてお話し（ ）

青梅にはシアン（青酸=あく）があるため、生食しないように、水浸けの必要性、生活の知恵であることを必ず触れてください。

14:30 裏方＝塩を3カメ分はかりボールにとりわけござの上へ（各400g×3カメ）（ ）

3つに取り分けておいた昨日水づけした梅を（=これから漬ける梅にあたります）ござの上へ（ ）

14:50 来園者梅を洗い終い終わり網島家に戻る（洗った梅はポリバケツにつけたままその場においてくる）。

*これから生梅を漬けるので石蔵で戻る前に手をきちんと洗ってもらうこと。

*網島家に集まったら3〜4人の組に分かれる（3班になるように）。

梅漬体験開始！

各班のカメを決める。皆講師の説明とやることが見えるように座ってもいい、最初の説明は一班のカメを使って、次の説明は二班のカメを使って、というように、具体的に少しやってみせながら教える。講師がやったカメも、もう一度そのカメのお客様にやってみよう。

講師＝（ ）

(1) 殺菌のためにカメを塩酢でふく

*一度拭いてありますが、一応拭くところからやってみてもらいます。「殺菌の効用＝カビが出ない」

*皆が梅の塩漬をしている間に、お客さんが洗って手洗い場のポリバケツにつけておいた梅を、一人1kgづつはかり、土産用にビニール手袋に詰める。（ ）

15:15 （塩漬終了）

梅の土用干し展示の今後の説明（ ）
アンケートと鉛筆配布（ ）

15:25 終了

※ アンケート回収とともにエプロンを回収（土間入りの近くのヒロミきね（ ））
おみやげの梅を渡す（ ）

後かたづけは「参加スタッフ全員」
ザルやカメは干して水気をとばしてからしまします。

※漬けたかめは新聞紙で口をふさぎ、紐でしっかりと結わえて網島家板の間隔（座り流し近く）においておく（直射日光の当たらない風通しの良い所）。
網島家の焼酎当番となった方は、様子を見てカビが出ていないようでしたら、エッセンスですぐ取り出してしまってください。水が早く上がれば上がるほど微びにくいです。

※ 進行は早く進めば早く進みましょう。

お客様は急いでいる場合が多いので、時間をのばさない

梅のしそ漬け

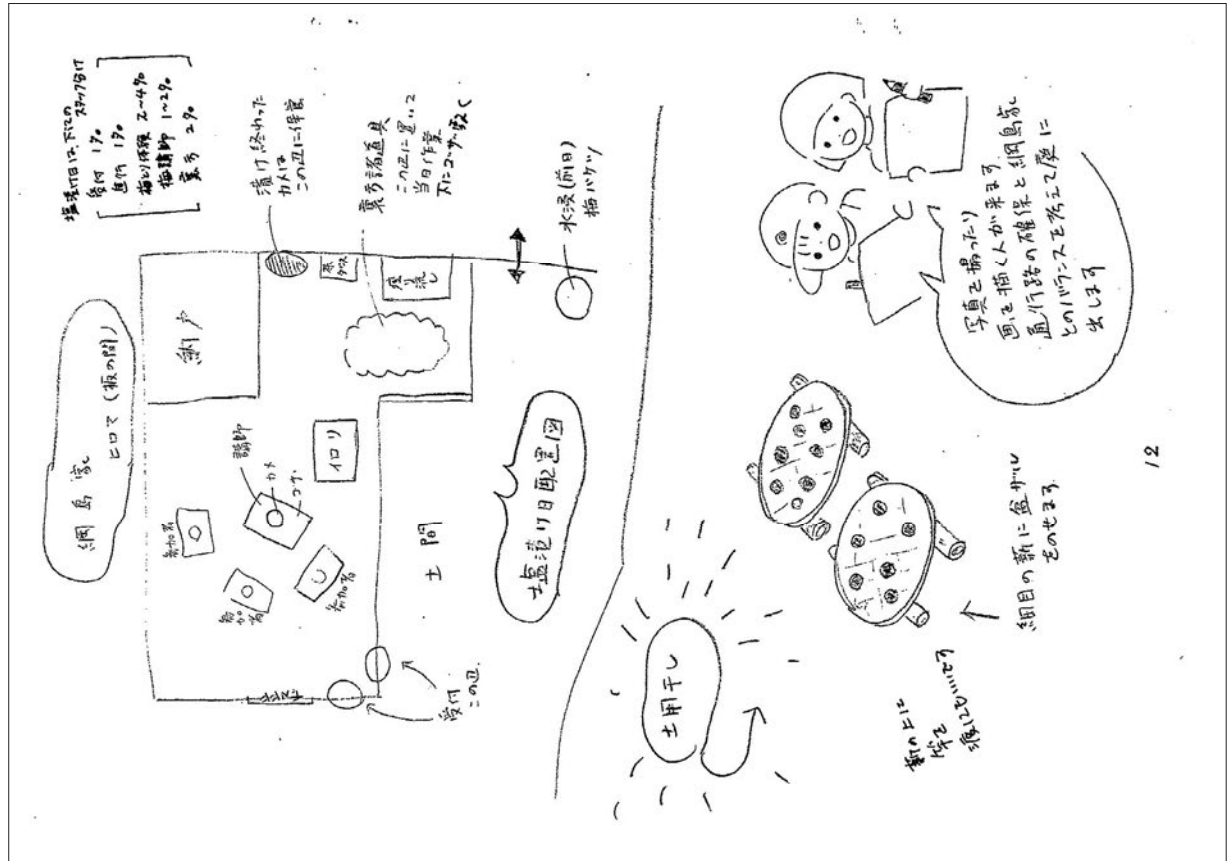
月 日（ ）

梅の塩漬から約1週間後に赤い色をつけるために、塩でもみ込んだシンを梅のかめに漬け込みます。これは、小さな作業なので、お客様に広く宣伝して一緒にすることはありますが、シンをみみ込んでいる様子を見てやりたがる方がいらしたら、一緒にやってみてください。また、お客様に積極的に見せてもいい状況でしたら、放送を入れるようにします。いずれにせよ、シンの汁が服に飛ぶと落ちなくなりやすから、お客様には一言ご注意を。

必要物品・材料：すり鉢（大）2個、塩

※シンを水で洗って葉をむしり、塩をたくさんふんずけてすり鉢の中でもみこみますが、このとき、1回目のシン液は必ずすべて捨てること（砂やゴミが混ざっているケースが多いので捨てます。口当たりに影響するだけではなく、カビのもと。特に、高級といわれる箱瀬茶葉は、一般的に洗っても砂が落ちにくいので注意）

※茶葉はカメの中の上に置くだけでよいのですが、梅の量が多いときは液が回りにくいののでまんべんなく散らすと色がよくまわります。
急むらが出ては素直です。失敗ではありませんが気にしないで。



12

梅干しの作り方

材料

梅 10kg 塩(梅の20%) 2kg

※アドバース：梅干しは「梅1升(=約1.8リットル)に塩3合(1合=1升の10分の1)」とたえます。昔はもっとしょっぱい。

*塩は何でもよいが、粗塩の方が味が出る。
焼酎...1リットル...重石...1.0kg。(使わなくてもよい)。

- ① 梅は水に一晚(10時間)くらいつけておく。
とくに、青くてかたそうな梅は、水につけてから5分ほど熱湯につけ、さらに、水にとって十分にさます。
- ② 水につけた梅をボールに入れて混ぜ合わせ、焼酎を加えて全体にからめる。
少しづつ塩を加えては、梅全体にまんべんなく絡めるようにして、かめか甕に入れて押しふたと重石をのせて冷蔵庫に土用の日までおく。

※ とちゅうでカビが出てしまったら? → こまめにすくいとる
※ 梅のおつゆは? (白梅酢) → しょうがをつけた再利用

③ 「土用干し」

土用になったら、盆かすだれに梅だけをとりだし、重ならないように三日三焼干す。 → 塩の白い粉を吹きます。

- ④ 梅全体にうすうすとしわがよって、しんなりとなってきたら、
②のつけ汁にもどして、そのままつけ込んでおく。

※赤いシソを入れてみよう。

赤いシソの葉 5kg
塩(赤シソの14%) 3カップと1/3
白酢(塩づけした梅の汁) 10カップ

シソの葉を洗って、すり鉢に入れてから、塩を加えて手で力を入れて強くもみ(塩づけ)、出てきた黒い汁を捨てる。
白酢をすり鉢に入れてさらにもんで、きれいな赤紫色になったら梅の塩づけに加えて色をつける。

11

梅の土用干し

月 日 () ~ 月 日

土用から三日三晩梅を干しますが、たてもの園では展示のため、なるべく長く干します。土用と梅雨明けがうまく合わないことがありますので、土用を迎えても梅雨明けがまだでしたら明ける待って干し始めます。

網島家の庭の通行の妨げにならない、日陰にならないところ干します。農家の庭が干し物など作業場としての役目があったことを見学者に知ってもらいます。7月20日頃に干し始めたことと、8月初旬くらいまでは晴れているときは庭に出します。展示の終わり頃には塩をかなり吹きます。

必要物品：盆ざる（網島家下屋取柄） 2、3日前に落って乾かしておきます。
盆ざるをのせる丸太（薪の中から、細めの丸太を選び、庭に横にいくつかけさせてその上に盆ざるを並べ、濡かきして置きます）

(1) 土用干し初日

カメラから梅干しと紫蘇を出して、盆ざるに置き、庭にならべた薪の上に盆ざるを置いて干します。カメラは押し蓋はしましうためによく洗って干します。

盆ざるは活動終了時に部屋の中（庭り流し前）に新聞紙を敷いて（＝梅の赤い色汁が最初のうちは床に落ちるため、）取り込みます。上にも新聞紙を軽くかけておきます。

(2) それ以降

2週間程度は展示しますので、朝、庭に出す。夕方の取り込みを繰り返します。雨の降る日は外に出しません。また、にわか雨等ある日は取り込んでください。担当学芸員が展示終了の指示を出すまで続けます。

(3) その他

展示中・とりこんでの保管中に来園者が持つていってしまったりいたずらをする様子でしたら、張り紙やとりこみ場所を検討する必要があります。そのような場合は、職員に様子を知らせましょう。

お月見飾り（十五夜・十三夜）テキスト

主な手順と内容・目的

◎お月見は秋の収穫祭の意味合いがあり、茅葺き農家での展示に適した行事です。しかし、農業を生涯とする家以外でも、月を愛でる風は広く親しまれ受け継がれ、お子さんの小さな時分にお月見の飾りを飾った経験のある方は多いのではないのでしょうか。

現在、ススキも身近な場所では入手しにくくなり、十五夜十三夜を行う機会も減っていると思われ、この行事は、多少供物の種類や供え方を変えても意識を促すといえれば伝承しやすい行事です。たてもの園では少し早めに展示を始め、見学者の方に十五夜十三夜の風情を思い出し頂き、各家庭で工夫して行ったり、贈り物の多様性を認識してもらえ、ご希望のお客さまに伝えて頂ければ幸いです。

網島家の調査に基づき、別図の形で展示をします。植物は、園内の物を使い、ない物は購入調達します。一旦し、解説シートにその旨書くので、無理に購入しなくても（欠ける物が時として出てくれないません）。参考までに、網島家で実際に飾った供え物は次の通りです。

ススキ・ワレモコウ・ガマズミ（国産名称＝ヨトドメ、ヨットメ）
里芋、栗、柿（各15個づつ）
御神酒（湯呑み茶碗に一杯）

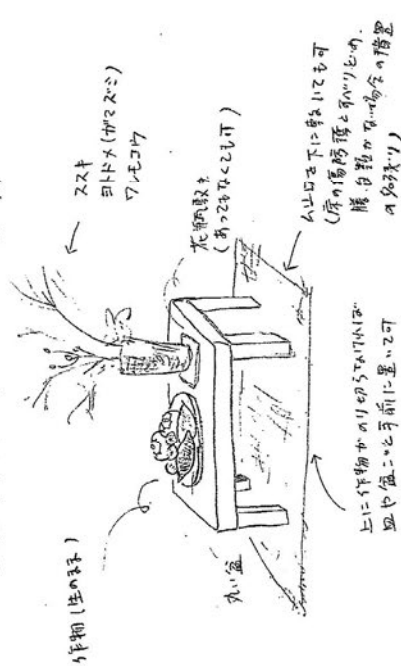
たてもの園では展示に際して次のように対応しています。

- ◎ススキ等植物類 → ない場合は買う。花屋にもない場合はススキのみ確保出来ていれば可。他の花を入れて華美にならないように注意。
- ◎里芋等作物類 → 15個にはこだわらない。里芋が穫れない時や、十五夜・十三夜で作物の穫れ具合が異なることからサツマイモ、栗等が入ることもある（れいれい物や芋類）。サツマイモと栗、里芋は園内の物を使う。型・柿は購入。量が足りていれば、無理に多くの種類を購入して供える必要はない。
- ◎御神酒 → アルコールは展示に適さないで出さない。しかし、展示をしたい場合は、代替えで湯呑み茶碗に水を入れて添えても良い。

十五夜・十三夜飾り

☆上ツて種々の面々があつた室内（板の間）に
外に月夜を飾る

- ・ 才せん（ヤブタバコなど、鈴や籠で飾る）
- ・ ススキエ工可花瓶（ビニール瓶でも可）
※ 網島京口 比較的ススキ屋敷のため、展示では花瓶を模用
- ・ 作物類を盛る皿や盆（かいもの）
- ・ 団子は網島京口は供えられ、（古い面々可）



☆ 行事の解説シートを飾りかたに置く（風には飛ばないよう）
石等で押さえる

☆ 最終日に作物は、ビニール袋（平付）に分けて入れ、
行事の解説シートの中に入れて、来園者に配る

☆ 天井が低いので、ススキは高くいけること（本来外に飾るが、か
がらすや出し入れが容易で、この物にはいい）

干し柿展示テキスト

主な手順と内容・目的

◎木枯らしが一番が吹いた頃の柿を利用して、干し柿吊しを行います。干し柿は、渋柿を甘く軟化し食べられるようにする生活の知恵であると共に、水分を抜き、かつ糖分が増すことにより保存が利く伝統的な保存食の一つです。大変貴重な物ですが、甘みと保存に限りがあるかつての暮らしでは、お菓子にあたるお茶漬けとして人気がありました。この時期、新聞等にも干し柿の風情が報じられるため、たてもの園での見学と併せて伝統食の存在を再認識するきっかけとなるでしょう。

たてもの園では、今では珍しくなりつつある「軒」の存在と「軒先の使い方」等、暮らしぶりと建物の不可分な関係について理解を促すためにこの展示を行っています。

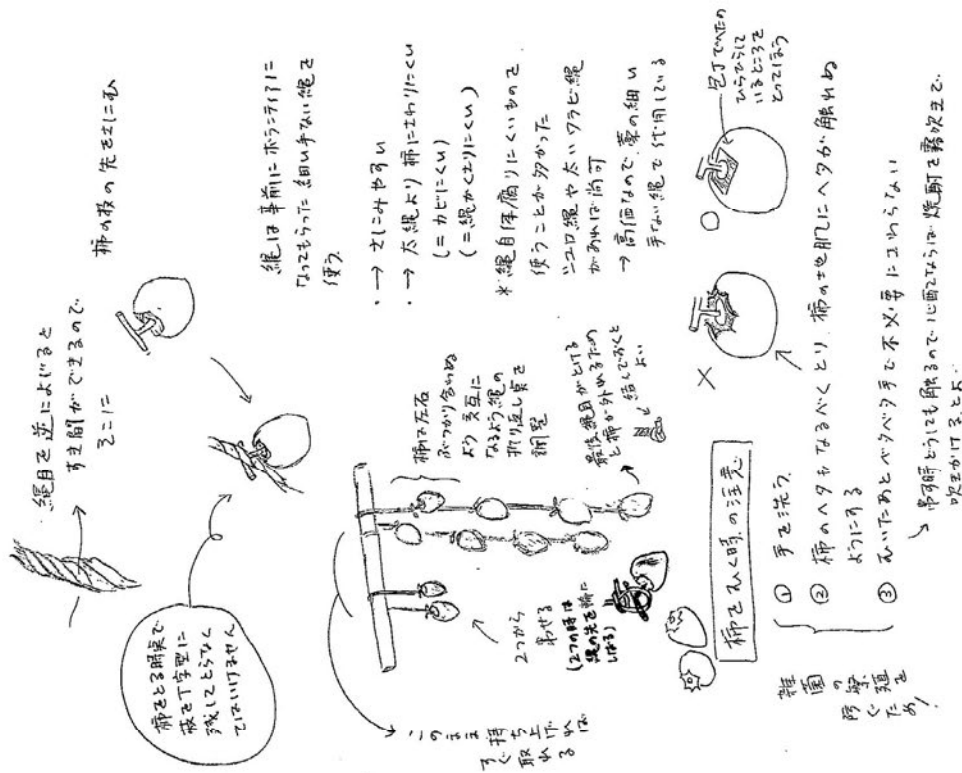
なるべく多くの人に観覧していただけるように要年1月いっぱいまで展示することが理想です。少し長めにすすように心がけて下さい。

注意・必要物品

- 1 柿をもぐときは、別園にあるように、枝を付けてもぎます。（高校生2本程度、植木庭椅子1）
- 2 柿を吊す綱は、手編みの綱（吉野家にある物を使います。使って量が減ったら、枝箸のある人に伝えて作ってもらい補充しておいて下さい）。
- 3 柿を割く果物ナイフ（復元作業棟準備室に沢山あり）は園の物がありますが、使いやすしいものがあれば持参して頂いて結構です。
- 4 柿が不作の時は実施しないことがあります。
- 5 柿が不作の場合は、いくつでも穫れますが、吊しきれなくなるため、徹底的にもぐ必要はありません。最低30個程吊せば形になります。
- 6 たてもの園の柿は、本来「樽柿（樽貯に漬けて渋柿を甘くする方法）」に適した柿で、干し柿に向いた品種ではありません。園の柿を使うということで、現在はこの形で展示をしています。お客様に指摘されたらそのように答えて下さい。
- 7 柿を吊す軒：網島家西側の軒に吊すこと。南側（＝庭側）の軒に吊すと、南の方が日あたりが良いので、あたため過ぎて腐敗してしまうことがあります。このため西に干します。雨は大根干しのために空けておきます。

干し柿

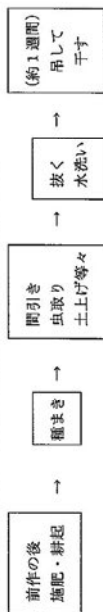
風通しが良く、確かな直射日光を浴びるため、網島家西側の軒に吊ります。(産例は大根用に吊ってあります)



大根吊し展示デキリスト

主な手順と内容・目的

◎干し柿と同様、保存食の存在や農家の軒先の使われ方について展示します。この大根は、沢庵を作るために吊して干すわけですが、たてもの間では、干し上げる所までを展示します。大根は、従来展示してある所にか目玉に付きませんでしたが、近年、畑の観察など、農家の学校が農家の見学と併せて興味をもって見学に来ており、今後の展覧が大変楽しみです。また、網島家の土間に沢庵並んでいる大根は、漬物の樽を想定した展示です。併せて説明すると良いでしょう (普段使いではない大根の例にあり)。



必要物品・注意点

大根の種類：虫に強い品種を選ぶ場合も多く、必ずしも沢庵に最も適した品種を選ぶとは限りません。

荒圃：大根を吊るときに使用 (網島家の木の目の傍にあるものを使用する) 藪やむしろ：水洗いした大根を仮置きする (網島家下屋にあり)

大根を吊る藪割のたわし：藪を使って作る。学校児童の参加がある場合は、数多く用意

たらい：網島家の井戸のたらい使用。学校児童の参加がある場合は、別途搬出

※網島家年中行事のうち、大根吊しは近隣小学校が大変興味を示している行事のため、種まき、間引き、抜き・洗い・吊し、については、児童の参加があります。その際は、追加応援を他のボランティアにも募る場合があります。大根や耕作、漬物についての知識をおもちの方は、子供にお話をして下さい。

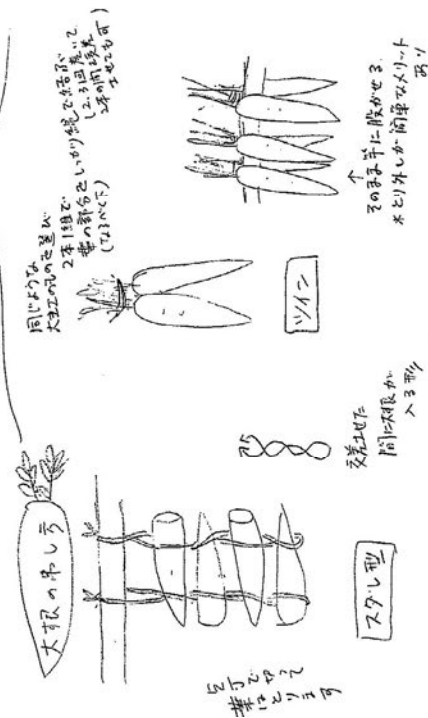
大根吊り

大根は、網島家 南側の（＝庭側）の軒に吊し置

大根を抜く時、運ぶ時の注意

→ 葉も大切に倉料で、葉を折らずに、通すように、通すように扱え、取ったら逆さにして置かす

- ① 大根の根の周りに土をかける
- ② 葉を折らず、大根の上の葉を、両手で握り、逆さにして置かす
- ③ 葉を折らず、大根の上の葉を、両手で握り、逆さにして置かす



小正月飾り（蘭玉団子）テキスト

主な手順と内容・目的

◎ 1月14日～15日を中心とした時期を、1月1日（元旦）の大小月と比して小正月と云い、この時期には農作物の豊作を願う伝統行事が集約されます。小正月には「飾り物」「物作り」と呼ばれる花や作物に見立てた飾りを作り飾る習慣があり、「小正月飾り」と一般的に呼ばれています。「蘭玉団子」と呼ばれる、白い団子を木の枝に飾る行事も小正月の飾り物の一種です。

蘭玉団子は全国に広く分布し、「餅花」「蘭玉」など様々な呼称や色や形も様々にあります。年のはじめに家の隅に見立てた団子を木の枝に花のように一面に飾り、蘭や作物が良く殖えるように願う行事で、「子抱行事」と呼ばれるまじないの一種です。網島家のあった世田谷区岡本でも蘭玉飾りを行っていましたが、家々により違いのある年中行事の特徴から、何故か網島家では蘭玉だけは作りませんでした。しかし、農家の生活と年中行事の理解には、豊作を願う小正月の展示は不可欠なため、たてもの園の網島家での年中行事展示では蘭玉団子飾りを展示する方針です。

蘭玉団子は色や形、団子を刺す枝の種類など、都内でもいろいろバラエティーがありますが、たてもの園の立地で入手しやすい材料を使うために、小金井市西町の蘭玉団子飾り（地元ではメエダマと呼びます）の形式で展示をしています。

（※解説シートにもこの点をお祈りして展示をしています。園野町のように葉がついた枝に蘭玉を飾る形は比較的珍しいため、来園者にもそのように説明をして下さい）

なるべく長く、1月中は展示をします

大塚家聞き書き・展示に必要なもの

小金井市関野町 大塚家の小正月「めえだま（蘭玉）」

小平市関野町 大塚さん宅では、昭和30年ころまで「家がよくとれるように、前祝い」で蘭玉団子の飾り付けを小正月にしていたそうです。養蚕は正枝さんが嫁にきた昭和23年の時点ではもうしていないそうですけれども、年中行事だけはしばらくの間、繰り返し続けていたのです。「まめだま」ではなく「めえだま」と行事のことを呼んでいたといひます。

「めえだま飾り」の材料

「めえだま」に使うものは、うるち米の粉、ごさ、石臼、櫛の木（シラカシ）みかんでした。1月13日までは隠膳（おかば）のお米を石臼でひいて団子を作る粉の準備を済ませておきます。14日の朝に家の周りから「櫛の木」と呼んでいるシラカシの枝を切ってきて、神棚のそばにござを敷いてその上に置いた石臼の穴にさします。「櫛の木」は、関野あたりの農家ではどこでも植えていたそうで、その年の「恵方」から切ってくる、といいいわれましたが、大塚家では自宅の「隠膳森」からとってききました。櫛の木は、昔は薪にして燃料に使う木です。また、隠膳森と呼ばれる家の周りの木は、防風や茅葺き屋根を飛び火から守る防火林の役目があり、ケヤキや櫛の隠膳森が多かったといひます。

シラカシの木：園内のものを事前に測っておき当日の朝切る
上新粉：300g×8袋程度
みかん：S玉 7個入×2袋

「めえだま」作り

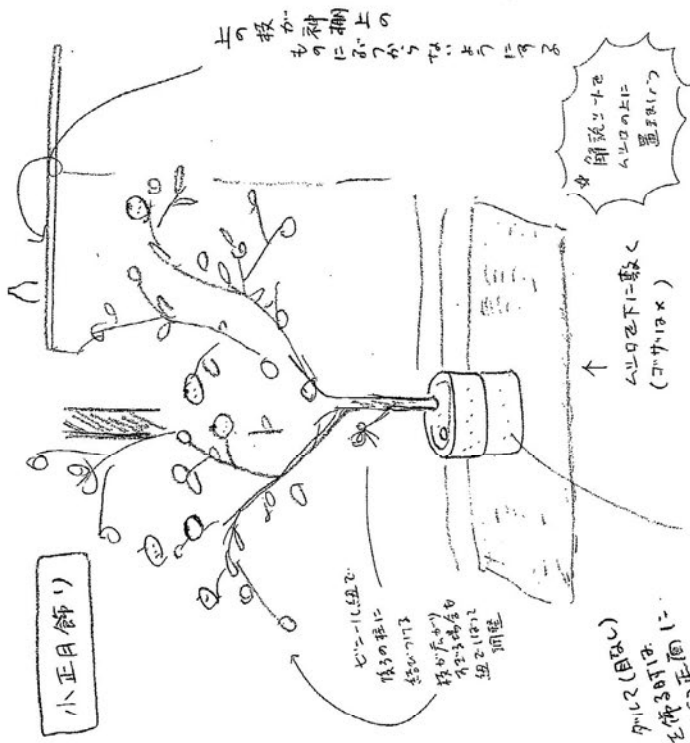
熱いお湯を木鉢に入れた粉に注ぎます。熱いけれど粉を細かくボロボロになるまで煮早くかき混ぜるのがコツです。それからこね始めて、耳たぶ位の柔らかさになったら、団子の形に丸めます（大塚家では、ただ丸めるだけではなく、餅のように少し握くこともあったようです）。2つ一度に丸めると形良く丸まるそうです。丸めた団子を蒸籠（せいろう）で蒸して、蒸し上がったたら柔らかいうちに枝に刺します。蒸し上がりをさす前に団子でおくと団子に照りがついてきれいです。

蒸籠：網島家の土間棚にある丸蒸籠
湯を沸かす道具は？→ 千人同心庵（網島家ですと混み合うため）
木鉢（団子を練る時に使う）2〜3個（復元作業棟準備室：前日までに出出して水洗いして乾かしておく）
フキン、雑巾、団扇等（復元作業棟準備室にあり）
ゴザ（粉が散るので床に敷く：復元作業棟準備室にあり）

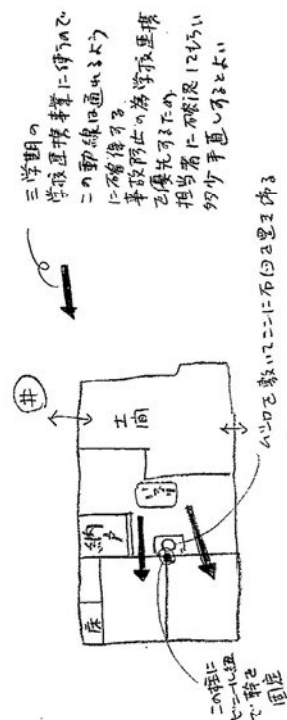
飾り付け

白い団子の他に、ミカンを枝に刺します。ミカンは重いのので木の枝が垂れないように、

2.2



石臼
(千人同心の土間にある石臼使用のこと)
網島家 菅野 穂波氏の学校使用不可



2.1

節分行事テキスト

主な手順と内容・目的

四季のうち、それぞれの季節が分かれる節目の日を「節分」と呼びます。立春・立夏・立秋・立冬の前日が節分にあたりましたが、現在は立春の前の日を節分と呼んでいます。不安定な季節の変わり目には、悪いものが寄りつかぬよう様々な催しが行われますが、節分の豆まき、鰯の頭を焦がして門口に掲げる「ヤイカガシ」の行事もその一つです。この行事では近隣の方にも参加して豆まきを行います。網島家の調査では、豆の撒き方などに、古民家の中に息づいていた空間認識が伝承されており（格の高い部屋から順に外に撒いていく・屋敷神、井戸神などの概念がある等）、人がその空間にどのような観念を抱いていたかが知られてもらい絶好の機会です。豆まきに参加された方の希望者にヤイカガシを差し上げます。

◎用意するもの（道具まで）に材料は要領、道具：午前中にヤイカガシ作り、午後豆まき、ウルメイワシ（もしくは目刺し） 約40尾（うち4尾は、網島家、天明家、吉野家、千人同心の家の門口に飾る）

株の枝（園のものを花バサミで切る10～15cm 株と同じ数）

*株があるもので悪いものが入らないように防ぎます。

新聞紙（作ったヤイカガシを来園者に配る時に包む）

豆（大豆一煎ったものを買う。節分近くには安売りが出ている）150g×7～9袋

升（学校連携事業用の児童の体験用のものを借りる）2～3個

紙で折った升（広告で当日折る）

注意

- 1 鰯は頭だけ使います。胴体は袋に入れて担当職員に戻して下さい（くれぐれも鰯臭いで後かきで〜）
- 2 鰯の頭は団伊豆で焼く。七輪であぶるときは、必ず「網島家にある七輪」を使用。
- 3 木の升に予め豆をあげて午前中に神棚に上げておく。
- 4 来園者には木の升は渡さない。紙で折った升に豆を移して来園者には配る（升が紛失したことがあるため）
- 5 建造物（網島家、吉野家等）にヤイカガシを取り付けるときは、既に付いている釘にくくりつけるか、テープで貼る。
- 6 建造物内で豆をボリボリしないようにお客様には予めご注意ください。
- 7 鰯の頭は必ず火であぶる焦がすこと（焦げ臭くなくにはヤイカガシの意味がありません。焦がして焦がすのでヤイカガシ。焦げた匂いの臭いで邪悪なものを退かします。案山子の原型です）。5月5日の菫餅、冬至のユズ湯の香りなども例に出してご説明すると良いでしょう。
- 8 ※ヤイカガシの作り方、豆の撒き方は別図を参照：豆を撒く時は、けし（鬼は外、福は内）

なるべく小振りなものを選びます。

大堀家では白い団子ですが、お宅によっては赤や緑で染めた色を団子につけたり、丸い団子だけでなく、古い蔵の形に団子にぐねれを付けたり、関野あたりでは「さびまゆ」と呼んでいる、2匹の豆が一つの顔を作った形（＝大きな団子）のものを一つつくって刺したり、各家で少しずつ違いがありました。

※網島家の飾り付けは別図参照

必要物品：石臼1基（必ず千人同心の家の土間の石臼を使うこと）

ビニール紐（木の固定補助に使用）

ナタ（木の調整に使う：ポランティア設置会場にあり）

筵1枚（石臼の下に敷く：網島家下屋にあり）

運搬1（目なし：復元作業準備室）

1月15日には、「めえだま」を片づけます。みかんや団子はお腹の中に、櫛の木は材料にしてしまいます。大堀家では、団子は焼いて柔らかくして少し漬けて、醤油を掛けてまた焼いていたのだといひます。地方によっては、櫛の中で砂糖と醤油を絡めて食べたり、砂糖醤油に片栗粉を混ぜたりいろいろありました。14日、15日に行われる「どんど焼き」などと呼ばれる火祭り行事でこの団子を焼いて食べて食べると風邪をひかないーという伝承を持つ地域もあります。

小正月の櫛玉飾りは、農業農家の減少や、家屋の変化に並び、目にすることが少なくなった年中行事です。天井が高い古い建造物、現在よりも採光に限りある条件の古民家の中では、現在の私たちが感じるよりも、この櫛玉飾りはいっそう明るく華やかだったものであつたと思われます。春の訪れ、豊作を予感させる楽しい行事であつたといえましょう。




25

節分

ヤイカガシ (ヤイカガシ、ヤイカガシ、
鯉の頭刺し などと呼ぶ)

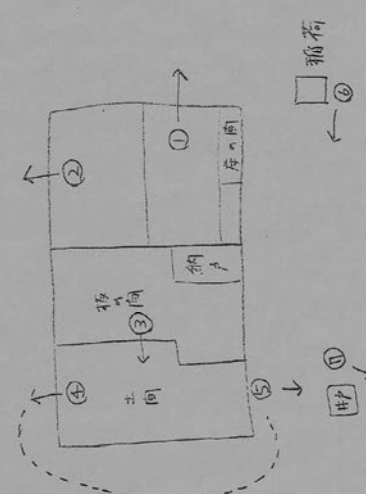
薬内子(の原型)



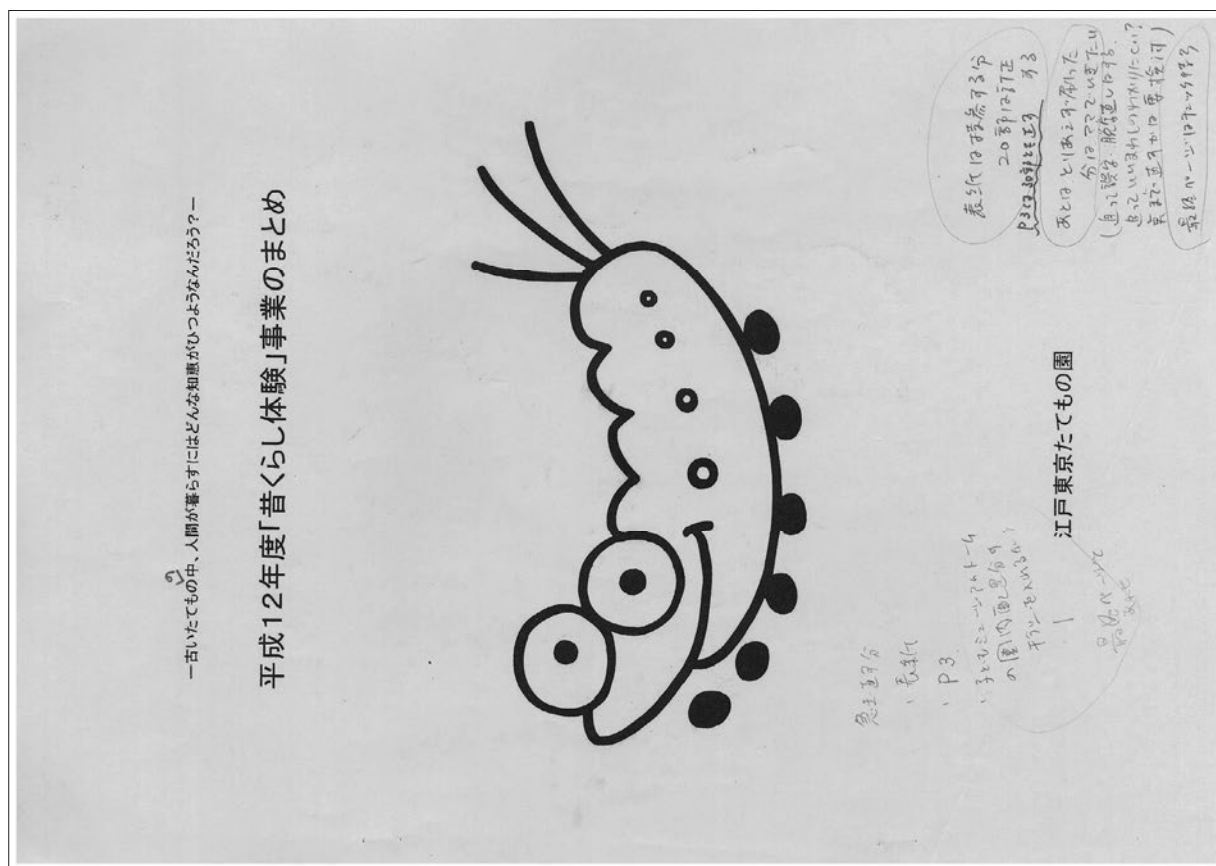
マメカガシ 枝に
イワシ (サルメカガシに生ずるか
目刺しで可) の頭を
胴から切り離したものを (目刺しは
ちぎれは可) を刺して
枝にさして、火であぶって食べ可

火焦下(煎)くはさのかかボカント、火に焼りにくければ、先に
焼いて焦かしこから枝に刺し取り可

豆撒玉の順序



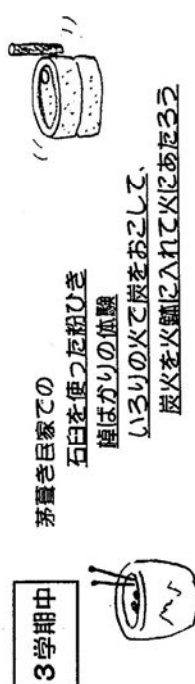
【資料2】『平成12年度「昔くらし体験」事業のまとめ』



参考資料1



- 「いろいろ」ってどんなものだろう?
- 「がまど」は何をするところかな?
- 「藁ばがり」はどんなふうに使うのだろう?



※体験希望を受け付けています※

～日程詳細は、下記にお問い合わせ下さい～
～その他の普通員の見学相談も受け付けています～

〒184-0005 小金井市相町3-7-1 都立小金井公園内
江戸東京たてもの園 学芸係：昔のくらし体験 Ⅱ042 (388) 3317
◎小学生は入園無料・引率の先生は入園料免除申請ができます◎

1 はじめに

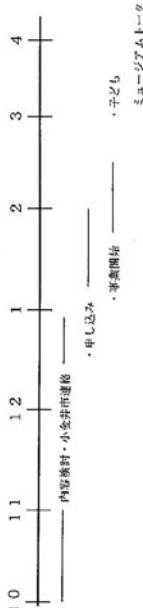
江戸東京たてもの園は、現地保存がむずかしい文化的価値の高い建造物を移築・保存・展示することにより、貴重な文化遺産として次代に継承することを目的に、1993(平成5)年に開館しました。その前身には、武蔵野の生い立ちをテーマに活動を続けてきた武蔵野郷土館があり、たてもの園の展示物には、郷土館から引きついで建造物、考古資料も含まれています。学術検証を経て策定されたたてもの園の町並み計画により、現在27棟の建造物を展示公開し、今後も町並みを整備していく予定で、当園の受託資料である建造物の持つ迫力、四季の移り変わりの中にある臨場感あふれる展示は、屋内型展示施設にはまれなものできかない特色・効果を持っています。

平成12年度、当園では、学習指導要領の大幅改訂にともなう学校教育における伝統産業をはじめとする伝統的文化やくらしの学習、平成14年度本格実施の総合的な学習の時間に対応した博物館における参加体験事業の充実等の課題に対処していくために、文化財としての建造物の特性を考慮しつつ、博覧会事業の体系的再検討・試行実施を行いました。この報告は、平成13年1月から3月にかけて小金井市教育委員会の協力を得て行った、たてもの園の建造物を活用した「昔くらし体験」事業の一層の理解と活用をはかるために作成したものです。

2 平成12年度昔くらし体験実施スケジュール・観覧等

【スケジュール】

平成12年度試行実施の本事業は、年度途中での試行実施の決定となったため、柔軟に対処可能なように、一般公募型での募集方式を採用しました。ただし、事業の案内は小金井市教育委員会に限定して配布いたしました(参考資料1)。この募集のお知らせの配布には、小金井市教委指導室にご協力いただき、教委からの各校への連絡後は、たてもの園へ直接連絡のあった各校個別調整といたしました。また、本事業の市教育委員会への依頼以前から、総合的な学習などの授業活用で当園と接縁が頻繁にあった学校には、個別に先生類にも連絡をとるようにしました。



【規模・対象】

●例示で提示した内容が小学校3年の郷土学習の範囲に大きく重なることから、定型的な通常授業での来園も見込まれ、各校の交通費などの制約が予想されたため、当園が実施する小金井市教育委員会に連携先を限定した案内周知をしました。小金井市を希望したその他の町山として、市の文化財センターが民家園内性格を持つ施設ではないこともあげられます。性格の違いから当園とプログラムの着眼点が観合する度合いが低く、学校がいろいろな施設を効果的に利用する形でよりよい連携体制が組みめると考えました。また、小金井

平成12年度昔くらし体験参加記録

(表 1)

参加日	学校学年	参加員数	参加内容・備考
1 / 1 6 (火)	二小 3 学年	7 9 (2)	見学習頭ガイド・自主課題
1 / 1 7 (水)	二小 3 学年	3 0 (2)	火鉢・石臼体験・クイズ・自主課題
1 / 1 8 (木)	二小 3 学年	3 0 (2)	火鉢・石臼体験・クイズ・自主課題
1 / 1 9 (金)	二小 3 学年	2 9 (2)	火鉢・石臼体験・クイズ・自主課題
1 / 2 6 (金)	三小 3 学年	1 0 2 (3)	火鉢・石臼体験・クイズ・自主課題
1 / 3 0 (水)	三小 2 学年	4 6 (保 7)	自主課題(総合科式で自主課題)
2 / 1 (木)	立三小 3 学年	1 4 (3)	常陸中の道志・家業(長谷)の発見
2 / 6 (火)	立三小 3 学年	6 8 (2)	常陸中の道志・家業(長谷)の話を聞く
2 / 1 4 (水)	三小 3 学年	6 8 (2)	常陸中の道志・家業(長谷)の話を聞く
2 / 1 6 (金)	四小 3 学年	9 4 (3)	火鉢・石臼・田戸しめ体験・クイズ・検見学・自主課題
2 / 2 0 (火)	四小 3 学年	6 8 (4)	火鉢・石臼・田戸しめ体験・クイズ・検見学・自主課題
2 / 2 2 (木)	立教女学院小 3 学	7 7 (4)	見学習頭ガイド・石臼体験・自主課題
3 / 1 4 (水)	三小 3 学年有志	3 3 (4)	子供ミュージアムトーク参加
計	7 校		

で、た
校。つ
学教あ
た算が
し概加
用。た参
出採し力
算をト協
にくンの
心強ウ外
中を力以
を開時員
数展圖數
の來等
の時式を著
請形等護
習の保
免學もて
威主た率
料自き引
圖はての
入し外る
育し格教あ
教。連員有
校話語講畢
學者電申
の率め免
時引じ減
みちか育者
送らうた教
しのお校
申者の校
は加國、簿
數参來は保
員はののの
加（児童保
参）兒學校

※

市の参加例を聞いて、合わせをしてきた他の地域の学校の中で、対応ができるものには対応しました。

◎対象とした学校は小学校を想定しましたが、とくに学年は限定せずに募集しました。しかし例示として、例示の印象が強いめか、小学校3・4年担当教師が限られやすい傾向がありました。2・3・4年生・3・4年生ともに参加した学校の2・3年生の先生からは、「2年生であるが応募できませんか?」との問い合わせを最初にいただいたたです。活用の動機として例示は必要と考えますか?、本事業が、よりフレキシブルな事業である点があることが現場の先生に伝わるようなのが一つの工夫が今後の課題です。(参加校および実施内容は(表1)のとおり)

3 提供プログラムメニュー

平成12年度に提供した学習プログラムのいくつかをご紹介します。

二、体验学习

【内容】

当園の収蔵建造物の特徴を生かし、茅葺き民家の中で、火を用いた脱炭素である火鉢への火の入れや土間を用いた仕事＝石臼での粉ひき、あるいは、建造物の趣具の工夫を知り、実習にあげたてをおこなうなど、自らの体験を通じて生活の工夫、技術の一隅を理解する。

【おもしろい】と如果、體驗的に古民家に暮らされてきた生活の工夫・技術にふれることにより、
 料理の心得に富む現在の生活が、先人の経験や知恵の延長線上にあること、何気なく見える事
 物の性質や用途が、ついでに理解できると、すばらしい感動をおぼせさせる。また、園職員、当座ボランティア、
 生徒などより、より広がりをもった学習効果が期待できる。また、園職員、当座ボランティア、
 生徒など多くの人々が事実上たすきやまきでこのことが実現することから、初対面の人と話を開く喜楽感、少人数の
 活動で多くの人々が事実上たすきやまきでこのことが実現することから、初対面の人と話を開く喜楽感、少人数の

①火鉢体験

茅葺き民家のいろいろの職火を火種として利用して、たてもの園の収蔵する鉢に生炭をぎ、火をおこす。いろいろを照かへたりや家の各部位の名称の話、火まわりの道具（火箸、十能、火箸、火消し意など）の名称や機能、使い方、上手な火のおこし方、火の燃え具合、木を体験する。（火種の扱いについては、大人が扱う部分と児童が扱う部分を体験校の要望によりその程度調整。5人組で実施）

②石臼體驗

農家の土間仕事の一つ、石臼での粉ひきを笑顔に昇草き氏家の土間でやる。現在は粉きである。粉ひきは重労働であり一定量の粉を得るには根気と力が必要である。あわせて、石臼を使う仕事者の生活空間としての土間の登壇、石臼の構造、粉きで食生活の中で持つ意味などを説明する。(10人一組で実施)

②雨戸のあけたて

学校側からの希望があり実施したプログラム。古い民家の建具のあり方を実際の古建造物を例にとり説明し、現在に珍しくなっていた雨戸の工夫、戸袋など建具の名物を覚えてながら、触れてみる。電気が乏しかった時代の家の明るさも体験してみる。(20年度で実施)

<p>Ⅱ 見学クイズ</p> <p>古建造物の特性、園内の他の場所にある体験時に使った道具と種類のものなどをさがしてみる。各校来園時に自主課題をもっているため、自主課題の量により内容の変更等調整を行った。</p>	
4 事業の実施体制	<p>平成12年度は、たてもの園滞在時間内に一つの体験を時間にかけて希望する学校はありませんでした。三学期の郷土学習の導入として参加する学校が多く、導入時にさまざまな事例を体験させて動機付けにつなげる意図があったと思われま。一つのことに長時間集中することは児童にとりむずかしい面がありますが、授業の目的・形態によって、一つのテーマであるとの感想もありました。また、明示以外の他の事例を学校と相談の上実施したものに、雨戸のあけたて、国語の教科書の「笠こ地蔵」に出てくる昔の道具の実際の紹介・いろいろの園の建造物は文化財のため、児童・建物ともに安全に配慮する責任を強く認識しました。また、「笠こ地蔵」の授業からは、「昔くらし体験」事業が、一つの学年の一週性のものでなく、児童の成長過程を通じてさまざまな広がりをもっている事業であるとの手ごたえを感じました。希望校の実情にあわせてよりフレキシブルに設定をする姿勢をもつことが大切だと感じます。</p> <p>最後に、まともの発表である「子どもミュージアムトーク」には、総合的な学習で昔くらし体験実施以前から体験授業で来園いただいていた、小金井第三小3年生の有志の参加を得ました。試行実施のため早期に教育委員会にご案内できなかったために有志参加の形で応募となったと考えますが、学校ホームページ上の外部に向けての発表発信と違った生身の外部での発表が、児童の自信や成長につながるよう、今後も検討していきたいと思</p>
I 実施プログラム例	<p>実施例の中から3校のプログラムと時間配分を紹介します。</p> <p>① 小金井市立横小学校3学年 1月18日(木) 児童26名 教員2名参加</p> <p>*1月15日(月) 使用材料緑小よりたてもの園搬入</p> <p>*1月17日(水) 閉園前 使用物品園内各場所配置</p> <p>1月18日(木)</p> <p>*9:05 活用建造物準備(職員・たてもの園ボランティア)</p> <p>分組) 受付スタッフ3名・クイズ・教育パンフレット配布</p> <p>司会: 職員1名</p> <p>石臼担当: 職員1名・たてもの園ボランティア2名=計3名</p>

<p>火鉢担当: 職員1名・たてもの園ボランティア2名=計3名</p> <p>いろり火まわり担当: たてもの園ボランティア1名</p> <p>写真記録: 職員1名</p> <p>現場への他来園者との調整管理と現場補助: 案内スタッフ1名</p> <p>各クラス動き管理: 各クラス担当教諭</p> <p>10:00~10:15 これからやることのお話・見学の注意</p> <p>10:15~10:50</p> <table><tr><td>A班(綱島家)</td><td>火鉢体験とお話</td></tr><tr><td>B班(園内)</td><td>昔の道具クイズ</td></tr><tr><td>C班(綱島家)</td><td>石臼体験とお話</td></tr></table> <p>10:50~11:25</p> <table><tr><td>A班(綱島家)</td><td>石臼体験とお話</td></tr><tr><td>B班(綱島家)</td><td>火鉢体験とお話</td></tr><tr><td>C班(園内)</td><td>昔の道具クイズ</td></tr></table> <p>11:25~12:00</p> <table><tr><td>A班(園内)</td><td>昔の道具クイズ</td></tr><tr><td>B班(綱島家)</td><td>石臼体験とお話</td></tr><tr><td>C班(綱島家)</td><td>火鉢体験とお話</td></tr></table>		A班(綱島家)	火鉢体験とお話	B班(園内)	昔の道具クイズ	C班(綱島家)	石臼体験とお話	A班(綱島家)	石臼体験とお話	B班(綱島家)	火鉢体験とお話	C班(園内)	昔の道具クイズ	A班(園内)	昔の道具クイズ	B班(綱島家)	石臼体験とお話	C班(綱島家)	火鉢体験とお話
A班(綱島家)	火鉢体験とお話																		
B班(園内)	昔の道具クイズ																		
C班(綱島家)	石臼体験とお話																		
A班(綱島家)	石臼体験とお話																		
B班(綱島家)	火鉢体験とお話																		
C班(園内)	昔の道具クイズ																		
A班(園内)	昔の道具クイズ																		
B班(綱島家)	石臼体験とお話																		
C班(綱島家)	火鉢体験とお話																		
<p>*児童は各班およそ10名(体験時は各5名の2グループに分かれて実施)</p> <p>*昔の道具クイズ(参考資料2)については、漢字表記基準等必ず担当教諭からアドバイスを得、以降の参考とした。</p> <p>② 小金井市立小金井第二小学校2学年 1月31日(水) 児童80名 教員3名参加</p> <p>*担当教諭実施時「笠こ地蔵」原稿園へ引き渡し</p> <p>*1月30日(火) 閉園前 使用資料綱島家搬入</p> <p>1月31日(水)</p> <p>*9:15 綱島家・天明家使用資料配置(職員・たてもの園ボランティア)</p> <p>分組) 受付スタッフ3名・教育パンフレット配布</p> <p>司会: 職員1名</p> <p>物の説明担当: 職員1名・たてもの園ボランティア2名=計3名</p> <p>笠こ地蔵としいになつて着立体験担当: 職員1名・たてもの園ボランティア1名=計2名</p> <p>いろりの火まわり担当: たてもの園ボランティア5名(3棟分)</p> <p>笠こ地蔵説明担当: たてもの園ボランティア3名</p> <p>写真撮影来訪者担当: 職員1名</p> <p>長者の家・天明家説明: たてもの園ボランティア1名</p> <p>雨戸説明: 案内スタッフ1名</p> <p>現場への他来園者との調整管理と現場補助: 案内スタッフ3(3棟分)</p> <p>笠こ地蔵着立体験補助と天明家誘導: 各クラス担当教諭</p>																			

[illegible]

8

参考資料③

火鉢体験実施例

事前準備

準備した炭が火鉢には大きすぎず燃える場合は小さく切ったり砕いておく。炭は「炭からいくず炭」を用意すると扱いやすい。火鉢のそばに生炭を入れた炭箱（ない場合密き口）を置き、火鉢の側に「炭ならし」「火箸」をさしておく（炭は「ものをさしておける」ので便利）。いろりの炭に火種を拾うときに使う火ばさみをさしておく。火中の熾火が少ない時に、種火にするためにいろりにくくべる「消し炭」を火鉢のそばに仕込んでおく。熾火の運搬に使う十能や台付十能もいろりのそばに用意。火消し炭も扱いやすいところに用意する。

1 火種を作る

いろりの火のまわりに集まって、火種用の消し炭を火ばさみでいろりの薪の間に置き、火がつくのを待つ。その間に、いろりに付いての質問。火の道具（火ばさみ、十能、台付十能など）の名称や使い方、炭の注意（金屑の部分は黒い。炭の中の温度・熾の存在）などを聞く。火が燃えるには酸素が必要。炭は通気性や燃えやすさによっていろりの火の熾をよき観察し、どんな風に生炭を火種のまわりにつくかを考える。

2 火種を運ぶ

火のついた炭を火ばさみではさんで台付十能の上にのせた十能の上にとり、両手でつかり台付十能のそばまで運ぶ。?

3 種火をつく

炭ならしで火鉢の炭の中央にくぼきを作り、そこへ種炭を火箸でつぐ。

4 生炭をつく

種火にもたせかけるようにして、火箸で生炭をつく。炭が通気性や燃えやすさによって、種火の火がけで、ふうふう息をふきかけて、種

る

火の火を早く炭に移すようにしてみる。息をふきかけるあんばいを感じよう。勢いがよすぎると炭が中炭だらけになる。うまくすると火がぽつと燃え移る様子が見られる。

6 火の様子を観察しながら

生炭に火が移って燃え出す火の音を耳で聞き、手をかざしてあたためてみる。火鉢を使った時代の話をボランティアから聞く。質問をしてきたり火にあたりにながらお話をし。

→ 暖かいかな?他にどんな燃料があるかな?

火鉢の種類・火の扱いのむずかしさ

ガスや電気はあまり使わない国の人はこのようなことができる etc.

7 火のしまつ (①炭を拾いあげる)

種火を運ぶときに使った十能に火箸で炭の熾えさをとりあげる。落とすと熾を焦がすので落ちないように慎重に。いいねい!全部とりあげる。一度でむりなら2回に分けてする。

8 火のしまつ (②拾いあげた炭を運ぶ)

運んできた炭を火箸し炭の中に入れる。時間があれば火ばさみで一つ一つあけてみる。急ぐ場合は十能を持つ手を注意して一息に返してあげる。火消し炭はなぜ水なしで火を消せるのか?火消し炭は火の用心の他にどんな点が便利かを考えてみる。

9 火のしまつ (③火箸のしまつ)

炭をとりあげたあと、火鉢の炭に点々と赤い火が散っているのを、炭ならしで炭を上にかぶせておさめ、火の勢が弱で燃えないようにする。このまま火が消える。また、大きな火のかたまりをそのまま埋めると「埋め火」になって、息をふきかけると翌日の火種に使えない。

*「火」はおとなしく見えても、中に火が

燃えていることがあり、危険なことも

覚えてみよう。

火消し炭へ

参考資料 4

石臼体験実施例

事前準備

石臼を使う際、縁の高さのある粉を受ける容器が下にないと、ひいた粉が風や人の動きで飛ぶ。石臼をその中に入れたまままわすことができる容器が必要。

容器の例：

木製の容器が望ましい（ぶつかったときにへこんで穴があいたりせず使用しやすい）
れて多少の傷ができててもゆがみがないならす使用しやす）

木製の四角い箱（木工道具箱のように側面上部が外に突起状に出ており持ち手になるようにあつらえたと使いやすい。厚み：2 cm以上）

大型の桶・飯台など種類

箕（少量ですらないでまわす場合）

掃除：石臼と石臼を受ける容器は拭き掃除を含めてよく掃除し、水気を飛ばしておく。
物品準備：小帚＝粉が臼の目に付着して目詰まりしたり粉を集めるとき使用。

市販のもの利用＝下駄箱用小帚

帚草などをまとめて作成＝ささらタイプの小帚

*掃き足の長い帚は粉が散るので不可

→：ひいた粉をふるふる小鉢やボウル

：篩＝粉にまざった穀物の殻やごみをふるう

：座敷で石臼をひくときは、土間にござなどを敷く。

1 石臼のしくみ・土間仕事を教える

石臼の臼・下臼のしくみと目の立て方、挽き手などの部分名称の説明を実際の臼を前にして受ける。重い石臼仕事だが女性の仕事だったこと、農家の夜なべ仕事の一人し

ーなど、石臼仕事の基本概要も説明する。
また、土間で粉をひくことがなぜ多かったか考えて、土間の特色や不便な印象のある古い建造物が当時の生活にあわせて機能的な作りであったことも体験的に理解する。

2 ひき方の注意を聞く。

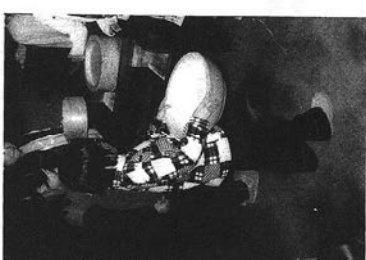
- ①ほかの人がひいているときに手を出さない。
- ②両手で挽き手をしっかりとゆっくゆっく回す。自分の正面に挽き手を振り回してひくことややすい。
- ③まわす方向が臼によって決まっている。



みんなが挽き手にひく

3 石臼をひく

上臼の表面にひく予定の穀物などをのせる。
石臼の穴に少しづつ穀物を落としこみひく。
一人で一度にやるのは大変なので、隣の人に穴に落とすなど工夫して順番にまわしていく。



物と肩でつながるへ

4 粉が出てきたらー

石臼のどこから粉が出てくるかよく見たり、粉の香りをかいでみる・粉がたくさん出てきたあとと出てこないときと臼の回転の速いを感じてみることにせず、一人一人考えながらできるような、目を時々とめて休

5 粉を集める。

できあがった粉を小帚で揃えて集め、篩でふるって殻やごみをよける。篩に落ちたあらい破片をもう一度ひいてもよい。上臼と下臼を離して臼の目についている粉も落とす。



『アンケート・学習成果から』

【参考資料5】

事業実施後、小金井市内参加校の担当教諭を対象としたアンケート、学校からの学習成果の報告・感想文の中から参加の感想の一例を紹介します。

【児童の感想】

- 長者どんの煙草がすごく広くて門も立派で大きくてお庭もすごく広くて面白かったです
- 火吹き竹も初めて見てすごい火がふけるようになったよ
- 使うものの名前を覚えるのがむずかしかったです。一つだけ昔の使うもので名前を覚えたのはいろりです
- いろりの煙が煙草の虫を殺すと聞いたらびっくりしました。いろりは強いなと思いました
- みのは雪や雨をはじくんだとびっくりしました
- いろりの前で笠で地蔵の顔をしてくれてありがたうございました
- 手ぬぐいのことを聞いて感心しました。だって手ぬぐいっていろいろな使い方があったからです
- 今まで体験したことがないことを体験したので何だか昔の人になったような感じがしました。また今度行きたいと思いました
- 水おこしや石臼で黄粉を作るのも楽しいけど昔の人の苦労がよくわかりました
- 質問したことに答えてくれてありがたいなと思います。また家族で行きたいな
- 大きい建物や小さい建物がいっぱいあった。また行きたいな一と思った
- 昔と今の物が全然ちがうなとびっくりしました
- 昔の人はこんな重いものを持つのか？と思いました
- 薬打ちを初めてたてたもの図でやりました。むずかしかったけどやらせてもらって楽しかったです
- 火鉢をやった時、火がついてから危ないなと思ったけどとても面白かったです
- クイズでわかったこと。1もめは3.75gということ
- 火鉢の火をつけるのを手間取ってしまいむずかしかったです
- 石臼で豆をひくのは重くてうまうま回せませんでした。けれどやってみるとうまうまできるとなるととてもうれしかったです
- いろいろなことを学びました。雨戸は重たいということ
- 現ないは先生にほめられました。とてもうれしかったです
- 火鉢は炭を移すのはちょっと怖かったけどうまくできてよかった
- いろりが楽しかった
- 勉強になったことは、雨戸はあんなに山奥に入ると引っぱると真つ暗になるということです
- 火のつけ方、消し方がわかったのうれしかった
- 昔クイズではいろいろなことがわかりました
- 火鉢に息をやさしく吹いて、そうするとボツと火がつくところが好きでした。とても小さな明かりなのにとっても暖かかったです
- 火鉢で炭を燃やした時は、息を強くふくと炭が飛び散って怖かった
- 前の学校には昔の物を置いてあるお部屋がありました。こはそこよりいいと思いました

13

【教員の感想】

- 実際に体験したことは印象深く、石臼の重さや火の暖かさなど身にしみて理解できたようでした
- 子供の人数が多いので、もう少しゆとり体験したかったが無理だった
- 気に入った点はボランティアさんが手助けして下さる部分でクラスによって対応の違いがあったことです
- 学習したことを発表する場を与えて下さりありがとうございました
- 一人一人が体験できたので良かった。火をおこすのに煙が煙たいことなど体験でき良かったです
- とにかく「とても楽しかった」というの

- 多かった感想でした。「もっと良かった」「また行きたい」と皆言っていました
- 今後も沢山の子供たちが体験できるように続けて下さい
- いろいろな所にボランティアの方がいて下さって質問できるようなになっていたことは良かったです
- 火鉢体験で教えていただいたことから炭を燃やして子供たち自身グループ毎に七輪で炭を起こし餅を焼いて食べることができました
- 学区でこうした体験ができる場所があるのは恵まれていると思います。今後、更につながりを深めて行きたいと思っています

「おわりに」

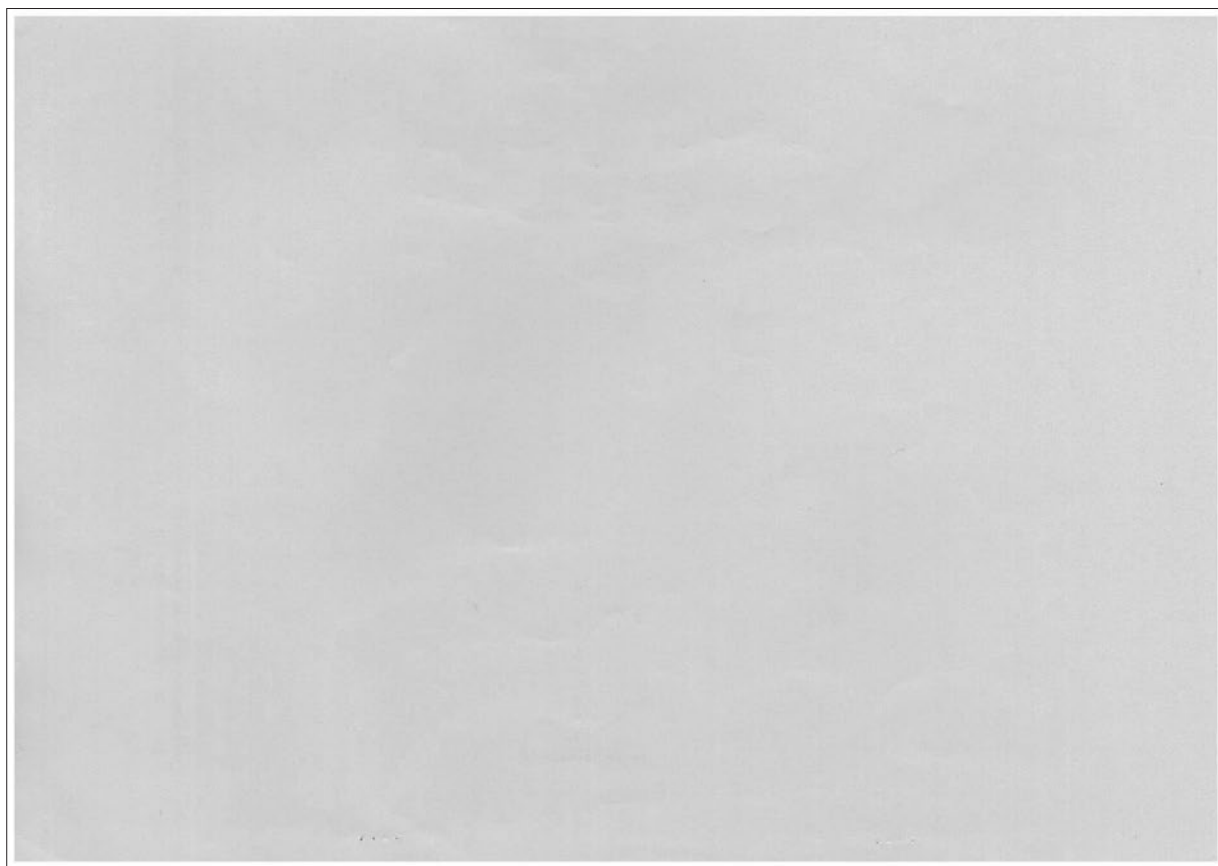
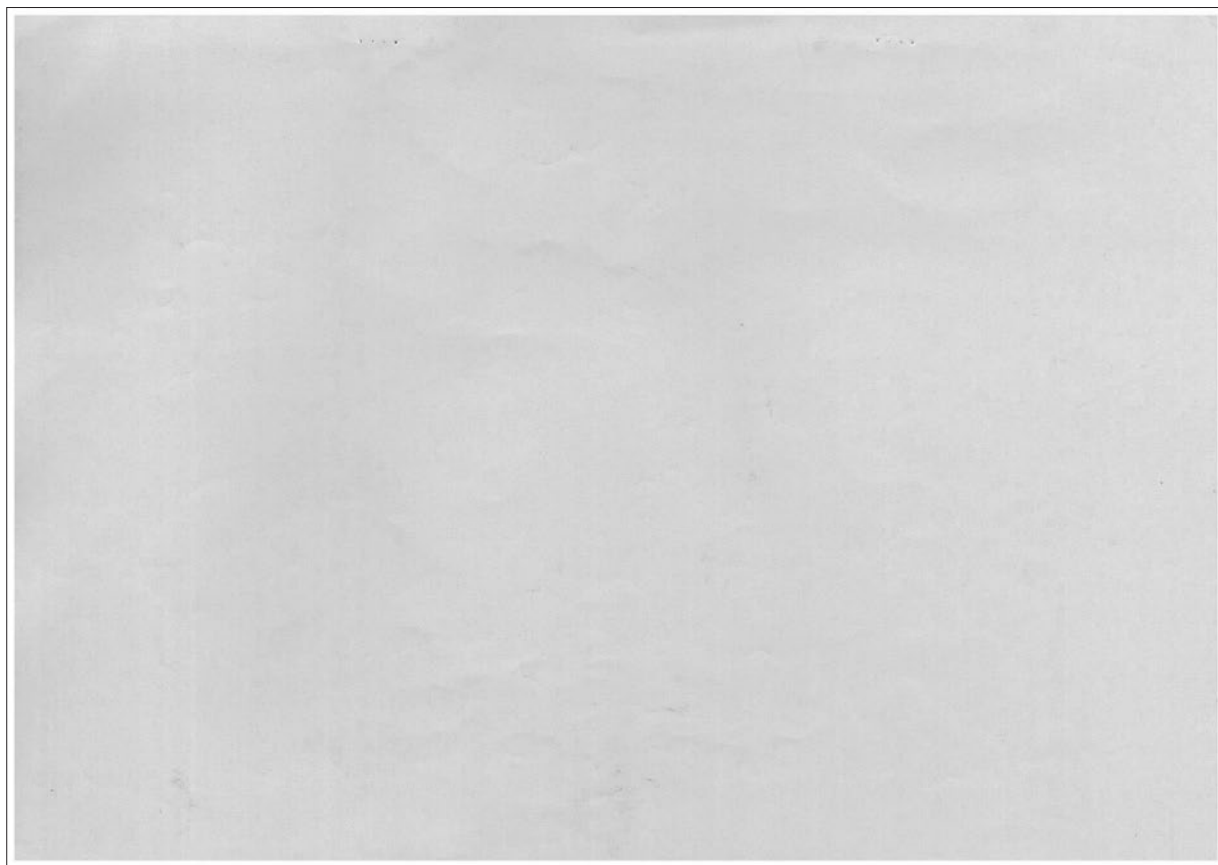
昔くらし体験事業はまだまだ1年生。これからも成長して行かなくてはなりません。具体的にには参加校から好感をもってもらえられておりますが、事務的手続きや先生との協同の方法の検討、現場スタッフの確保等まだまだ多くの課題が残されています。さまざまなご意見、反省点を踏まえ、これからの改善を重ねて実施していく所存です。

平成12年度第1回児童体験事業実施スタッフ

- 総括 たてもの園長 林利次郎
- 教育委員会連絡調整 学芸係 三好武司
- 企画・まとり編集 学芸係 友野千鶴子
- 教育活動利用開発事務 管理係 森田静子
- 学校連絡・実習調整 学芸係 三好武司 友野千鶴子
- 体験対応 学芸係 三好武司 栗屋陽子 真下祥幸 友野千鶴子
- 管理係 森田静子 (雨天体験教護場所準備)
- たてもの園ボランティア一同
- サービススタッフ (案内解説員) 一同

江戸東京たてもの園
平成13年5月

14



江戸東京たてもの園
平成13年度学校連携事業報告書

平成14年

江戸東京たてもの園平成13年度学校連携事業報告書

目次

はじめに	1
I 平成13年度事業および事業の背景について	2
II 事業の実績（藍の育成と藍染め）	4
III 事業の実績（ひじろっ子むかし塾）	22
IV 事業の実績（大根の育成と大根干し）	52
V 事業の実績（「昔くらし体験」と「昔の暮らしと道具展」）	60
VI その他の事業	
1 稲の脱穀調整体験の試行実施	86
2 学校教職員対象講習会	89
3 周辺校への出張授業	92
4 中学生への対応	94
5 高校生への対応	97
6 子どもミュージアムトーク	98
VII まとめにかえてー東京都事業上の課題	98

衣食住体験 藍の育成と藍染め



子どもボランティア・ひじろっ子



けん玉



ひじろっ子の活躍 ひじろっ子昔塾

衣食住体験 大根の育成と大根干し



大根畑
秋田県 大根の育成の様子をメモ



大根を収穫して干すところ



大根の入った籠をしよう



大根を干すところ



大根を干すところ



大根を干すところ
大根を干すところ

昔くらし体験



学芸員を囲み事前講習会
先正と着ランティア

今日は本番 石臼体験



実際に石臼磨きのおきをする



自由時間に 案内係員に質問 観察だよ



園児と家族で小豆の製造をみる



井戸を覗く 案内係員に質問

教職員のための
粟の取扱い講習会



実技講習

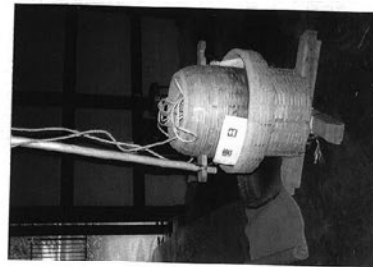


粟の取扱い講習会に参加する教職員

稲の脱穀・調整実験
(協力:小金井二小)



手動脱穀機で稲を脱穀



稲刈り機にすえたお米



お米を脱穀機で脱穀

昔の暮らしと道具展



展示室の展示品は、江戸時代から明治時代までの生活用具



展示品をみる児童



ムシロにのってある、チクチク



展示品の体験



出張授業

小金井市立小金井第一小学校 年中行事学習：縄ないと正月飾り作り



縄ないと正月飾り作り
児童の力作を展示した展示
会場でも好評でした。



縄ないと正月飾り作り
児童の力作を展示した展示
会場でも好評でした。

中学生卒業記念ボランティア(小金井市立南中)

中学生卒業記念ボランティア
活動の様子



中学生卒業記念ボランティア
活動の様子



小学生卒業記念ボランティア
活動の様子



小学生卒業記念ボランティア
活動の様子

はじめに

この報告書は、江戸東京たてもの館が平成13年度に実施した学校連携事業を記録したものです。たてもの館では、平成12年度の学校連携事業の試行実施以来、近年の教育現場からの要請に応え、児童生徒を対象としたさまざまなレベルの企画や受け入れに力を注いで参りました。たてもの館は、建築文化は言うに及ばず、その中に展示された民俗資料による郷土学習、年中行事等無形の展示による文化理解、園内の動植物の観察学習、文化施設の活動を通じての社会参加一帯、一つの施設でありながら、さまざまな活用可能な要素を持っていることが、いわゆる大型の箱物施設や「中核型」的施設を持つ博物館施設と大きく異なる特色です。実物の建物や自然が与える臨場感から児童生徒は親しみやすく楽しく学習し、各自の視点で建造物から発展したより多様なテーマを設定しています。総合的な学習に対する「多様な」対応については、大規模な箱物タイプの施設では、その環境や設備の限界から、どちらかというと不利な面が多いと言えますが、たてもの館は、他の施設には決して真似のできない豊かな資質を生かして児童生徒を迎えています。これからの展開が真に期待できる施設といえましょう。

とくに、平成13年度は、平成14年度から配属が当面中止となる各建造物の案内解説員が、園の学芸員やボランティアスタッフとともに、児童・生徒の学習対応や体験指導をする最後の機会となりました。例年、学校連携事業を安全・円滑に実施できた背景には、案内解説員の要所を押さえた対応が大きかったと言えます。平成13年度、この最良のコンディションで多くの学校の参加をえて、私達は多くのことを学びました。この経験をこれから生かすべく努力して参りたいと存じます。

13 種類の事業を学校連携で意図して教育委員会調整の上実施した。これらの事業の実施については、決定からある程度の間の事業、業務の蓄積を生かす形で設定し、全く新規にプロジェクトチームを立ち上げ期間かけた検討や準備をしたうえで、全国的な悉皆調査の方向性を決定する一等の仕事を他力掛けした点である。たいていの園には武蔵野市園を受け継いだ平成4年度の開園以来の蓄積が既にあり、新たな構築ではなくそれまでの事業の蓄積や反省、手元にある素材をうまく重し生かすことが、順当である。事業、悉皆調査を求めでもなく、各事業員は算定実施に必要な適切な専門知識・経験や、方向性についての意見を有しており、これら両者の力量を駆使し、スムーズな具現化が乏しいプブラを蓄むよりも、迅速に具体的な作業に着手し、早期に教育委員会との調整協力を密着することが、動きの早い教育行政に対応するのぞましい予測と思われた。

総合的な学習の本来意義を捉えた平成13年度は、各校の博物館を利用して学習への期待や取り組みにはまだ足らざらなければならないが、前年度の各校の分析結果からも自転車操業的に動かざるを得ない傾向が予測された。このため、学校からの相談や問い合わせに、きわめて迅速に適切な返答を求められたり、体験学習習得の観点からより具体的な返答・場合、連携にはとてもおかげ入れたいと考へるとする園内スタッフの要望を最大限にかさねる学校連携事業については、学芸員をはじめとする園内スタッフの力量を最大限にかさねるよう、各自の専門や個性を考慮しベーパーを決定し、相当期間、相当人数を投入しないといえない事業は採択された。この結果、準備期間は1年未満で必ず2年目には超過する力強い維持と、近年の教育行政の動きの早さや不確定要素を受け入れた柔軟で具体的な事業期間となつてきたことができた。

学校連携事業	従来からのたのみの園関連事業・業務
監の育成と鑑染め 大根の育成と大根干し 昔くらし体験	天明家情景再現、まなつたて鑑賞活動 綱島家年中行事・吉野家情景再現(徳園 増旺作り、まなつたて鑑賞活動 建造物展示、建造物情景再現、案内解 説員解説・変遷、まなつたて情景再現

(1) 学校と連携した事業

- 学校と連携した事業
- ① 歴の育成と歴史め
 - ② 大粒の育成と大粒十
 - ③ 子どもミュージアムトーク
 - ④ 昔くし体験
 - ⑤ 稲の脱粒調整体験（秋行実稼）
 - ⑥ 教職員のための風の取説講習会
 - ⑦ 授業協力出張
 - ⑧ 特集展「昔の暮らしと道具」
 - ⑨ 総合的な学習等の開い合わせ・東園対立
 - ⑩ 保育園児ジャンプに振り
 - ⑪ 保育園児ジャンプに振り
 - ⑫ 小学校へのカブト出展配布
 - ⑬ 小学校へちまわかし藝（夏休み子どもボラ

※各事業の蓄積技術等を転用・展開して実施

案内係員建造物管理作業 H12 新蔵 まつたび自主活動音読り 建造物内展示資料・情報再現 正月お飾り作り、まつたび農組工自治活 動 正月お飾り作り・七夕折り紙教室、 まつたび農組工自治活動 旧武蔵野郷土館収蔵資料、 正月お飾り作り、まつたび農組工自主 活動	収集建造物、収蔵資料、たてもの置換事 業建設記録、新蔵建設ノート編 年報・年報録、クリーニング 収集建造物清掃、縄文土器を作ろう たてもの園ボランティア活動 吉野家情景再現(ポランティア農園) 吉野家情景再現(ポランティア農園) 堆肥作り そとむけの町、収穫祭池邊清掃、 ポランティアガイド、正月お飾り作り お正月の遊びと書き初めの会
---	---

-2-

3

平成 11 年度まで行っていた情景再現の中では、藍草の栽培はしていなかったため、ボランティアの協力を得て前年度に栽培実験をした。同時に、建藍染めや生藍染めの学習をボランティアの有志とともにに行った。藍草の育成、染めについては、江戸東京博物館本館が開設以来講座（ふれあい体験教室）を実施しており、ある程度の蓄積があったが、平成 12 年度は本館ひろばでこの藍の育成を中心し、事業自体の変更点も見られたため、郷の具体事例の実見はその地の施設で行うこととした。事例略略先は、わざの博物館：埼玉県立民俗文化センターの藍田と郷の管理などの藍染め事業に協力を行っているさきさま藍染め研究会を対象とし、江戸東京博物館本館では、「ふれあい体験教室」見場の再確認を事業実施上の留意点や不足物品などの洗い出しのために行った。また、江戸東京博物館が所蔵する建藍染のうち 2 點を使ったもの贈り受けることができた。

藍地の藍の成長を待って実施したボランティアとの生染染め講習会には、江戸
東京博物館「ふれあい体験教室」の実施経験のある学芸員の中から藍草の育成と
育成した藍を環境的に活用した生染のある者を選んで講師指導を依頼した。この
染め講習会では、併せて藍型の手入れ方法（藍の建て方）も復習学習した。

[日誌抄 () 内担当]

昭和12年4月 たてもの園情景再現農園 藍播種、育成開始（よても備がラディ、たてもの園内）
昭和12、13、14

4月12日 埼玉県立民俗文化センター 藍煙・さきたきたま 藍染め研究会調査(短)

江戸東京博物館ふれあい体験教室実見(研)

10月6日 江戸東京博物館建藍引き取り(船・輝)

建藍手

10月17日 ボランティア有志藍染め講習会「藍の試し染め」(講師:畑麗学芸員)(昼)

以降、ボランティアとともに随時藍の手入れ・染め練習・サンプル品製作(文)

※たてもの園ボランティア農園耕作自主活動、臨時施肥・耕起・松卸※

※10月17日以降、職員およびボランティア有志の募金活動※

1912年11月～平成13年3月 水場設置工事打合せ・工事監理・検収（桜里・三好・荏川・友野）

H13年2月16日 小金井市教育委員会校長会会長宛事業相談(星小雄三)(三) 相)

2月19日 小金井市教育委員会学校教育指導室 平成13年度学校連携事業打合せ(三井・麹町)

②設備・物品類準備

不正設備・物品の洗い出しを行った結果、園その他の事業に他の事業へ転用可能であり、平素より不足している物品ばかりであったため、園の各種の事業への活用も増進した。一つの事業の必要物品がさまざまに利用できるということは、その事業自体が当該施設設立の地性や性格にうまく合致しているといえる。望ましい姿で

あるが、学校を通じて募集をかけた事業)

(2) その他の子どもを対象とした事業・子どもの参加が多い事業

- ①夏休みお絵描き教室
②セルフビルド一家をつくろう
③七夕折り紙教室
④縄文土器を作ろう
⑤子どもの日 子どもの遊び
⑥たてもの園ツアー「たてものの物語」

⑦お正月の遊びと書き初めの会

(3) 子ども参加は多いとは言えないが学校の課題との類似点が見られた事業

①炉端の昔語り

II 事業の実際（藍の育成と藍染め）

1 藍の育成と藍染め主旨

衣食住の文化を学ぶ一環として、たてもの園の情景再現展示として天明家の裏庭に設置している農園（ボランティア協力による）の作物の一つとして藍を植え、その葉の類似と伝統的な染料「藍」を用いた染めの体験を行う。たてもの園の教育拠点の④⑤の希望を含めた形で実施する。ただし、④⑤の藍の染めに関する作業については、学校の希望により染めの種類、方法等調整を。

①收藏建造物「仕立屋」を見学する。

「仕立てる」という言葉の存在を知り、仕立物に使用する道具類（仕立室内に展示）の見学・解説を藍染の見学や染めの実習時にあわせて行うことにより、染料を利用した衣文化の理解と、取藏建造物への興味の進化をはかる。

②染料としての藍を知る

藍が日本の伝統的な染料であり、広く使われていたということを紹介し、その特性を知る（どのようなものに使われていたか？生葉染め、建藍染めの存在。様々な染めの技法の存在など）。

③藍草を見る・育てる・触れる。

藍草を見たり触れたりする機会を作り、藍草の成長や畑の手入れなどについて知る。

④たてものの園の生薬の使用

実際に藍の生葉を使ってみる。

⑤建藍染め

藍を発酵させた建藍染めが生葉の染めと異なり時期を過ぎず染められる画期的な染料であることを知る。

2 事業実施までの経過（平成12年度）

(1) 事前準備經過

①藍草の育成・藍染めの予習

日々成長する藍草の育成と観察をとりこむ場合、遠方の学校では対応が難しいと考えられるため、小金井市に照準を合わせ声をかけるよう計画をした。越え染めつてはその他の学校の申し出にも対応する形を想定した。平成12年度末に小金井市教育委員会指導室との打合せ調整を行った結果、平成13年度たてもの園・学校連携事業の概要や藍染め事業への呼びかけは、年度当初の校長会において説明・募集の声をかけを行うこととなった。前年度末に募集作業に入らなかった理由は、クラス分け決定前（前年度末）では、担当教師が児童の興味や意欲を掌握することが難しく、それらを無視して授業内容を確定するのは総合的な学習の趣旨から見えてしまふとの教育委員会の強い意向があったことである。このため、4月当初の園の動きは急を要したが、平成13年度は前年度と同様な体制で学校連携事業について執行できたため、側面なく調整に入ることが出来た。校長会に引き継ぎ、研究主任会での説明実施、市内各校の研究主任を訪ねアドバイスを受ける等、教育委員会前局の施設ではない当面にとつて学校との交流の好機として活用した。

【日誌抄（ ）内粗写】

- H13年4月上旬 たてもの園情景再現展 藍染め、育成開始（はなはなラファ）
 4月12日 小金井市教育委員会校長会 学校連携事業連携校募集説明（三）
 4月19日 小金井市立緑小学校（連携希望校）打合せ（はなはなラファ）
 4月25日 緑小の藍の育成計画についてたてもの園ボランティアとの打合せ・説明（はなはなラファ）
 4月26日 江戸東京博物館蔵板中型複製用（三）
 4月27日 緑小藍育成計画についてたてもの園藍染めスタッフとの打合せ・説明（はなはなラファ）
 4月30日 小金井市立緑小学校5学年連携先に決定
 5月1日 緑小学校担当教師1回来園最終打ち合わせ・実習（はなはなラファ）
 5月2日 緑小第1回来園（はなはなラファ）
 仕立て藍と仕立物見学・藍製品体験・藍染め技法の藍草の成長と観察手
 入れ学習来園

- (3) 小金井市立緑小学校との連携
 校長会説明後、小金井市立緑小学校5学年3クラス（89名）より総合的な学習の一環として立候補の連絡を得た。緑小学校教員から伺った連携動機は以下のものである。

- ① たてもの園が近距離に立地する。
- ② 以前藍草を育成したが、教材準備に手間取り育った藍を活用できなかった。学校スタッフだけでは育成管理が難しいが、園との連携でカバーしやすくなると思われる。
- ③ 学校内に藍畑を作るスペースが不足している（花壇を他の植物に占拠されている）
- ④ 学校で実施予定の大豆の育成と比較して成長過程を観察する可能性がある。

- 7 -

ある。藍草の種、水場、数種のプラタナとい類、石灰や脱酸素剤（藍草の調整用）、オキシンドール（染めの色素の定着剤）などを用意した。とくに水場については、回水ポンプの水飲み場、事業参加者の一斉手洗いの水場、大型資料水洗い場、清掃用具水洗い場の一の4種の機能を兼ねる形で、大型の水場を網島そばトイレ裏と後元作業棟奥の2箇所に設置した。泥水を流すケースも多いことから、排水溝ゴミ受けとグレーディング規格には特に留意した。児童生徒の水飲み場としても利用することか蛇口の仕様は回転可能な縦型で、高さ・冬蛇口の閉鎖は成人用よりも低く狭く設定した。また、シンク幅、および立ち上がりは、大型資料洗浄や濃液の利便性、染めのための（50cm径）をシンク内に置きその位置で人が長い作業をすることも想定し、美行きは広く・立ち上がりは低くしつつ、足洗い場的な雰囲気の水場とした。清掃スタッフの利用が多い復元作業棟水場には、洗浄のために水をためることができ深めのシンクを一区画加えた形で用意した。

平成13年度は藍染めだけではなく、通常来園者の手洗い・飲料、清掃作業、博物館実習生の実習作業、手回り来園児の手や足洗い場等、団体対応事業やその他の学校連携事業に各水場は利用され、その後の園の事業を円滑に進めるのに不可欠なものとなった。

3 平成13年度（一学校連携事業実施年）実施経過

(1) 直前の準備

措置

藍の播種は春後経過過ぎに始められ、4月早々まで待つて畑に藍草の種を蒔いた。3月末は、年度がわりの進捗の時期にかなり各校の対外的な動きが止まることと、藍染め事業の教育委員会へのアウンスはは年度当初の校長会で行うこととなったため3月の来園はありえないこと、気候や鳥害等の影響を考慮することである。しかし、例年になく日照りや鳥害の影響等で、5月以降に追加播種が必要となり、結果、児童は発芽や二葉などの成長過程を観察することとなった。

実見直しとサンプル染めの提出

前年度の秋に染め講習会以来、たてもの園ボランティア内の有志が、通宣、建藍の管理や染めの練習を続けていたが、ボランティア相互の連絡や、練習の機会の回り、扱いの差などから、藍の産れをまねいたり、藍液をこぼしたため著しく量が減る等の手違いが生じて来た。このため、参加校来園前に、再度、手順の徹底や建藍の特質について講習会を実施することとした。学校来園を控え、藍のチェックを専門の職人に依頼した。その作業時に、都合のつくボランティアやスタッフには藍染めの様子を見学してもらい、疑問点や注意点をさうようにした。本園の園や経験談を聞き知ることには、大変勉強になった様子である。参加できなかったボランティアの希望者には当日の資料を配付し、予習に役立てた。連携校の教員の来園の中でそれぞれのエピソードとなる時期には、必ず来園前に案内係員、たてもの園ボランティアとの打合せや状況説明を実施し、事業の趣旨の取り違えがないよう心がけた。

(2) 連携校の募集

- 6 -

<p>学校内の動き</p> <p>①観察日記を掲示版に掲示し、成長経過を如る ②たても図からの連絡がある場合、掲示版に掲示して児童に周知（見どころ、手入れのポイントなど）</p>	<p>Ⅱ-2 藍移植</p> <p>移植の進捗を連絡し、各 クラス希望者が放課後先 生とともに参加</p> <p>(7名)</p>	<p>6月19日</p>	<p>藍畑補充への藍草が抜切りまや烏雲、日照りに より備々だ分の補充を、プランターで用心の ために追加で栽培を始めた藍の苗の移植で補う (引早栽培苗、ポランティア伊勢 新和解種1、三好青 藍株、友野)</p>	<p>Ⅲ 試染め</p> <p>①藍染めと生葉染めに適した機軸の説明(友野) ②染め技法はじめと絞りに関する説明(友野) ③絞りと絞り染め(生葉染めと建染め)の 布の文様をし、どのように染まるかを参考にする ために文様に布をスケッチ(はても園ポランティア 4名、友野・高橋) ④藍草の生育具合観察・刈り取り後の成長の予 想・一番刈り(ポランティア2名、三好・高橋田) ⑤藍の生葉染め準備(たても園ポランティア6 名、友野・高橋)</p> <p>①生葉染めと建染め・藍製品の手入れの仕方 (たても園ポランティア6名、友野・高橋) ②夏休みの入園の仕方と観察記録について(友野)</p> <p>①一番刈り後の成長具合を観察(案内係員、友野)。</p>	<p>7月17日 (日程表参照)</p>	<p>③二番刈り後の成長具合を観察</p> <p>①一番刈り後の成長と二番刈り後の成長に ついて説明・二番刈り(ポランティア3、案内係員、 三好・友野)</p> <p>②二番刈りの生葉染め、建染め(ポランティア7、 友野・高橋)</p>	<p>Ⅳ 夏休み自由観察</p> <p>希望者が夏休み期間 (各朝1～3名延6名)</p> <p>Ⅴ 二学期放課後観察</p> <p>実行有志 (各朝1～2名 延5名)</p>	<p>7月20日～ 8月31日</p>	<p>③二番刈り後の成長具合を観察</p> <p>①一番刈り後の成長と二番刈り後の成長に ついて説明・二番刈り(ポランティア3、案内係員、 三好・友野)</p> <p>②二番刈りの生葉染め、建染め(ポランティア7、 友野・高橋)</p>	<p>Ⅵ 二番刈りと染め</p> <p>①藍染めと生葉染めに適した機軸の説明(友野) ②染め技法はじめと絞りに関する説明(友野) ③絞りと絞り染め(生葉染めと建染め)の 布の文様をし、どのように染まるかを参考にする ために文様に布をスケッチ(はても園ポランティア 4名、友野・高橋) ④藍草の生育具合観察・刈り取り後の成長の予 想・一番刈り(ポランティア2名、三好・高橋田) ⑤藍の生葉染め準備(たても園ポランティア6 名、友野・高橋)</p> <p>①生葉染めと建染め・藍製品の手入れの仕方 (たても園ポランティア6名、友野・高橋) ②夏休みの入園の仕方と観察記録について(友野)</p> <p>①一番刈り後の成長具合を観察(案内係員、友野)。</p>	<p>9月18日 (日程表参照)</p>
---	---	--------------	--	--	-----------------------------------	---	--	----------------------------------	---	--	-----------------------------------

-9-

⑤秋に予定している文化発表会「緑展」での作品発表に邁している。

⑥建藍染めを民間工房で行うと高額である。

緑小の最大の目的は秋の文化祭での発表であり、そのために藍の生葉染め、翅藍染めの双方の染めも行う。最終的にはその色合いの違いや様々な模様を生かした共同作品を製作することにあつた。担当教諭の意向と実行時期・回数・滞在時間を考慮し、たてものの観点と折り合いをつけて実施する形とした。

藍草の成長と染めの機会概念図

☆.....○.....☆.....☆.....☆.....☆.....
播種 発芽 移植 一番刈 二番刈 採種

★.....観衆（編纂日記つけ、水やり、虫取り、草取り、施肥）.....★

●.....●.....タベストリ一製作
生葉染め 濃緑用壁新聞等作成
（試作） （タベストリ一用）

※年報に含めて掲載せぬもの有り

緑小藍染め緑小年間実施例

来園体制等	日時	内容
I ガイダンス来園 団体来園形式 (91名)	5月2日 (日曜入参参照)	①庭草の植物図説明・成長のポイント(ポラント アイランド)、観察時の注意事項・たても園への入 り方・緑小庭観察入園カードについて(三好充彦 係長)(注:実習要項参照) ②取組建造物・仕立庭園学(道真・仕立物)・仕 立物を用いた代表体験(高橋孝幸委員、案内係員)・仕立 園(注) ③染めの技法(染めの技法例と型染めの型紙を 見る)・型染めの手ぬぐいの作り方(室野孝幸委員、 ポラントアイランド係員)(注:実習要項参照) ④園内染め物展示・クイズ(児童グループ行動) ⑤色とりどり園遊具と引当金抽付(注)
II 秋講座等臨時来園 車行動有志 (各日1~8名)	5月3日 ~7月16日	①たても園発行の観察証を持って、畑に入っ て観察日記つけ(案内係員、三好・高橋・室野) ②虫取り、草むしり、水やり、一番刈り前の追 肥

8.

- 10 -

-11-

日程B表 滞在時間：9：30～13：00（弁当持参）

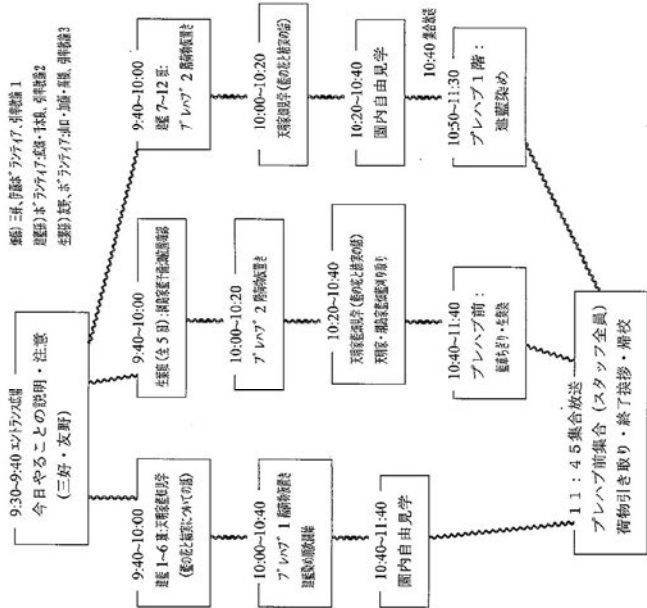
目次時間	1組	2組	3組
9:30 着	今日やることのお話と注意(王・雄・輝) エントララス広場		
9:45-10:00	<p>プレハブ2階</p> <p>布準備とスケッチ(絹)</p> <p>(野・綾香里、 紗子、アサ子、雄・輝、子規、王・雄・輝)</p>	<p>天明家</p> <p>布準備とスケッチ(絹)</p> <p>(木根)</p> <p>縫製(待てどこぬ)</p> <p>(三、ま、アサ子、雄・輝)</p>	
10:00-10:30	<p>天明家→プレハブ2階</p> <p>→プレハブ外</p> <p>藍を刈り生染染め(雄)</p> <p>(綾・里、ま、アサ子、雄・輝、雄・輝)</p>	<p>プレハブ1階</p> <p>藍の脱色・クイ</p> <p>生染染め(交代)</p> <p>(ま、アサ子、雄・輝、上、雄・輝)</p>	<p>吉野家前予備畑</p> <p>藍を刈り脱色・脱色(雄・輝)</p> <p>(ま、ま、アサ子、雄・輝)</p>
10:30 着-10:45	<p>プレハブ外</p> <p>生染染め天日干し</p> <p>(雄、ま、アサ子、雄・輝、王・雄・輝、雄・輝)</p>	<p>吉野家前予備畑</p> <p>戻ふるいと灰燼き</p> <p>(雄、ま、アサ子、雄・輝、王・雄・輝)</p>	<p>プレハブ2階</p> <p>布準備とスケッチ(絹)</p> <p>・木綿、藍の煮る</p> <p>ぎり(雄、紗子、アサ子、雄・輝、王・雄・輝)</p>
10:45-11:15	<p>プレハブ1階</p> <p>縫製(待てどこぬ)</p>	<p>天明家</p> <p>縫製(待てどこぬ)</p>	<p>プレハブ外</p> <p>縫製(待てどこぬ)</p>

	建屋染め(交代で) (本・ラティ・建・前・千・緑・ア 2 階へ) (三・五・ラティ 外・前・建)	建屋染め(交代で) (本・ラティ・建・前・千・緑・ア 2 階へ) (三・五・ラティ 外・前・建)	建屋染め(交代で) (本・ラティ・建・前・千・緑・ア 2 階へ) (三・五・ラティ 外・前・建)
11:15~11:30	天明家 長幼手紙(貸与品)と、 灰ふると灰撒き (三・五・ラティ・建・前・千・緑・ア 2 階へ) (三・五・ラティ 外・前・建)	プレハブ2階 布準備とスケッチ (三・五・ラティ・建・前・千・緑・ア 2 階へ) (三・五・ラティ 外・前・建)	プレハブ1階 建屋染め (三・五・ラティ・建・前・千・緑・ア 2 階へ) (三・五・ラティ 外・前・建)
昼食解散前	建屋染め(交代で) (本・ラティ・建・前・千・緑・ア 2 階へ) (三・五・ラティ 外・前・建)	プレハブ外 生葉染めと天日干し (三・五・ラティ・建・前・千・緑・ア 2 階へ) (三・五・ラティ 外・前・建)	プレハブ外 生葉染めと天日干し (三・五・ラティ・建・前・千・緑・ア 2 階へ) (三・五・ラティ 外・前・建)

日程C

滞在時間：9：30～12：00
全クラスを通して17 班(生葉班：5 班、建屋班12 班)に分け、生葉染めに携わる班と建屋染めに携わる班に分かれて実施した。時間の余裕もあり生葉のみ込みなどを班分けに関係なくあいている人たちは手伝う形で展開した。夏休みをはさみ学校からの連絡が遅れたため、実施日決定からスタッフ調整まで時間がなく対応が手薄となったため、積極的に先生にも手伝ってもらった(次ページに進行時間表)。

日程C進行図



4 反省と所見
(1) 藍草の育成

ポランティアの植物の育成者を中心に、種まきから最終的な収穫までを見学を交えておこなったが、日照り続きで気象状況が極めて難しい年となったため、藍の成長が遅く、また、虫害・鳥害が発生し、ある程度成長した時点で茎ごと折られてしまう等の被害があった。しかし、状況を見越して、職員がポランティアに予備の藍を植えて対処したため、初回の採めに藍草の分量は間に合うことができた。ただし、この間、生葉染めを行う際の留意事項として事前調査の折後数日から聞かれた「鳥害防止のネットの設置」や藍の青い成分を生葉染め前に葉に行き渡すために「染めの前2週間

ほど集中的に追肥をする」点、「成長過程で移植をする方が育てやすい（当初から畑に直植えしない）」点について、ボランティア有識者が採択する自然療法と調整がとれた。藍の染めを主体として考えた場合、一番刈りまでに見合った成長に至らなかった反省がある。同時、職員が様子を見て、予備の種まきや緊急対応としてハビボネックスを短期に施す等工夫をしたが、何よりも「染め」を成功させたいという緑の意向を考えると、ベストの状況ではなかったといえる。自然の産物のため金で付条件で実施することは困難であるとはいえ、最低限異常気象を考慮した育成方法を採択する必要がある。また、気象と参加校の意向と、職者であるボランティアの意向の折合いを付けることも重要な課題である。

(2) 建物の管理

建物の管理について、前年度からボランティアの有志の協力を得て手入れや試みの染めを行ったが、開始時点では、ボランティア内に興味のある人がどの程度いるか、また、興味が持続するか否か不確定要素が大きかったため、強く管理の徹底を依頼し責任者を決めるなどの指示はしなかった。たてもの園ボランティアは曜日別の身体制で活動しているため、各班間の伝達が難しい場合もあり、職員がその補強に努め、同じ内容で各曜日班個別に講習を行う等、なるべく多くの人に建物のことについて知ってもらえるようにこまめに説明、準備をした。この結果、積極的に藍の事業に関わるグループも現れたが、曜日毎の伝達もれから、同じ週に試染め講習をしたい班が集中し、一部の班が良いコンディションで講習できなくなり練習自体を見送ったり、一方で、一部の班に練習機会が限られるなど不都合が生じた。覚えたくても機会が持てなかったため、児童の対応に参加しにくい班が出る等、藍に触れる機会の調整に課題が浮いた。また、あくまで「児童の利用の合同に講習をする」行為として建物の藍の染めの手入れとともにボランティアに体験してもらった形であったが、意欲のあるボランティアは壁に比して大きすぎる作品を練習せねばならなかったため、本書重前に藍が破れ、急きよ、職人に調整を依頼せねばならなかったこともあった。藍を園が所有している主旨の理解と扱いの徹底も今後の課題であろう。ただし、藍の調子が悪い場合の職員への伝達は、適切なタイミングでボランティアが行ったため、児童来園時には良いコンディションで対応することができた。藍の回復についてのタイムリミットを皆で再認識する機会ともなった。

(3) 学校との調整

年度当初の募集のアナウンスから実行まで間がなく、また、園の職員数も少ないことから調整は通称スケジュールとなった。担当教師と園とで対面調整の必要の考えが異なる場合もあり、この穴を埋めるため、学校を訪問したり、フアクジミリでの質問等、強力連絡をとるようにした。これは、担当教師にとっては多少負担があったと思われるが、「お任せで結構」ということがないよう相互調整を行った。調整の結果以下の点が当初の園の目論見と異なる形の実施となった。実現できなかった。これらの中には、今後、この種の連携事業の経験を得、また、学校連携の動きが安定してくれば、よりよく調整できるものも少なくない。

①学校で実施している「大豆育成観察」がどのような経過で行われているのか情報が入らなかった。このため、たてもの園側で藍の観察の中で大豆の観察に有効な

補足となるような試みを心がけることができなかった（気象条件も災いした）。
②生染染めに適した動物性繊維は一般的には高価であり、教材費準備のない学校には負担が大きい。そのままの実施は難しいため材料を変更した部分がある。

生染染め用の繊維で人ししやすい繊維は絹と毛糸である。うち、比較的安価な毛糸は、緑の希望する生地のパッチワークには向かないため、人数に合わせて緑糸が可能で安価なものもある絹糸として、和服裏地に使用する絹羽二重の反物購入をアドバイザーした。また、緑小からは、第二回染めの際には、木綿地を牛乳で下地染め（＝動物性たんぱく質を繊維に付着させる）してから生染染めをする旨提言があり、藍染面を考慮し採用した。ただし、生地の風合いからの発色は緑地とは異なる結果となっている。最終的には緑染め生地と蘭和のあるパッチワークに仕上がっている。

③団体来園の日程が関係まで決まらないうえ、案内係職員・ボランティアから要望のあった早期の連絡調整ができないことがある。このため、職員、案内係職員、ボランティアのスタッフ担当分け配分を随時変える工夫が必要となり、スタッフによってはその切り替えがままならず、スムーズに進行できない時がある。

④雨天と生染染め

生染染めでの色の定着は光合成と関係するため、晴天時が望ましい。緑の二番刈りでの染め染めは、雨天順延3回を経て実施する形となった。順延の度に招集をかけたボランティアの解雇が生じ、学校も運動会や秋の遠足など行事がたてもの園で実施されたため、順延来園の度に来園予定時刻や滞在時刻について30分前後の変更が生じ、園内関連スタッフへのその連絡も多忙を極めた。とくに、二番刈りと染めは藍の成長から二期期間に実施することとなるため、参加校には台風が多い季節であることや学校行事を考慮してスケジュールを出してもらったことが肝要である。

⑤放課後観察について

公平を期するために学校側で一週間ごとに当番クラスを決め、当番クラス内で日毎に当番グループを決めて観察見学に来園した。枠を決めてしまうと、それ以外の日に日に観察したい児童が来るのを躊躇する様子であり、「来週は行っていないのか」と残念がる子供がいたり、次回の来園までになんか成長してしまい、興味が持続しない傾向があったとの報告が担当教師から寄せられた。来園児童は、藍草の観察・水やり・草や虫取りの他にも藍への水まき、園内の見学、緑の下の緑地帯を見つけて案内係職員と遊ぶ等、さまざまな動きが見られたため、学校の方針とはいえ残念な思いも残る。

また、学校の対応は、往復の安全の確保等を考えたものでもあり、各日の来園人数をあらかじめききもと確認し決めることにより、複数人がまとまってより安全に来園出来るという趣旨もあった様子である。とくに梅雨時は日の暮れが早い日もあり、遊びに夢中になり閉園間際まで滞在した児童が常備の中を帰る場合もあった。雨が激しい日や暮れが早い日は、短のある天晴家担当の案内係職員が児童の早めの帰宅を促したり、雨宿りを促す等適宜対応をするよう注意をしたが、広い公園に孤立した立地であるため、園外の安全確保は頭を悩ますところである。

放課後観察は初めての試みであったため、児童来園時にインフォメーションの案内係員から電話で事務室へ連絡を入れてもらい、その他の職員も様子を見に行くようにした。しかし、インフォメーションの案内係員が今年度は前年度に比して減っていたことがネックとなり、来園者対応が集中した場合は連絡が遅れたり、案内係員にとっても単純な一報を入れること自体が過重な負担となることがあった様子である。一方、案内係員は外部委託契約により配置されているため連絡もあり、このような実態は職員が注意をして目を配らない限り伝わりにくい状況がある。児童生徒に対するより安全で的確な対応を考えるのと、改善点が伝わりにくいこと自体は極めて問題である。結果として委託関係の報告では上がって来なかったが、適宜の巡回時に職員が目撃したインフォメーションの立て読み員や連絡電話のタイムラグから、今後、インフォメーションの担当責務とそれに見合ったスタッフの配置を適格に検討していく必要があると思われた。

【日誌抄 () 内細目】

- H13年5月8日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
5月9日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
長杉中型型紙返却 (研・研)
5月10日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
5月11日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
5月12日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
5月13日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
5月14日 小金井市研究主任・事業説明・連携校募集 (三・研・総観1、三・研)
5月15日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
5月16日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
5月17日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
5月18日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
5月19日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
5月20日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
5月21日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
5月22日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
5月23日 緑小 藍育成打合せ (三・研、研・総観1、三・研)
5月24日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
5月25日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
5月26日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
5月27日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
5月28日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
5月29日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
5月30日 小金井市教育委員会校長会打合せ (ひじろっ子) (三・研)
5月31日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)

- 6月1日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月2日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月3日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月4日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月5日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月6日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月7日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月8日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月9日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月10日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月11日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月12日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月13日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月14日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月15日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月16日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月17日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月18日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月19日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月20日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月21日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月22日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月23日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月24日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月25日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月26日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月27日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月28日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月29日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
6月30日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
7月1日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
7月2日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
7月3日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
7月4日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
7月5日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
7月6日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
7月7日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
7月8日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
7月9日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
7月10日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
7月11日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)
7月12日 藍草放課後観察対応 (総観1、三・研)

生葉をもみ出し色をつける際に、糸のよりがほぐれて綿まり合うため、乾燥後、それをほぐすのが大変であった。しかし、糸の太さに変化が生じ、綿り上げが風合いに面白さが出たと担当教諭よりご報告いただいた。

この授業は、マフラー完成後、学校公開の展覧会と総合科授業でのまとめ発表へと展開したが、生葉染めとの比較例を発表するため、希望児童が先生の引率でたてもの園で鑑賞による本編染めするために来園した。

授業実施例 5年生2クラス＝70名

10:00 校庭セッティング開始

10:30-12:30 藍の生葉染め（一番刈り～染め・天日干しまで）
1クラスごとに交替で実施（1クラス6班＝5人×6）

たらい3個利用のため、見る班とやる班に分かれてクラス内で2交替で実施。
毛糸玉：2人で1玉（白色を染める）（一人一人好みの色の毛糸に藍染めの毛糸を混ぜてマフラーを編む予定）

【日誌抄（ ）内相互】

H13 5月29日 藍染め打ち合わせ（於：二小）（芸：二小、二小、二小）
6月26日 藍染め打ち合わせ（於：たてもの園）（芸：二小）
7月18日以降 藍草手入れアドバンス連絡（マフラー）（芸）
8月1日 藍の追肥連絡（マフラー）（芸）
9月5日 藍染め打ち合わせ（芸：二小、二小）
9月11日 たらい等貸し出し英園（芸：二小）
9月12日 生葉染め授業実施（芸：二小）
10月30日 マフラー作り見学（芸：二小）
11月16日 藍染め希望児童英園・藍参考書貸し出し（芸：二小）
11月17日 作品展覧会成果調査（於：二小）（芸）
11月21日 総合科授業発表（二小授業）
11月26日 藍参考書返却・藍作品参考発表（芸：二小）

(2) 前原小の伝統工芸学習のまとめとしての参加

伝統工芸の実演事業の活用

小金井市研究会での事業紹介・意見交換後、園の資料を検討した前原小4年生教諭から、伝統工芸の授業にからめて園が毎月実施している伝統工芸の実演事業をとりあげたいとの連絡があった。「伝統工芸の実演」は、下町ゾーン的情景再現として実施している事業で本職の職人が伝統工芸の実演をする。この事業を4学年の毎月のニュースに取り上げたいとの希望であった。前原小の伝統工芸学習は1年計画であり、学校の授業の合同に希望者が自発的に職人の手仕事を観に行きくように働きかけたいというものである。ニュース掲載のための次の実演情報を提供一というささやかなものであったが、担当学芸員からの実演内容の連絡が遅れると督促の

7月13日 藍草放葉後観察対応（新緑：1、2）
緑小来園藍染めボランティア事前打ち合わせ・藍染め職人による藍調整講習（芸：二小、二小、二小）

7月14日 藍草放葉後観察対応（新緑：1、2）

7月15日 藍草放葉後観察対応（新緑：1、2）

7月17日 緑小藍草一番刈り・染め英園（芸：二小、二小、二小）（芸：二小、二小、二小）

7月19日 緑小藍草引き取り対応・日種打ち合せ（芸：二小、二小、二小）

7月21日 夏休み藍草観察対応（新緑：1、2）

7月25日 夏休み藍草観察対応（新緑：1、2）

7月26日 夏休み藍草観察対応（新緑：1、2）

9月4日 緑小藍草一番刈り・染め英園ボランティア打ち合せ（芸：二小、二小、二小）

9月5日 藍草放葉後観察対応（新緑：1、2）

9月7日 藍草放葉後観察対応（新緑：1、2）

9月9日 藍草放葉後観察対応（新緑：1、2）

9月11日 緑小藍草一番刈り・染め英園（芸：二小、二小、二小）

9月18日 緑小藍草一番刈り・染め英園（芸：二小、二小、二小）

9月21日 緑小藍草引き取り対応（芸：二小、二小、二小）

11月16日 緑小連携事業成果調査（緑展作品展示）（芸：二小、二小、二小）

11月17日 緑小連携事業成果調査（緑展作品展示）（芸：二小、二小、二小）

11月20日 緑小藍草観察対応（新緑：1、2）

11月末 藍草後処理（マフラー用）

5 その他の参加校

(1) 小金井二小への出張授業

園内藍草の連携校として緑小決定後、総合的な学習の一環として小金井二小5学年70名からも申込みがあったが、園内畑の面積と緑小と二小児童の員数の総計から、両校の受け入れは難しいため、園の畑を利用した藍染めはお断りすることとなった。二小は近隣校の中ではたてもの園にもっとも近い位置にあることから、機会を生かして参加を希望した様子であり、校内花壇での藍草栽培という代替案を待っていた。このため、栽培用の種の購入場所や分量から助言協力し、アドバンスのために訪問するなど交流した。教諭側では作業と並行して藍草の活用について検討しており、最終的に育てた藍で毛糸を染め、手作りした編み機（杵）で各自がマフラーを仕上げることであった。将は園工芸科の教諭が試作するなど早期に準備を進めていたが、藍の播種は5月末以降にずれ込んでおり時期としては遅いスタートである。このため、一番刈りに適した時期が夏休み期間中になる可能性もあり、集団登校日に染めをする可能性も含めて要所要所のアドバンスを電話やフックシミリでするよう心がけた。調整の結果、藍草での生葉染めは9月12日に実施することとなり、たてもの園では染めに必要なたらいの貸し出しと当日の染めの講師として学芸員1名を講師派遣した。毛糸の生葉染めは、たらいの中に毛糸束を入れて手で

念なことではあるが、見送りの判断は正解であったと思われる。博物館資料は単に存在さえしていればその内部の事業ではいくらかでも活用できるという性質のものでなく、それに見合った体制が必要であることを考慮すべきである。

今後の展開

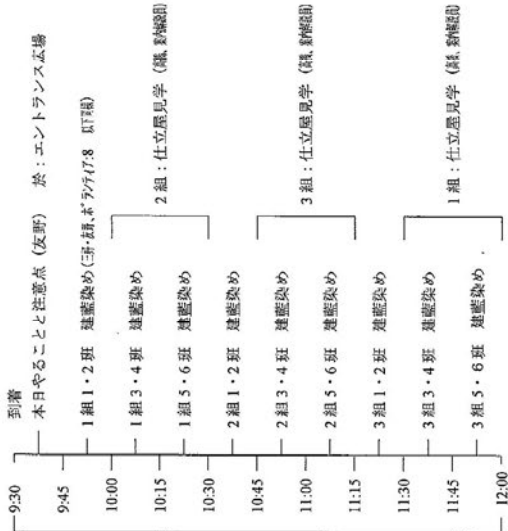
学年末に、次年度の4年生の伝統工芸授業も来園を希望しており、寒冷期に行つた今年の反省を踏まえて、染めの体験を主眼とするならば9月に来園すべき旨を次年度の担当教諭に引き継いだと連絡があった。継続的な活用へと展開している。

【日時抄 () 内組数】

H13年12月2日 藍染め来園打合せ(組、種別未定)
12月21日 引率者藍染め実技予習来園(組、種別未定)
3月5日 藍染め来園(組、種別未定)
H14年3月14日 藍染め来園(組、種別未定)

参考資料

前原小4年生藍染め (3月14日)105名=35名×3クラス
※6人グループに分かれて染めを実施



電話が来る等、園の動きもカバーする形で積極的に対応していた印象がある。また、9月の「たてもの園だより」に掲載された緑小の藍染めの体験にも着眼し、伝統工芸授業のまとめとして、三学期に藍染めの体験に来園したいとの申し出に賛成した。室外での水遊び作業があることや藍の性質から、寒中の藍染めは避け、極力学期末の設定となるよう調整実施することとなった。

通塾生交流にわたるたてもの園の利用

同学年児童との交流は前年度の3学年次に通り、三学期の郷土学習対応として園が実行実施した「早くから体験」事業の中で、園内展示資料と案内解説員を活用した昔がしクイズ・白での粉ひき体験・火鉢への炭つき体験等に参加している。その際担当教諭から伺った博物館活用動機は「以前は古い物を持ってくるよう児童に問いかけると某かの道具類が集まりそれで郷土学習授業が成立したが、生活様式の変化や住居の改築等で声をかけても物が出てこなくなった」というものであった。この意味で、博物館活用には入手しにくい教材準備に大きな課題がある。しかし、前原小はJ R中央線を越えて来園する立地にあり、大勢の児童を連れて施設見学するには一大決心を要するため、必ずしも次の学年には積極的に園の利用を推薦できない一とこの感想であった。現実には、前回は引き続き今回の当該学年の引率は、10名前後の保護者の協力を得て実現させたものであった。このように困難な条件にも関わらず年度の来園に至ったことは、園スタッフにとり大きな励みとなるものである。

藍染め来園時の授業の実態―園内資料・建造物の活用視点と資料活用の課題

前原小授業は、学校側で確保した時間のうち往復の移動時間に割かれる部分が大きい。そのため、引率者の方々に事前に予習来園をしていただく実技講習し、染めの布の下準備までは学校で済ませた上で来園する形をとった。園内では実際の染めの作業と、仕立屋の見学、職人にちなんだクイズを見学を行うこととした(参考資料参照)。クイズ見学に関しては、当初、先生から、3学年時に昔の道具を見る視点で見学をしているため、見学ではなく博物館所蔵の伝統工芸に関する道具や作品・製品を見学するなどして勉強できないか?との希望があった。が、園内の建造物や展示物に関する「職人さんクイズ」を含めた見学の実施に最終的に落ち着いた。これは、園にある伝統工芸的な資料は数が限られており、視点を広げて民俗工芸等を含めた幅広い意味での職人に関わるもの(建造物・庭園関係・古い道具等)ならば豊富に存在し対応しやすかったことにある。また、一般的に、伝統工芸資料は児童が自由に触れたり間近に見ることが資料保護の観点から困難なケースも多いことから、学習利用の資料等の整備が今後の博物館の課題であろう。

資料については、不足分をたてもの園の本館の位置づけである江戸東京博物館(墨田区)より借用する方法も検討した。しかし、園には本館資料の搬入を行える環境が整っておらず、実際に所蔵資料の調査や搬出に向く時間も潤けなかった。このため、江戸本館資料の活用は見送らざるを得なかった。ただし、仮に資料の抽出が可能であったとしても、資料の利用については学芸員の介添え等が不可欠であり、当該事業に従事する園スタッフの当りの配置状況を鑑みると、学校受け入れ時に本館が条件として掲げる基準で学芸員を配置すること自体不可能である。極めて現

(3) その他の対応

・小金井市立本町小学校1学年の校内プラランターでの監視塔活用について1学年担当の熊田彰論から相談の電話を度々いただいた。その他の授業との兼ね合いがあり、それ以上の交流はなかったが、育成の注意点や必要物品について分る範囲でお答えしている。学校行事の関係で生菓の利用が困難であった様子であり、最終的には美大出身の保護者のアドバイスもあり、藍の葉をつみとり乾燥させた後に炭染処理の方法を提示していた。このため、時期をずらして冬場に入ってから、乾燥葉を使用した染めの授業への協力要請があった。たてももの園では加圧処理を加えた炭染処理の実験がなく、技術的に的確に行うことは難しいと判断したため、東京農工大繊維博物館を紹介し、アドバイスいただくよう勧めた。染めや藍草そのものについては、繊維博物館は専門であり深い造詣があり、植物の育成から染めまでを行うプラランティアサークルも擁しているため園とは異なる底層があったと思われる。その他、多摩地域遠隔地の小学校様校から栽培の仕方や物品の入手法について問い合わせがあった。これらの問い合わせは、先生間の情報交換により、園の事業の存在が広く認識されたことに起因する。

III 事業の実践（ひじろっ子むかし塾 7月22日～8月29日）

1 ひじろっ子むかし塾主旨

収蔵建造物、吉野家・網島家で夏休み企画として「ひじろっ子むかし塾」と称した企画を子どもボランティア（通称：ひじろっ子）に開催させる。「ひじろっ子むかし塾」は児童が普通遊び（竹馬、剣玉、ペーゴマ、おはじき、お手玉、独楽）と民家解説をする企画である。ひじろっ子の活動は、遊びという児童が好む内容であるが、その目的は、自分が楽しく遊びを覚えることではなく、来園者が楽しめるように配慮をしながら遊びを運営する（来園者に教える。一緒に遊んで楽しんでもらう）ということにある。この活動が文化財や日本の文化に対する理解や愛着をなくくむきっかけとなり、児童が他者への思いやりや自立心を養えれば何よりと考える。児童の自己の来園も想定されるため、あわせて、たてももの園の建造物や園の事業について、児童の周りの方々にも一層の理解を深めていただく波及効果も期待する。

ひじろっ子は塾の開催にあたって以下のような活動を担い体験する。

- ①養成講座への参加（ひじろっ子の心構え、実技、場所の確認や注意点などを学ぶ。また、いろいろな小学校から参加しているので、自己紹介など交流を深めます）
- ②茅葺き農家（吉野家・網島家・八王子千代同心組頭の家）の清掃（はたきかけ、塵敷等での掃き掃除、雑巾がけ、土間・庭の水打ち、機袋での床掃除）
- ③むかし塾でのおもちゃの管理
- ④むかし塾での遊びの手本（遊びを教える）
- ⑤吉野家・網島家の解説

- 22 -

- ⑥おおきくへの挨拶や簡単な案内、大人ボランティアの簡単な手伝いなど
- ⑦反省会への参加（茅葺き農家の大掃除、記念撮影、反省委員会、ひじろっ子終了書の手伝い）

※「ひじろっ子」は小平・小金井近辺での「旧江戸」を指す呼称。

「旧江戸」のある家で活動する子」の愛称でひじろっ子とした。

2 事業実施までの経過（平成12年度～）

当初、子どもボランティアの企画は、たてももの園の成人のボランティア（ひじろっ子）の日常の活動に刺激や楽しさを増やす点から着眼した。しかし、折からの学校連携事業や児童向け企画の必要性和相まって児童企画の中で具体案の調査・検討を進めることとなった。

児童を対象とした事業を検討する際、連携先の力点を学校（教育委員会）とするか、個別の先生とするか、児童とするかにより、準備の仕方に大きな差異が生じる。たてももの園の管轄部局は東京都生活文化局であり、このため、児童生徒の教育活動についての直接的な対応や、現場感覚に富んだ方針の確立面に不案内であるとの反省があった。また、一部の熱心な先生への手厚い対応に偏らず、広く公平に学校現場に対応できる体制でありたいとの希望があった。たてももの園の不足分を補い理想とする方向で準備を進めるためには学校・教委との連携を重視すべきと考える。そこで、事前準備として学校現場の参考意見聴取や、参考事例の調査に努めたが、ひじろっ子企画の割り振り等詳細の検討時には、小金井市教育委員会の先生方にアドバイスいただくことができた。この小金井市とのやりとりは、総合的な学習試行時からの授業来園やたてももの園からの出張講座での関わりを生かしたものである。実際の子どもボランティアの活動は、大宮市の茅葺き民家施設・旧坂東家住宅大宮市立見沼くらしっ館の子どもボランティアによる「夏休みむかし塾」を参考とした。

以上の経緯もあり、子どもボランティア「ひじろっ子むかし塾」はあくまで児童個人を参加単位とする事業であるが、募集範囲の決定や参加募集のアナウンスについて地元教育委員会の協力を得て準備を進める形をとっている。実際、子どもボランティアの毎日の通園を考えると、募集範囲等の決定にも昨今の児童をとりまく環境からの安全性の検討が不可欠であり、児童の通学路その他を熟知している教委のアドバイスは極めて重要なものである。アドバイスを生かしたことで、安全に児童を迎えることができたと考えられている。また、各対象校経由で募集告知することにより、学校のたてももの園利用の延長として希望児童が参加できる体制となり、有意義な仕組み作りが出来たといえる。

(1) 旧坂東家住宅見沼くらしっ館の子どもボランティア調査

見沼くらしっ館は、茅葺き民家一棟を屋敷増えごと保存している博物館当施設であり、周辺小学校4～6年生および中学生を子どもボランティアとして受け入れて「夏休みむかし塾」を主催している。児童の足を考えて募集校の範囲は限定しているが、子どもの遊びを基盤としたボランティアのため人気があり、また、

- 23 -

として以下の留意点を洗い出すことができました。

- ①こまを回す場所の注意点 → 土間や壁の上では走らない(土間・壁の保護のため)
②竹馬に乗る場所の注意 → 台の必要性・裸足で乗る人のため当野家庭の大きな砂利を
拾っておく
③④ → ガラスのそばや込み合う所、土間での遊びは不可(ガラ
ス・土間の保護)
⑤ → 狭い場所・ガラスのそばで遊ばない。剣が抜けた時の処置の仕方を
決める(水で濡らして差し込む)

(3) 全英の動植物と大英の歴史を学ぶ総合学習(ポラリイデン)

成人ボランティアの間では、学校や児童生徒の募集による来園者対応の増加ばかり甲斐としてとらえる面もある一方、事は禁止されたベレー・ゴマ等の遊びを含めた古習習の復興の意欲についての疑問を抱く者、それらがどのような面で社会から必要とされているのか認識しない面もあり、しばしば毎月のボランティア例会で質問が上がった。活動しているボランティアの当初登録時から見ると、社会状況や国の置かれていた状況も大きく変遷してきた。また、その国の今後の方向性を金スタップで学習する機会も大きく度々出てきていた。登録後3年を迎え募集を希望するボランティアには登録更新講習を必須出席を条件に実施した。登録後間もない人でも希望者には積極的に受講してもらった方面をとった。この講習は、固かに新たな課題を提示するための施設紹介と介入とすることで実地研修がより実地研修に不評であったが、実施後の期待は、概ね好評であった。学校現場の運動者から学校外の施設や社会で経験のある方に関する事は大きいという実状や、玩具の成り立ちについての知識の習得を含める形で工夫をこらした道びね実地講習であったため、今後の活動に向けての期待や楽しさを感じさせるものとなった様子である。この講習では、平成12年度3学期に試行実施した、学校連携事業「書く・くちくち体験」事業に早速生かすこととなった。

平成12年度ホランティア登録更替講習会講習内容(平成12年1月21日10時~15時)

更新講習について (たてもの園学芸係長 三好武司)
総合的な学習と博物館の関わり (武蔵野市立第五小学校教諭 杉山雅則)
13:00~15:00

いづれも、この「三ッ造」の物語は、
 日三ッ造所へーゴマコ指導員 鈴木三郎
 けん玉チャンピオン 伊藤拓介

4) 物品の準備

物品整備は平成12年8月のくらしっく館有志見学会実施後早速に着手を開始した。おもちゃ類は、ボランティアの協力を得て子どもの日企画として以前から実施していた普遍びの道里を補充する形で用意した。むかし藝園劇場所は茅草庵家を想

くくしくくは目も鼻の先であるため、保護者の信頼や安心感も大きい。ぐらしぐらしで知度は、博物館という公共の場で改善されることが多いと思われるが、児童の生活能力がますます改善されると保護者に信頼されるようになるという。「子ども生活能力を高める」との評判になる。園庭前に「くぐりトンネル」がある。これは、園舎と遊具との間に設置されたもので、くぐると園舎の裏手に出る。このくぐりトンネルには、園舎の裏手にある遊具まで行くことができる。また、園舎の裏手にある遊具は、園舎の前にもある。このように、園舎の裏手と前とはつながっている。また、園舎の前には、園舎の裏手と同じような遊具がある。このように、園舎の前と裏手とはつながっている。また、園舎の前には、園舎の裏手と同じような遊具がある。このように、園舎の前と裏手とはつながっている。

子どもボランティアの担当する事柄は以下のとおりである。

- ① 民家の清掃（はたき掃除、掃き掃除、簾巾掛け）
 - ② 庭や土間への水打ち、植物への水やり
 - ③ 民家の子どもと解説（大人に対しても行う）
 - ④ 遊びの手本（剣玉、メンコ、独楽、ペーゴマ、竹馬、おはじき、お玉玉）とおもちゃの整理
 - ⑤ ⑥ お客様の挨拶、簡単なご案内（足下の御注意や靴を揃える、座布団の用意等）
 - ⑦ 大人の手伝い（講座の準備、お茶碗洗い）
- ⑦ 養成講座：反省会（反省会・食事会・文化財を守る防火訓練）
- たても園では、平成12年度7月～8月にかけて、このうち、養成講座の見学を兼ねたおとしこ館の運営方法について訪問調査を実施。また、翌年度の実施を希望し入れて、たても園がボランティアに呼びかけ、有志を募って夏休みをばく道見学の活動の終了の見学会を開催した。

(2) 昔遊びの事前学習

くらしく、幼児学校後、今後の児童生徒の来園の増加とひじろつちわかし塾の実現を視野に入れ、普遊びの事前学習を、ポラテンディアとともに9月～11月にかけてを視察に入れた。得意な者と不得手な者がいるため、出来る人が出来る人に教えてもらって、年少児が主体的に空きの時間に練習する形とした。ポラテンディアが園で裏庭側を担当する各家庭の一室ずつ練習一式を用意し、練習期間と限した3ヶ月間、職員も指導する各家庭とともに練習する形をとった。この遊び学習は、遊びのことと実践するという考えで実施した。事前練習の過程で英語者とエココミュニケーションをはかる手段としても普遊びは有効なことが判明し、平成13年度いっぱい延長して各民家を利用して練習を行うこととした。この他に、ポラテンディアの登録新規学習者として、学校施設事務を題材として遊びの慣習も行なった。これらの事前学習の成果

定していたため、玩具入れ等芽生きの建物に合う雰囲気のものを用意する必要があり、型紙や重量も考慮し、職人に製作を依頼することとなった。竹の伐採時期により製作できない製品があるため、時期を逃さぬように発注するよう心がけた。児童が使用することも併せて伝達したため、漁人側でも児童の動きを考慮して筋道や部分的に利用する外金の処理などに気を遣うなど注意を払って製作してくれた。

物品の調達には専門者からの購入や発注だけでなく、園のボランティアの技術のある人選に竹馬の製作を依頼した。

- 平成12年8月～平成13年5月
遊具道具の点検・補充（竹馬についてはボランティアに製作依頼）
- 平成12年11月～3月
ひじろっ子荷物入れ・おもちゃ入れ（津田沼型）発注調達
- 平成13年5月
竹馬かけ製作（ボランティア）

【日誌抄（リ）内担当 子どもボランティアを募る前出以外の学校連携事業含む】

- H12年4月 見沼くらしっく館子どもボランティア調査調査（注）
- 5月5日 たてもの園子どもボランティアの募集（注）
- 5月～ たてもの園来園者向け策画担当者 学校関係調査（注）
- 7月20日 見沼くらしっく館夏休みわんぱく道場 子どもボランティア養成講座（注）
- 8月20日 同 活動体験見学（注）
- 9月 ボランティア月例会 遊遊の練習・生徒打ち合わせ（注）
- 9月 竹馬製作打ち合わせ調整（注）
- 9月～ 遊遊の練習開始・吉野家産石拾い開始（注）
- 小金井二小5学年総合的な学習公開授業（注）
- 小金井二小5学年総合的な学習公開授業協力（注）
- 小金井二小総合的な学習研究授業見学調査・小金井市指導主事挨拶（注）
- 11月 ひじろっ子津田沼型製作打ち合わせ（注）
- 11月14日 小金井三小3学年総合的な学習調査より来園（注）
- 11月15日 小金井三小3学年総合的な学習調査より来園（注）
- 12月8日 津田沼型受け取り（注）
- H13年1月中旬 竹馬製作打ち合わせ調整（注）
- 1月16日 小金井二小郷土学習見学説明会（注）
- 1月17日 小金井市立緑小3学年普くらし体験試行来園（注）
- 1月18日 小金井市立緑小3学年普くらし体験試行来園（注）
- 1月19日 小金井市立緑小3学年普くらし体験試行来園（注）

- 26 -

- 1月21日 ボランティア登録更新講習（総合的な学習についての学習・普通型支援講習）（注）
- 1月下旬 竹馬製作打ち合わせ調整（注）
- 1月26日 小金井市立前原小3学年普くらし体験試行来園（注）
- 1月30日 小金井二小2学年普くらし体験試行来園（注）
- 2月～ 竹馬製作打ち合わせ調整（注）
- 2月6日 小金井三小普くらし体験試行来園（注）
- 2月14日 小金井三小普くらし体験試行来園（注）
- 2月16日 小金井四小普くらし体験試行来園（注）
- 小金井市教育委員会校長会会長宛事業相談（注）
- 2月19日 小金井市教育委員会学校教育部指導室 募集方法打ち合わせ（注）
- 2月22日 小平市立上水で総合的な学習公開授業調査（注）
- 2月23日 小金井市立南小普くらし体験試行来園（注）
- 3月7日 竹馬竹馬製作打ち合わせ（注）
- 3月14日 子どもミュージアムトーク（小金井三小3学年）（注）
- 5月14日 小金井市研究主任会事業説明（注）
- 6月19日 小金井市教育委員会指導室 ひじろっ子わかし塾募集打ち合わせ・園連校用配布依頼（注）
- 6月12日 小金井市立第一中学校研究主任 事業相談訪問（注）
- 6月21日 小金井市教育委員会指導室 ひじろっ子わかし塾募集打ち合わせ・園連校用配布依頼（注）
- 6月22日 小金井市立第一中学校研究主任・総合的な学習検討会グループ訪問 事業相談打ち合わせ（注）
- 7月4日 ひじろっ子活動時の留意点・養成講座協力打ち合わせ（注）
- 7月6日 ひじろっ子活動時の留意点 園職員打ち合わせ（注）
- 7月7日 ひじろっ子活動時の留意点 園職員打ち合わせ（注）
- 7月10日～13日 ひじろっ子活動時の留意点ボランティアを曜日班説明（注）
- 7月12日 ひじろっ子決定・養成講座案内通知発送（注）
- 7月18日 ひじろっ子活動時の留意点および案内解説員現場対応詳細確認（注）
- 7月20日～8月30日 養成講座・ひじろっ子わかし塾開催・反省会

(3) 子どもボランティア・ひじろっ子の募集

①募集経路と募集方法
参加児童の足の便等を考慮し、園に近い学区の小学校の児童に、管轄教育委員

- 27 -

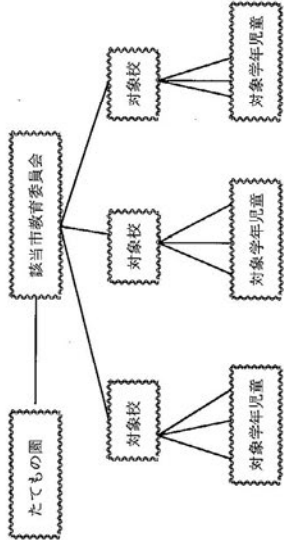
会を趣出して募集をかける形をとった。小平市教育委員会、小金井市教育委員会に相談ののっていただき、該当校に募集チラシ（応募用紙付）を配布した。対象学年は、郷土学習の履修時期等、学校教育との関連を考慮し、4年生、5年生、6年生に限定した。当初、中学生への呼びかけも検討したが、対象校児童の持ち上がり学区である中学校研究主任に相談ののっていただきたところ、たてもの園の展覧で募集がいずれかという児童が中学生以下になじみの深いものであり、中学以上の児童で見えない部分があるとの意見もあり、小学校時代に顔に親しみ、たてもの園が大好きであるという児童が中学生となつたあかつきに募集をかけた方が進めやすいとのアドバイスがあった。検討の結果、今回の中学生の募集は見送ることとした。チラシについては、対象校の対象学年の児童数を各教務指導部門に教示いただき、各児童の手に渡るよう募集チラシの枚数を意図した上で、各教委各校があらためて枚数確認や仕分けをせずに済むよう、対象校対象学年用の仕分け準備をした上で配布を依頼した。定員30名を予定として募集をした。

ひじろっ子参加呼びかけ対象校

小平市	小金井市
花小金井小学校 小平第三小学校 小平第八小学校	小金井第二小学校 小金井第三小学校 練小学校

※応募資格：4・5・6年生
養成講座と反省会に参加・塾開催期間に遅く5日（午前・午後）に分けて活動する場合は平日とカウント、累計で計5日以上）活動
交通費：なし
保護者の許可を得て申し込める人（ボランティア保険加入時に保護者の同意・名前が必要）

ひじろっ子募集フロー



②応募とひじろっ子の決定

各教委への文書配布依頼のタイミングから、対象校児童には遅くも6月下旬には配布したと考えられる。保護者からのたてもの園への問い合わせが、教委への文書引き渡し3日後あたりから入るようになり、各現場で迅速に対応いただいたことがわかる。応募の受付方法は応募用紙の郵送やフアクシミリ受信の他、7月7日・8日の2日間をたてもの園総合インフォメーションでの直接受付日とし、この日を最終受付とした。児童は手紙を書きなれないことや近距離に居住していることから、保護者とともに様子を見ながら届けるに当たり、公園内市民プールに遊びに来たついでに受付に立ち寄るケースもあった。フアクシミリの利用と直接の届け出が多く見受けられた。30名の募集に対し応募は17名（男：2、女15）となり、うち1名辞退者があったため、最終的に男2・女14の計16名をひじろっ子として登録した。保護者の安心感と児童のむかし塾への意欲を高めるために、応募者への参加決定通知は、保護者と児童連名の宛名で連絡をした。以降、ひじろっ子児童の事務連絡は、すべて保護者・ひじろっ子双方を宛先としてしている。

ひじろっ子応募状況

ひじろっ子所属校	4年		5年		6年		男女別計		総計
	男	女	男	女	男	女	男	女	
小金井市立小金井第二小	1				2		3		3
小金井市立小金井第三小	1		1		3		5		5
小金井市立練小	4	1					4	1	5
小平市立花小金井小	1						1		1
小平市立小平第三小	1						1		1
小平市立小平第八小					1 (1)	1 (1)	1		2 (1)
男女別計	8	1	1		6 (1)	1 (1)	2		17 (1)
総計	9	1			7 (1)				

*うち () 内辞退者

3 ひじろっ子むかし塾

(1) 養成講座（平成13年7月20日～21日）と留意点
ひじろっ子の顔合わせとマナーを含めた活動の留意点、技術や知識の獲得を目的として養成講座を実施した。

●1日目 7月20日（金） 担当（三好・友野・高橋）
9:30 集合（送付前）
9:40-10:00 開講式（職員あいさつ・紹介、施設の概要） 会議室(3号)
10:00-10:20 ひじろっ子自己紹介（自己紹介とひじろっ子で頑張りたいこと）

- 30 -

※大入ボランティヤ（ひじろ染）講師の都合から、実際の練習では建設見学と説明練習はすべて午後の部で実施し、自由練習を午後5時に閉じように出直された。また、会館での習熟時、大入ボランティヤ1名の見学があった。

温度	校片
16.20	16.13

家の中のものを説明するときには、さねらずに指を指すなど手で示して説明しましょう。子どももボランティアのひじろが子がさわわっていると、お客様も自分たちもさわわっているのかと勘違いします。感れたら直せない物も多いので気を付けましょう。

(2) ひじろっ子むかし塾

① i 日の活動の流れ

午前午後通じて活動する児童と、都合で半日に割って来園する場合とあるため、午前午後のスタート時に必ず「民家滞所」を行い、自分たちが居るべき建物に親しむ機会を設けた。入退園時、予定通り来園入庫への記入を義務づけ、児童の所在がわかるようにした。入退出が予定されているにも関わらず、予定時間を30分繰り越して来園・退園しない児童が居る場合は、インフオメーションから職員へ連絡が入り、自宅連絡や国内探訪対応としている。

9:30 来園 (インフォメーションで受付・バッチをとる・入園時間を書く)

場き置きを弁当を弁当

10:00～ 菜薺を農家の清掃捨て場・雑草を雑草除去・雑草が土間や庭への水打ち)

遊びの道具を出す

～12:00 むかし塾開催（午後の部がないときには、午前終了前におもちゃ片づけ）

～13:00 昼食休憩 (吉野家前ベンチ・雨天時は清邸)

～13:30 茅葺き農家の掃除（午後の部）

～16:00 むかし塾開催

おもちゃ片づけ・迷出手続き
(インフォメーションにパuzziを返す・退園時間を書いて帰宅)

②むかし塾開催期間の流れ

	集成購座	集成購座	全員參加	兩次1名	備考
7月20日(金)					
7月21日(土)					
7月22日(日)			5	5	
7月23日(月)			6	4	
7月24日(火)					
7月25日(水)			8	7	
7月26日(木)			7	7	
7月27日(金)			4	2	
7月28日(土)			2	1	
7月29日(日)			3	3	
7月31日(火)			2	2	
8月1日(水)			6	6	
8月2日(木)			6	5	

- 33 -

つぎに、「むじろっ子むかし塾」の道具の準備や後かたづけ、やっているあいだの道具の管理をすることです。道具が諸師匠の説明の「道具を出すところ・しまうところ」を見て、やってください。道具をだいたい管理することは楽しくておそふぶたにも必要です。かたづけなくて次の遊びをしようにする人には、「道具をもとにもどる」ともして人々であまりい気持が悪いでしょう。— おこったり、注意するつもりだと、相手のくはださい!とお願ひしますよう。 —

人はあまみりかたづけがあけないしょう。おひじろっ子がたづけたいしょう。

4) わからないことを聞かれたときには？

もじもしたり、「え〜と〜」とか迷わない。わからないときには「わかりません」とお応えして「あとで調べておきます」と答えればいいです。あとで自分で調べたり、職員に聞いてみましょう。

5)してはいけないこと

囲に裏や竈の火をさわるのは大人の仕事です。ひじろっ子は火をさわってはいけません（成人ボランティアには伊せて薪割り時の銚・鉋などをさわらせないように指示—
 握力が伴わないので菜園者ゾーンでは危険なため）。

6)どうしても手にも負えないとき

そばにいる大人のスタッフに声をかけましょう。

7) 紧急避难

危ないと感じたときには、すぐその場を避けること。お客さんは大人のスタンプが誘導するので大丈夫です。ひろろ子は「ひろろきんきゅうなんの仕方」に従って避難します。

8)活動の連絡

休むときにはたてもの園に連絡をする。来る日を増やしたり、予定をへんこうで午後も続けて活動したいときには、家の人が心配するので、連絡をして相談してから活動します

●その後の様子を見ての追加事項

1) 態度

あいさつをしても、應って足をあげ出したままだったり、そつぱを向いてあいさつしては、いくら丁寧な言葉を使っても相手に伝わりません。来た人が失礼に感じない態度で心を込めてあいさつしましょう。

2) 恥ずかしくてもやりましょう

1人で恥ずかしいときは、2・3人でやればきつと出来ます。勇気をもってお客さんに声をかけましょう。

(3)自分で考えてやりましょう

お客さんの靴をそろえてあげたり、大人のボランティアのお手伝いなど、よろこばれることはたくさんあります。気づいたことを自分からやってみましょう。

4)仲間で助け合おう

遊びが上手になった人は、うまくできないひじろっ子に教えましょう。ひじろっ子仲間
間で助け合いましょう。

5)してはいけないうこと

- 32 -

をし、貸し出し用に用意したけん玉を借りるシステムとし、約6名のひじろっ子が貸し出しを受けて自宅練習に動んだ。既に自分専用の玩具としてけん玉やペーゴマを所持している者もあり、自宅で保護者の指導で練習をする者もいた。

検定日は予め設定ではなく、応募時に児童が提出した活動希望日の中で、活動予定者が少ない日取りで設定し、養成講座時に発表した。児童が来園しない日は、わかし塾の開催ができないため、検定日の設定により児童の来園を促す目的もあつたことである。私的な予定がないが来園を躊躇していた児童はこれにより来園し、検定を受けるとともにわかし塾を開きある程度の効果を見た。ただし、動かせない予定を持つ児童も多く、大勢の参加が見られなかったため、わかし塾最終週に検定未受講の児童が希望する場合には、随時検定対応をした。後日の保護者面アンケートでは、検定日の存在を募集の際に知らせてもらいたい（＝予定をあけてやりたかった）との意見もあった。

④子どもボランティア・ひじろっ子の来園にもなる園スタッフの対応

●案内係・園内案内係や新規に派生する事務

インフォメーション担当

- ：ひじろっ子来園時にバッチを渡し、来園に来園マークを記入させる。
- ：ひじろっ子退出時にバッチを受け取る。退出時間を修繕に各自書かせる。
- ：来る予定となっているのに連絡なしに定刻 30 分を過ぎても来ない子がいる場合は、職員にその旨を連絡する。
- ：開園時間が過ぎてても帰ってこないバッチや帳簿への退出時間の記入漏れがある場合は、職員に連絡。
- ：欠席等の連絡を受付に直接ひじろっ子が申告した場合は、職員にも自分から伝えるようにアドバイス。保護者からの電話連絡は職員にまわす必ず伝言する。
- ：ひじろっ子の来園が確認できたら、受付係のたてもの園本日の催事看板の吉野家欄にわかし塾開催のプレートをかける。

吉野家該当ソフト者

- ：ひじろっ子がわからないことを聞いてきたときに対応。
- ：ひじろっ子やわかし塾参加者に異常があること（けが）などを見つけたら対応
- ：ひじろっ子がやがていはいけいけいことをしていたら注意する。
- ：巡回の際子どもボランティアが来ている際には注意する。とくに、成人ボランティアの活動日には声をかける。
- ：片付けの時間には声をかける。
- ：なるべく声をかける（＝何か報告してくることがあるので）
- ：簡単なことはひじろっ子に頼んでもよい（例：場所がよくわからないお昼様を案内させる・雨戸を開けている途中に来たら手伝わせる。ただし、問題ない雨戸を選ぶ。雨戸・児童ともにけがに注意・ひじろっ子が来園者を放つて内廊で遊んでいたら、「説明して下さいます」等活動を促したり、来園者に「子どもボランティアが教えています」等紹介して活動につなげる）

●警備スタッフの留意事項や新規に派生する事務

8月 3日(金)	4	5
8月 4日(土)	1	0
8月 5日(日)	遊び検定日	1
8月 7日(火)	2	0
8月 8日(水)	2	1
8月 9日(木)	1	1
8月10日(金)	2	2
8月11日(土)	2	2
8月12日(日)	1	1
8月14日(火)	5	5
8月15日(水)	4	5
8月16日(木)	3	3
8月17日(金)	2	2
8月18日(土)	遊び検定日	3
8月19日(日)	3	2
8月21日(火)	3	2
8月22日(水)	台風中止	2
8月23日(木)		7
8月24日(金)		4
8月25日(土)		4
8月26日(日)		2
8月28日(火)		3
8月29日(水)		5
8月30日(木)	反省会	114
わかし塾開催活動員数	114	103
総計・最終検定員数	161	134

⑤検定の実施

わかし塾養成講座期間中にひじろっ子が遊びの習熟がはかれるように各遊びに検定目標を設定し、検定日を決めて検定した。ひじろっ子にとって初めて挑戦する遊びもあることから、練習しながらの活動期と習熟期の2回に分けて検定した。事前に相談にのっていただいた校長や先生より、努力目標を設けることが効果的とした活動に励む活動となること、アドバイスや、くらしの検定案を参考に、とっかかりを作るため極力単純なものから高度なものまで含めて検定を行った。養成講座テキスト内に検定票の頁を作成し、各級取得者にはたてもの園マスコットキャラクター「えどまる」のシールを取得票の裏面に貼る形とした。マスコットキャラクターのえどまるは親しみやすく人気のあるキャラクターであり、また、児童はシール収集に熱心な傾向があることを踏まえて児童の楽しみが増えるように考慮してのことである。技の習得と検定を目標に自宅での練習を希望する者には、玩具の中からけん玉を1連単位で貸し出した。けん玉貸し出しは、ひじろっ子・けん玉借用書にひじろっ子自身がサイン

※土・日や不都合日は集団員自身が他の出席者に依頼する。

(3) 反省会・お別れ会

最終日に「反省会・お別れ会」を実施し、むかし塾閉塾のためのおもちゃの手入れと片付け、使用した民家の大掃除、反省会等を以下の手順で行い、最後に終了証を一人一人に手渡し記念とした。反省会の設け方はむかし塾閉塾期間中に調整・決定したため、前半に集中して来園したひじろっ子への対面連絡ができなかった。反省会前1週間以内に会えないひじろっ子への連絡は、ひじろっ子仲間から「お知らせ」を届ける旨申し出があった場合にはお願いし、最寄りのひじろっ子仲間の都合に合わせて合わない場合は断送連絡とした。送別会には成人ボランティアの都合の合う人にも出席を募り、4名の参加があった。

●日時：平成13年8月30日(木曜日) 10:00～13:00

(担当：三好・友野・高橋、ボランティア：高橋・山本・伊藤)

※集合：10:00までに吉野家の庭に集合(雨天の場合は吉野家土間)

※いつものように、バッグを受けとって、マークをつけて入場します。お弁当はお弁当置き場に置いてから集合します。

10:00～11:15 かやぶき民家の掃除(はたきかけ、掃き掃除、雑巾がけ)

※この日はとくべつに「ぬいぶくろ」で床や壁をみがきます*

遊ぶ道具の点検・後片づけ

※以上、グループで分担を決めて実施※

吉野家式台前：記念集合写真撮影

11:20～12:00 反省会(於：プレハブ2階多目的ルーム)

※感想を書きます。

※保護者宛アンケートを預ける

12:00～12:45 昼食およびスイカデザート会(成人ボランティア参加)

13:00 参加賞(終了証)授与・解散

※夏祭りの動きでは、反省・お別れ会終了後急ぎよ帰宅しなくてはならない児童が出たため、終了証授与を昼食会の前にしている。

●持ってくるもの：ひじろっ子養成講座テキスト・筆記用具(忘れずに)・弁当・水筒

●注意：動きやすい服装で来てください。

ひじろっ子集合写真は後日各自に郵送し、ひじろっ子本人や保護者から礼状など返礼も寄せられた。ひじろっ子に託した保護者宛アンケートは強面ではなかったが、多くの方に協力いただくことができた。

：ひじろっ子がわからないことを聞いてきたときに対応。

：ひじろっ子やむかし塾参加者に異常があることなどを見つけたら対応。

：巡回者の際、子どもボランティアが来ていないことをしていたら注意する。

：アの活動日ではない日には注意。

：子どもボランティアに避難指導をする際に協力をする。

●消防スタッフの留意事項や新規に派生する事務

：ひじろっ子の使用する清掃用具と重機を使用して使用する道具が生じた場合は、置き場所を徹底する。

：掃除の仕方に問題がある場合には職員に報告する(ものを破損した時等)。

：ひじろっ子がわからないことを聞いてきたときに対応。

：ひじろっ子やむかし塾参加者に異常があることをなをを見つけたら対応。

：ひじろっ子がやっていたりいないことをしていたら注意する。

●職員の日替りひじろっ子対応当番

学校運営事業担当者以外にルーティン化した職員の対応当番を決め、ひじろっ子の活動をサポートする。

：朝 受付が多化で連絡しにくいことがあるため、10時には活動予定者が全員来たか否か受付へ電話を入れて確認する(早朝に活動者の変更を掌握する)。

：定刻を過ぎても来園しないひじろっ子の連絡先に連絡を入れて確認をとる。

：午前中に1回活動の様子を見に行く。

：12時 弁当をとりに来るように活動民家へ電話を入れる。

：午後2時半頃に1回活動の様子を見に行く(1日の活動者の疲れが出る時刻)。

：午後3時～ 成人ボランティアが帰宅するので、活動民家へ代わりに入るか、吉野家就労シフトの案内解説員に依頼確認をする。

：午後4時15分頃 片付けの片付けの声を依頼する。

：5名以上ひじろっ子が揃った日(＝大勢来ている日)や1日滞在する子が多い日は、手がすく子がいたり途中であきそうであるため、集中力を持続させるために午前11時と午後3時にむかし塾閉塾中の放送を園内に流すようにする。また、様子を見た結果注意を促した方が望ましい場合にも、随時放送を流して来園者の参加をはかるようにする。

○対応当番表○

7月22日(日)～7月29日(日)	学芸係：友野(補正)
7月30日(月)～8月5日(日)	学芸係：三好
8月6日(月)～8月12日(日)	学芸係：高橋
8月13日(月)～8月19日(日)	学芸係：高橋
8月20日(月)～8月26日(日)	学芸係：河部
8月27日(月)～8月29日(水)	学芸係：真下
各期間の水曜日	管理係(他見・他調整職員)
補正職員(他見・他調整職員)	学芸係：友野

4-4 実施結果からの反省・所見

(1) ひじろっ子と学校連携の関係

初代びじろっ子は初回の募集ということもあり応募数は当初予定を大幅に下回ったが、応募状況からともおの顔のふれあひまでの取り組みの成長を見取ることができた。頁の表にあたりとおひ、全体的に小金井市の小・中学生の応募が多いため、平成12年度の学校連携事業実施時期から先行して小金井市の協力を多く仰いでおひ、平成12年度の学校連携事業実施時期から先行して小金井市の協力を多く仰いでおひ、見習いも機会が多かったことに起因すると思われる。一方、小平市の学校の学習面での活用は、前年度同様ではむしろ中学校の方が職員が深く関わる形で対応しており、同市の参加校が児童数が少ない専攻校も多いためにも応募が少ないうえに、また、小・中学校のなかで石臼や水泳の体験に來園した学生であり授業で習った道具類をよく記憶している児童や、たてもとの園を使った授業の記念発表として有志を募り実施した「子どもミュージアム・アット・ホーム」に参加した児童などが発展的に参加しており、小金井二小6年生は、同校の平成12年度の評価を使用した総合的な学習において、たてもとの園が工芸グループの研究公開授業への出張協力をした教員である。授業で数回に及び体験しているため、むかし塾にかいても短時間で顔を覚えさせている。さまざまな機会を捉えた反復体験から確かな記憶や体験につながり、新たな展開がのぞめるよう今後も継続して行く価値がある。

これら学校で来園した児童の共通事項は、学校送迎事業を担当した職員についての記憶（以前のように説明しているが、どのような行動しているか）が鮮明にあることである。職員の間にも各児童の所属校を来園時に対応した内容を蓄え、細かな技術や知識、職員間の指導等、補正する形で説明・対応するように心がけ、単なる「思ひ出」に終わらないように注意した。いずれにせよ、家族や友人と来園した楽しい経験や、学校での授業（来園・園職員の見学出張等）、園の季節行事にわずかでも触れる機会を持ち、その印象がマイナスだったことが出来事の一つの契機となっていると思われる。

また、今回の応募は、1年生が少なかったことも特色である。5年生は夏休みの移動学習の経験から今年度より、敬愛とのかやうとして、養正講座のある夏休みに移動学習の集計中であることが判明した。聖職のために来園して、終身職業を養成する課程と目的に完全に重なっていたり、半期の監禁授業での数次の英語があるにも関わらず、5年生は1名という結果となった。各校との常日頃の交流は専断すべきも因つて、年齢者に対する内外は今後は今後の課題である。

(2) 野外博物館と安全管理

①博物館としての危機管理

ひじろっ子募集と前後して、大阪教育大附属池田小学校への侵入によるひじろっ子誘拐事件が起き、ひじろっ子の避難誘導のあり方について再検討をするこゝとなつた。たゞもこの園は入園料徴収型の博物館である、一般来園者は正面玄関ととなつた。たゞもこの園は入園料徴収型の博物館である、一般来園者は正面玄関ととなつた。たゞもこの園は入園料徴収型の博物館である、一般来園者は正面玄関ととなつた。

定レベルまでは整備されているといえる。しかし、野外博物館というオープンな性格から、某かの形で野を乗りに越え侵入することは容易ともいえ、園内各建造物の案内解説員や警備員の配置体制など検討していく必要がある。

とくに、平成13年度からは案内解説員経費が大幅に削減されたため、野外展示場では一人の解説員が複数の建造物を担当する形となっており、死角や巡回時間間の装飾や物品の破損などの問題も少なからず生じている。ひろ子子が活動する茅葺き民家資料館は前年度から2ポストアト城で当該時期には梅を1人の解説員が担当していた。茅葺き民家の案内解説員の削減は当該民家内での成人ボランティアのいるりの火の管理活動と案内解説を兼ねる形で加えられた結果であるが、江戸東京博物館内では学校との調整を最も早期に着手し、それぞれのスタッフの魅力を最大限活用する形で教育委員会と詰めていった学校連携事業にとっては大きな痛手となった。

成人ボランティアの野外展示場での活動時間の目安は10時から15時であり、ひじろっ子の活動時間が2時間程度だ。本人がいても頭強き時間を作り、ひじろっ子の活動時間の教養のアドバイスはあったが安全面を考慮し、足らない部分は多くの部分の多くは、酒田家を中心とした吉野家常駐ボランティアの案内解説員1名と、巡視の巡視の案内解説員1名を吉野家常駐に委ねず運用を対応し(従って、その巡視の巡視の手薄となる問題が生じている)、頼みの巡回や時間を見てのほりつき補う形となつた。

②児童の仲間の来訪による騒ぎへの対応対策の必要性

むかし塾はどのような児童も好む遊びを含みため、子どもボランティアの活動を監視する考えのある子どもでも嫌子を見に来たり、遊びに参加することがあった。具体的には「ばかばかしい活動をしている」ということで、遊びに参加しなかつた道具をもとに戻さないやちよつかりを出して来たり例で、ガキ大将による遊びが最も高上した襲撃である。前者は、現場に押寄せしている案内係員が注意忠告を重要視することを怠るから、注意を受けるほり三カスケールの果敢があつたため、機会をとらえて学童交遊交渉時担当職員から、学校での束縛後の更なる薬園に対する歓迎と子どもともボランティアとの関係性を高く維持しようといふ意図があったところ、以降あざけた態度でその薬園はなくなくなった。後者は、子どもボランティアと当初は遊んでいた形であつたが、楽しさが高じて連れ出し、持参したビーニー帽を吉野家内で乱射してふさぎだされたために、成人ボランティアに入り開校の日を確認して翌日來園したことになったケースである。むかし塾が気に入らずにいじめられていた児童であり、普段の生活の中でビーニー帽が危険であるということを知解しておらず、また、遊びに興じたいといううちに、子どものボランティアの注意を受け止まらなくなつてしまつた。また、子ども同士で遊ぶように見えるため、わんぱくぶんどりでこどでストップをかけられるかの判断がよい上に難しかった様子であることを

最終的に、このわんぱく集団は、むかし塾開場場所から園内の他の場所に移してのげんかに至ったため、西川家別邸担当の案内解説員に伊達家の門から園外に出るよう要請され退出した。子どものげんかや悪ふざけでもエスカーレートするなどの来園者に危険な状況を生ぜしめたり、建造物を傷めることは否めない。

当該児童は学校連携事業・監禁めの学校来園時からつながらりがある子ども達であり、その後、自主的にたてもの園へ遊びに来たり、むかし塾の開催の様子を知り、開催日を事前に確認して来園し、楽しく遊んだ上でお気に入りのビービー弾の私物を持ち帰った。子ども同士では抑圧がなくなったり、危険性の認識自体が薄らいケースはままあるため、要所で大人や職業的な管理監視体制の徹底は必要不可欠といえそうである。

これらの動きの中で、ひじろっ子ととりまき環境整備には、素朴な対応が長所であるため、園の成人スタッフがボランティアと職業的な要所対応に長けた案内解説員と双方の対応はそれぞれに有効であったが、とくに、ひじろっ子に徹底に注意すべき事項の指示は不足している。また、案内解説員が細かく対応している。また、危険回避や誘導面で案内解説員は警備員と共に大きな役目を果たしているため、ひじろっ子の身近の案内解説員の存在は心強いものであった。年齢的にも成人ボランティアはひじろっ子の祖父代にあたる年齢の者が多く、かつにちという自省の言葉もきかれたが、ひじろっ子の親兄弟の年齢にあたる解説員とともに、双方の目で、多角的にひじろっ子への注意事項の伝達や、緊急時の対応ができたと思われる。いずれにせよ、長・短所あった今年度の危機管理体制は、児童を預かるという意味で、最低限の基準をクリアしていったか否か許さない点が残る。現状の園内の危機管理体制は、非常時にはアナウンスで待機を促し警備員等もビクターセンター等から要所に駆けつける対応となつてはいるが、避難時の集合場所の矢印表示（どちらが「ひろば」か？車に「ひろば」へ避難してください」とアナウンスしても来園者にはとっさの位置の認識は不可避である）等の標識が欠如している点等、いくつかの改善の余地があると思われる。施設小事件以来、学校連携打ち合わせに訪問すると、各校とも来校者に対する対応は、いっそう活発の有効性を高めて集客をはかる努力をするならば、それに思合った安全管理の責任を再検討した体制作り・整備が望まれる。

(3) 募集・運営上の課題

①募集経緯

募集経緯の30名は、子どもボランティアの受け入れは初めてである点や夏期事業の職員分担当状況を鑑みて20名規模が妥当ではないかとの意見もあったが、2市から対象校を選んだため30名の募集と決定した。結果として18名となり初回としては適度な員数と感じたが、逆に、ひじろっ子が来ない日が生じたり、ひじろっ子が1人で活動する日が生じたため、最低20名程度の参加は必要であることがわかった。その子にとっての活動初日が1人になってしまいうケースが一例あり、成人ボランティアにもなるべく注意を払ってもらよう連絡したが、はつきりしない事例も多く見受けられたため、職員が様子を見ながら一日むかし塾に付きつくこととした。本人も心細いため家族に見に来てくれるように頼んだことと、家族の方の様子見の来園もあった。今後、ひじろっ子の活動が定着すれば、家族が不安を感じない活動員数の確保は可能と思われる。

②事前説明会や保護者への対応

●事前説明会

時間的制約や一部教委から事前説明会までは今回は必要ないのでは？との意見もあったため、対面の事前説明会では実施しなかった。このため、参加にあたって疑問点がある保護者の方は電話で問い合わせたり参加児童にその都度質問を託してきた。基本的にはどれも単純な質問であったため、疑問点への対応は十分であったと思われる。最も多かった質問は、弁当持参の折りの弁当がどのような管理をなされるかというものである。保護者の大部分は野外博物館である当園の状況を知らず、また、炎天下に弁当が放置されることによる食中毒のリスクを警戒したり、管理の状況によって用意する弁当の量を減らす必要があったのかもしれない。空調の効く事務棟内に弁当置き場を用意し来園時に預かる予定だったが、近年の食に關わる事故を踏まえ、事前説明会開催のあかつきには説明すべきポイントである。また、終了後の保護者からのアンケートでは、説明会でなくとも、ある程度の時間子どもを預けるため、どんな人に預けているのかわかりたいとの顔合わせの機会があれば良いとの意見があった。

●保護者の見学

ひじろっ子むかし塾の開催の一つの付帯効果として、ひじろっ子の友人や家族が活動の様子を見に来る分、来園者が増えるということがある。また、後述の保護者アンケートでは、「ひじろっ子」の活動を機として、親子の対話が深まったという指摘が複数人より寄せられており、児童の活動が家庭内での精神的な成長にも繋げたことがわかる。会話を機に保護者の方が見学に来た例もあつた。また、保護者の年齢では高学年入園の強いとなり入園料の400円は安くない金額のため、施設回来園して活躍の様子を見たい保護者には出費がかさんだとの意見があつた。また、本人が「見に来ないで」といったために躊躇して見てみたいと思いつながら来園に至らなかったという報告もあつた。ひじろっ子の活動の様子をその家族が知ることも、ひじろっ子の励みとなるものである。今後、来園の契機となるように、むかし塾開催期間中は保護者は1回は無料入園できる等、保護者の見学を促したり、反省会に招待する等、工夫が必要である。

③昼食指導

園内でのさまざまな事業運営を考慮した上で、適した昼食のとり方を説明した上で、身をもって示す必要があつた。昼食時の指導の要点は次のとおりである。

- 1) 雨天時の昼食は吉野家大塚のベンチ、雨天時は高橋美術館内休憩所を厳守。
- 2) 昼食を食べるのを忘れないように声をかける。
- 3) 活動の様子を知る
- 4) 昼食前後の活動の切り替わりの判断がつきにくいので様子を見て指導する（＝そろそろ午後の掃除をしましょう。お客さんが来たので食べ終わった人はお迎えしてください）。

木陰での休憩・昼食は体力的に支障があるものではないが、雨天時の来園経路がないひじろっ子が一度は休憩所で食べたい等の理由から、混雑しやすい日とは清部へ抜けかけ宣言をする等、園としても困るケースがあつた。この事

想は当日の活動メンバーを見るとやさしく予測できる状況だったため、昼食時間になると昼食指導担当が全員の弁当を吉野家ペンチへ先に運んでしまいい緒に食事をする等工夫をした。ある程度馴れてくると電話連絡に応じて役目を決め受けとりに来るなど仲間が順次分担するようになった。

抜付駆け対応が困るのは、混雑状況を説明しても理解しないことがあったり、一人で行動する仲間を誘うことにある。昼食に際らず外れたことをする時には必ず大掛かりな仲間を誘う仲間がある。各ひじろっ子の来園日を頭に入れ、少し様子を見ながら仲間は誘う仲間になるべく成人ボランティアも一緒に各自の話を聞くようにした。なお、昼食時に同席し、活動の様子や工夫を尋ねたり、に食べて欲しい旨をお願していたが、空欄が効いた食堂での食事の調理にしている成人ボランティアが多いため、依頼をしたはすであるがそのような動きにならなかった。

④活動中の物品の整理や態度

「ひじろっ子は遊びに来ているのではなく、お客様のお世話をする役目であり、また、園内のものはなかなか直せない大切なものである」ことを繰り返して説明し、ヤーとしているが、「具体的に何がいけないのか」よく理解できていない場合や、行動につながらないことがしばしばあり、それらが物品の破損につながるケースがあった。以下の2点である。

- 1) 説明のときに至内の資料にさわりながら説明してしまう。
- 2) このくらしい平気だろうと思うやってみよう。

1) → 園のスタッフは素直な農家のうち、新島家の資料は手に触れて説明をしたり活用して良いことになっている。しかし、ひじろっ子自身自身が触れがわからない（例＝振り回してもいいの？重いのか？等）場合があったり、ひじろっ子がそれらの資料に手を触れるのを見て、他の来園者が子どもが触れているのだからかまわないうと構えず、触ってしまうことがしばしばあった。成人ボランティアの日常の活動でも同様のケースがあったため、ひじろっ子には人の見ている前で展示として置いてある道具類に触ったり、触りながら説明をすることを禁じることとなった。しかし、子どもボランティア養成講座では理解を促進するために、物をとりあげて説明をさせるをえない局面もあり、その印象も違ったためか、触らないということを厳守することが難しい様子であった。保護者のアンケートでは、文化財の破損に対する補償の問題を訴える必要があるとの指摘も寄せられている。

2) → 加減がわからなかったり、禁止事項と自分の行為が即座につながらず、面白いと思うと止まらなくなってしまうものである。大人から隠れて行っていたずらの類であるが、仲間が同調や注意が愉快で止まらなくなっている中で、目撃していた他のひじろっ子の連絡で自体の態度はたやすくできる。その態度叱る形となるが、さして大変な行為と考えておらずこの重大さの理解ができないうえ、悪びれた様子が見られないうえがある。ただし、物品破損につながる行為は注意喚起以降は行わなくなった。生活態度に関わる部分は態度が悪いと同じ行為を繰り返している。目立ったものは次のようなものである。

・新島家の井戸まわりの竹垣の上部の節にペーゴの先端部を押し当てて穴をあけてしまった。野ざらしで結れているため一つ押しまでたら穴があいて面白かったことに起因する。節が抜けた中に水がたまり腐りやすくなることや指をつこむと危険であること、すぐには直せず費用もかかること、直せる人も少ない等、してはいけない理由を説明して叱ったが、当面の間、予算的に竹垣の修理はできない状況にある。

・機嫌が悪くなることと態度に受転がり来園者の邪魔になったり、足を投げ出したり転がったまま来園者に挨拶をする。→自覚の問題なので、そのような態度が失礼にあたっていることを説明し、きちんと相手の方を見て声をかけること、そっくりかえった姿勢では挨拶するものではないこと一等、気付いた時点で該当者にその都度注意をした。機嫌が悪いとき以外には嫌ねきちゃんと対応できるようになったが、ちよんぐずぐず態度が悪いときに鉢合わせになった来園者から、主旨はよくてもきんぐずぐずのならば台無しであり、来た人が不愉快なだけという厳しい指摘を受けた時もある。

⑤ひじろっ子の連絡事項の伝達

ひじろっ子の活動期間中、玩具の管理（個数の確認）も一つの役目であったが、日々のひじろっ子の顔ぶれが異なるため、紛失時や発見時の数量の増減伝達や、追加の注意事項の伝達をひじろっ子間でもしにくい部分があった。これらは、連絡係（玩具類の個数を定期的に記入したり、簡単な連絡をきこめるもの）を用意すれば解決できる事項であり、また、1日のまとめですることにより、ひじろっ子の日々の反省や翌日の活動への責任の自覚などにつながるものである。ひじろっ子の面倒を見る職員も細かな個数の変化などとはえにくい面があったため、次年度以降は連絡係の設置が望まれる。

⑥児童を対象とした事業を実施する際の「心構え」

ひじろっ子は「ひじろっ子心構え」を養成講座で学習するが、児童を対象とした事業にのぞむ心構えとして実施スタッフ側でも注意すべきこととして次の事項がある。

- 1) お客様（とくに小さな子ども）を預かっているため、職員全員で安全管理を行う（事業実施担当係以外の協力も不可欠）。
- 2) ひじろっ子の心構えは自分が遊びに来ているのではないというポイントを押さえて、職員も対応する。
- 3) ひじろっ子にはある程度平等・公平に対応する。

1) について

ひじろっ子企画の直接の部門以外は、事務執行のタイミングのずれなどあり、対応が当番にあたっていても遂行できない・しない場合があった。この点はひじろっ子企画

担当等が目を配り代替対応をした。ただし、危機管理意識の違いからの対応の差異は今後は正していくべきである。また、児童を預かる事業は全般的な問題であるため、危機管理意識の違いが当該事業の主管係の違い（＝事故が生じても他の部門の分掌業務）からスタッフ間に生じている場合は速やかに是正する義務と責任がある。

2) 3) について

担当スタッフの資質面に關わる問題と思われるが、私的な可変性が先行してしまい甘やかしがちであったり、職務的に考えても公平感を欠く対応がまま見られることがある。年輩のボランティアの一面からは、「可愛くて叱るべき時叱り損なう」「子育てを終えて時間がたっているの、今どきの子どもにはどう対応したらいいかわからない時がある」との発言があった。個性の問題もあり一概にはいえないが、確かにひじろっ子の親にあたる年齢層のボランティアの方が強かく目を配れる面もあった様であった。この点、案内解説員は、要所を押さえて注意喚起や遊び指導の補助をしていた。目配りを担当とする事業的対応が良い面でも現れた結果である。職員も、児童の職務的な扱いになれているとは思えないため、ひじろっ子の主旨を考慮して対応しきれないという点や、児童・生徒の来園は博物館にとって日常的にあることであり、自然なことである点を踏まえれば、対処の目安は自ずから押さえられると思われる。

⑦ ひじろっ子の活動の機会

ひじろっ子の子どもボランティアとしての活動にあたり、各自にボランティア保険を用意し活動を開始した。当該保険は年度内有効であり、ひじろっ子の中には夏以外にも活動したいという児童も見られた。適当な期間をあげて繰り返し同様に活動をするこどもも、反復学習として有効であるので、学校の冬季休業中や、たてもの園フェスティバルなど休日の事業などに、ひじろっ子の希望を聞いてむかし塾を開催する等の工夫も今後有効であろう。その際、むかし塾の主旨を踏まえ、当該事業が来園者から見一つ一つのイベントとしても存在するという園の都合やメリットだけに着眼するのではなく、その年のひじろっ子が真摯的にまよって継続参加ができるよう、有効な時期や日程を検討し、ひじろっ子の成長につながることを第一義とすることが肝要である。

⑧ その他一物品調達面での成人ボランティアの協力について

（作馬製作）ひじろっ子がむかし塾運営に使用する竹馬については、技術を持つボランティアの承諾もあり、半年以上の猶予を待って材料の調達から製作に至るまでの範囲を依頼したはずであったが、行き違いから材料の準備が遅れたため、本人の納得のいく材の調達が困難となり一時製作自体が危うい状況に陥ってしまった。これは、依頼した物品を使った事業の感言や方針（＝必ず実施する）をボランティアがよく理解しておらず、ボランティア自身が行う通常の自主的活動と同様、折り合いがつかない場合は見送りが可能と考えていたことや、園職員のボランティアに対する対応に一部問題が生じていたことに起因する。とくに、技術のあるボランティアにはボランティア全員にその技術を広めるよう常々お願いし

ているが、民俗的技術に微妙な点が伝授しにくかったり器用不器用の問題もあり、その人しか出来ない事例や早さ・レベルが存在する。このため、一部のボランティアに急ぎのことが集中する傾向がある。従って、誰にでも出来る事例で、かつ、園の事業として優先度の低い事例を、その一部の人に緊急依頼せざるをえないような事業運営は極力避けるよう職員全員が心がけ、全体を見る視野と計画性を持つて事業準備にあたることが大切である。混雑時に重宝から一部のボランティアを火急に活用する姿勢では、計画性を持って早期から調整を重ねてきたその他の事業準備に遅れを来すことになり、また、ボランティア自身は園の職員の依頼事項の園事業内の位置づけや優先度の判断がしにくい場合がままあるからである。ボランティアの活用が多岐にわたればわたるほど、園内の調整は重要な課題である。

結果的には、最高の素材ではなかったが、仲間のボランティアが説得に努めてくれたことでもありご理解いただき、たくさん竹馬を製作してもらったことができた。竹馬には一組ごとに草花等の愛称をつけてマジックで記入し、バラバラにならないように職員が準備した。今後もより安全で使いやすい竹馬を作れるようにより素材を求めるよう努力し、製作協力者の期待に応えたい。

(4) むかし塾参加者等の感想その他

① ひじろっ子の感想

ひじろっ子養成講座においては、各自の自己紹介と子どもボランティアとしてやりたいと思っていること、挑戦したいことを発表する時間とあった。ボランティア活動に興味があったという意見や、竹馬や松葉など、各自があまりしたことのない遊びを覚えたい、昔のことに興味があつたので覚えてきちんと説明できるようにしたい、等の素朴な意見が多く聞かれた。反省会では、よくできたこと・工夫したこと、むずかしかったこと・がんばり足りなかったと思うこと、などをそれぞれ3つ程度、まとめとして文に書いてみる形をとった。以下の感想があがっている。ただし、「まとめ」については、個別に「よくできた」等、考えてみたい事例をあげてしまうと、とくに、学年が低い児童層、個別の事例を箇条書きにして終えてしまう傾向があったため、短くても作文形式で自由に書く形を採用していくことが望ましいように思われた。

○ よくできたこと・工夫したこと

（4年生ひじろっ子）

- ・ せつめいは、まあまあ、よくできた／あそびは、さいしよよりも、うまくできるようになった／ていねいに、おきやくさんに、しゃべれた
- ・ こまを出来るようになった事／できるだけあいさつをするようにした／たのみのめそつてほろきで、はいた
- ・ けん玉を教えるのにくふうした／たけ馬をがんばった
- ・ 竹うまが、よくできたと思う／けん玉／おて玉
- ・ そうじ／あいさつ／普遊び

- ・ 初めてのころははずかしくて案内できなかった／コマの試験を一回も受けられなかった
 - ・ ペーゴマ／せつめい／遊びのおしえ方
 - ・ そうじをあまよりしくなかった／でかこまが回せなかった／お手玉がむずかしかった
 - ・ 友達を増やせなかった／きびきびと（先頭に立って）行動できなかった／遊びに夢中でお客さんにあいさつしわすれた
 - ・ コマがでえなかった／子どもを竹馬にのせてあげたけど、うまくおしえられなかった／わるふざけしすぎちゃった
- ◎某年も「ひじろっ子むかし遊」に参加したいですか？
- ・ はい 14名（たのしかったし、ペンきょうになったから：夏休みにはリ（？）があつたし、遊びもできるようなったから。楽しかったから：とってちがう学校の友達もできて楽しいから：体力もつくし、いろんな遊びができるし友達ともできて楽しいから：とても楽しく、そうじも楽しかったから：とてもいい体験だと思うから：今年、とても楽しかったから来年もぜひ、参加したい：今年やって楽しかったから：ペーゴマが出来ないから、いっぱい練習して出来るようにする：ことしできなかったことをらいねたくさんやりたい：来年がたのしみだから：もっと上手になりたいから）
 - ・ いいえ 1名（中学生はがんばりたいから。でも、手紙がまたきたらやりたくなくつちやいます）
 - ・ わからない 1名
- ◎保護者アンケート（回答12件）より
- *参加の動機／子どもの意志 10（うち、子どもが友達に誘われて：2、保護者の後押しもあわせて：1）
- 保護者の意志 1
先生の声がけ（推薦）1
- *活動時の子どもの様子
（積極的に来園していたか）
- ・ 自発的に楽しんで参加していました。
 - ・ 積極的に通っていました。毎朝、張り切って「今日は誰が来るかなー」と楽しそうに出かけて行っていました
 - ・ 積極的に出かけて行きました。毎回、参加するのを楽しみにしているように思いました
 - ・ 自分の意志で参加を決めたので、毎回楽しみにしていました
 - ・ 午前中の参加が楽しかったらしく、引き継ぎ午後も寝るくらい。充実していたのではないかと思います。
 - ・ 本人なりに来園した方に一生懸命説明したり、昔の遊びを楽しんでいました。二小では、現四年生については、昨年度「昔資料館づくり」の中で、江戸東京たてもの園にもおじゃまし、自分たちなりに昔のことについて調べていた

- 47 -

- ・ そうじ／あいさつ／遊び
 - ・ けん玉／こま／お客さんに声をかけたりした（おはようございますなど）
 - ・ けん玉やこまのせつめいがよくできました／こまをつよくまわせるくふうをしました／ことがつかいはよくできたと思います
 - ・ おて玉がよくできた／竹うまがよくできた／つな馬家でははたきがよくできた（6年生ひじろっ子）
 - ・ 昔遊びがうまくできた／昔の物のつかいかたや道具の名前をおぼえた（6年生ひじろっ子）
 - ・ けん玉やこまが上達した！／いろんな学校の友達ができきた！／お客さんにうまく教えあげられた！
 - ・ 小さい子ども（男の子）に、剣玉、竹馬、コマ、ペーゴマを教えた／外国人に吉野家の案内とその外国人の女の子に竹馬を教えた／清掃を力を入れてできた
 - ・ こま／竹うま／竹馬をおしえる
 - ・ ペーゴマが一応勝てるようになった／竹馬ののれるようになった／けん玉の野郎シリーズが金でできた
 - ・ 1人の日に、お客さんへの対応をがんばった！／お客さんに説明する時、その人が目をわけて今では20歩位歩けるようになった／竹馬など全然できなかったけど、助けてもらったりして今では20歩位歩けるようになった
 - ・ ペーゴマができるようになった／おきやくさまができてきいあそびがあったらおしえた／ともだちがいっぱいできた
- おもしろかったこと・がんばりが足りなかったこと
- （4年生ひじろっ子）
- ・ ペーゴマがむずかしかった／コマもむずかしかった／けん玉もむずかしかった
 - ・ せつめいがあまうりうまくできなかったです／いろんなもの名前をおぼえることがむずかしかった／つづけていくことができませんでした
 - ・ おきやくさんに、もっと、こまをかければよかった／ペーゴマは、まわすのにむずかしかった／おきやくさんに、あそびをもっとおしえればよかった
 - ・ 細かい序の説明をよく出来なかった／ぬかぶくろで床をふくのがむずかしかった／ペーゴマの練習をあまり出来なかった
 - ・ せつめいをあんまりしない
 - ・ こま／ペーゴマ
 - ・ 説明／水うち／ぞうきんあらい
 - ・ せつめい／ぬかぶくろ／水うち
 - ・ ペーゴマ／水ぶき／説明が少しかでできなかった
- （5年生ひじろっ子）
- ・ お客様にせつめいを自分からできなかった／昔遊びができても、うまくおしえあげられなかった／そうじも、きれいにできなかった
- （6年生ひじろっ子）
- ・ 竹馬とペーゴマができなかった／そうじをもっとまじめにやっていた方がよかった／来る時間が少しおくれたこともあった

- 46 -

- ・ ので、いい意味の奮闘を自分なりに奮闘させていたのだと思います。
 - ・ 自分から準備をして、いつも積極的に参加していました。
 - ・ 明日は、ひじろっ子に行くことに楽しみにして、早く寝も寝ていました。
 - ・ 7月中旬に学校に提出しなくてはならない物が何個もあったので、毎日のように塾通するスケジュールにしなければ良かった、と夏休みに入ってから思っていました。塾通すること自体はイヤがらずに行っていました。
 - ・ 毎回楽しみに来園し、もっと通いたい様子でした。ひじろっ子の日は、家の前に見てほしいと言っていたので心細かったようです。ママがつぶれても竹馬の手本を一生懸命やりました。
 - ・ 毎日元気に来そうに来園しているように思いました。
 - ・ とっても楽しみで、毎回頭一回で用意していました。
- (参加の前後で変わったことは?)
- ・ 特になし。でも、毎回その日の出来事を詳しく説明してくれました。
 - ・ 自分から何事にもチャレンジしてみようと思えるようになりました。特に、竹馬に乗れる(?!) ようになった時は、とても楽しそうに話してくれました。
 - ・ 昔の遊びに興味を持ち、皆に声をかけて一緒に遊びました。また、ボランディアの仕事でいろいろな人と接し、自信をもって人と関われるようになったようです。
 - ・ 物にはありません。
 - ・ たてもの園には近いので何回も行っていました。参加したあとは文化館に對する意識がわかったようです。文化館には長い年月の歴史がしみついているのがわかったようです。
 - ・ 今のところあまりよくわかりません。
 - ・ 少し積極的になった。
 - ・ 暑い中、夏バテするのではないかと心配しましたが、反対に、体力がつき、本人も自信をもったと思います。帰ってから、以前にましておしやべりになり、夕食は「ひじろっ子」の話題で盛り上がりしました。
 - ・ 自分から進んで家のお手伝いをするようになりました。
 - ・ 夏休みなど長い休みはだらだらと過ごしがちですが、目的を持って1日を過ごせるので、参加した日、疲れたらと過ごしがちですが、楽しかった様子が見て分かります。
 - ・ 会話が増えた気がする。「ひじろっ子」って何? とか、どんな事しているの? など、私の質問に對して、楽しそうな返事がかえって来る。草段学校の様子などあまり話さないで、ほんの少しだが声かけが増えて私も喜んでいて。
 - ・ 学童では下手な方だった剣玉やその他の遊びも上達して、毎回頭宅後の話を楽しみました。
- (子どもは「ひじろっ子」について何か言っていたか?)
- ・ 「いいボランディアだねー」の一言でした。来園した方への説明も昔の遊びも、たくさんお友達が増えたことも全て良かったこととして受け止めていました。

- ・ お手玉を作ったとか、蟻地獄を見つけたとか、外国人の人と話したなど、色々新鮮だった様子。
 - ・ 他の学校の友達が出来て楽しかった。また、普段遊ぶことの無い昔の遊びに触れられて面白かった。また参加したいです。
 - ・ またチャレンジがあればひじろっ子になりたいと言っています。その際には、もっと積極的にお友達に声を掛けていけるように頑張りたいと言っておりま
 - す。
 - ・ 違う学校の子とも知り合えたり、けん玉ができるようになったり、とても楽しかったので得した気分だと言っています。
 - ・ 「楽しかった。また来年もやりたい」と言っていました。
 - ・ 違う学校、違う学年のお友達ができ喜んでいました。帰ってくると「友達」ができた。〇〇さんって言うの」と言っていました。
 - ・ ひじろっ子の意味が分からないようです。母も分かりませんが、家族はいい、ひじろっ子と言って、子どもに注意されました。
 - ・ 面白かった。中学になっても参加できるのであれば参加したいと言っていました。
 - ・ とても大切な役で、ひじろ会の大人の方々からも学び、子どもとしてできる内容は何か添く考えていました。
 - ・ 先生、お友達、皆さんがやさしくしてくれるし、お掃除とか普遊びとかとても楽しいと話してくれました。
 - ・ 楽しかった。でも、人が多い日だったので疲れた一毎日ささと寝てました。
- (事前説明会の開催希望)
- ・ 必要 1 / ・ 必要ない 8 / ・ もう少し詳しい説明資料があれば必要ない 2
- 一時的でも子どもを預けるので、どんな人に行けるのか説明会とまで行かなくても、顔合わせ程度は欲しい・校定の仕組みなど事前に知りたいたい・書面でも少し具体的な内容がわかれば。
- (活動の様子を見に来園したか?)
- ・ 来た 6 / ・ 来ない 4
- 「来ないで」と言うので見に行きかけたが行かなかった・親などの多くの目があると過度に緊張する性格なので見に行かなかった・子どもは自分の活動する姿を見に来て欲しかった様子ですが、入園料を全然払わなくてはならないので、優待制度などがあれば良かった・活動の様子を見たいのですが、父母が毎回入園料を支払うのも負担を感じました。
- (その他の意見)
- ・ 子どもたちが自然とボランディア (になっているのかどうか分かりませんが) に参加して、活動的に色々なことにチャレンジできるのでプラスになった。
 - ・ もっと人目のつくところでやり、ボランディアとして参加しているという

駛して、これからも、自分の意志で決めたり進んでいくってこれと良いと思う。

- ・今の子どもはなかなか大人と遊びをする機会がないので非常に良かった。また、行く日を決めてあったことで、仕事を責任を持ってするという気持ちで頑張っていく気になったのも良かった。

- ・夏休みと言うことで他のスケジュールの合間をぬってびねり出した5日間。週末2ヶ月間とか春休みとかスケジュールを調整しやすい時期だと良かった。

- ・いろいろな来園者の方にしつかりとした説明ができるか、喜んでいただけるのか、とは思いましたが、毎回「今日はこんなことをしたよ」と目をキラキラさせて話してくれる娘に何の心配もありませんでした。来た方に喜んでもらえ、また、自分も楽しく過ごさせていただけで有り難いことと意思します。

- ・細かい、お手玉作りのあった日は特にカナルンで帰宅していました。子どもはやはり体験的なものは大好きですね。

- ・江戸東京たてもの園は家のすぐ近くでしたし、昔の建物や遊びに興味のあった娘と昼間仕事で家にいない娘の意見はすぐ一致しました。学童終了後初めての夏を星間家で一人でどのように過ごすのかーと思っていたところでしたので、本当に有り難い企画でした。

- ・ポランディアは自発的にするのが理想だと思ってお友達への声かけは今回しませんでした。来年は、お友達を誘って見ようかなと言っています。

③来園者のアンケートより

ひじろっ子むかし塾習俗期間中に、たてもの園に常時設置している来園者対象のアンケートの中にいくつかがひじろっ子の活動について意見が寄せられた。アンケートからは、ひじろっ子が自分なりに一生懸命活動をしていくことが見える。また、二十歳前後の来園者宛の対応を観察したところでは、普通員などを学校教育で重点的に学ばなかった世代のため、ひじろっ子の説明自体に感心したり、興味深いものがあった様子である。子どものかわいさだけに引きずられず、楽しく遊びを体験したり、簡単な知識を仕入れる気風となったと思われる。

- ・日本の昔の建物が見物できる。しかも、建物の内部まで見学できるという事がとても輝しかった。その後、ポランディアの小学生に竹馬を教えて頂きまた。とても楽しかった。これから是非そのような企画を続けて欲しいです（墨田区 21才 男）

- ・吉野家ではポランディアの子どもたちが、独楽回しや竹馬を教えてくれ楽しかった。とても生き生きとしていた。また来園したい（群馬県 21才 女）

- ・竹馬、独楽、けん玉草、昔のおもちやが体験できて楽しかった

- ・昔の遊び、竹馬、けん玉がおもしろかった（杉並区 27才 女）

- ・学校で配ったプリントを見て来園した。ペーゴマが面白かった

意識を持たせて欲しい（来園者への積極的な声かけなど）

- ・一人での参加なので大丈夫かなと思いましたが、他校の方も一人参加が多かったようで、すぐ友達ができ来園するのが楽しかったようです。

- ・大変素晴らしいと思います。ただ来園者の接客の手伝いを目的とするのだと想像していましたが、当人に沢山の昔の文化を伝えて頂いたことに感謝しています。

- ・夏期だけでなく年間を通してお手伝いに何う形式にはなっていないのでしようか。6年生で受講しましたので、最初で最後になってしまうのが残念。

- ・もう少し子どもたちから来園者への声かけがあった方が良かったような気がします。

- ・来年度から週末2日制になるので土曜日もあるのでしょうか？

- ・文化財をあまりあやまらなくなった時どう補償するか心配です。今回は損害保険の話はなかったようですが、貴重な文化財ですのできちり話を確かめた方がベストです。

- ・ちょうど学校でたてもの園を見学して、昔の道具等を学んだ後だったので本人もやる気になって良かったようです。3年生以下の友人のお母様にも羨ましがられたものでした。今後も続けていただきたいです。

- ・複数の小学校にポランディアのお知らせが来たとありますが、予想外に申込者の数が少ないように感じました。もう少しPRしてもっと大勢の子にひじろっ子を体験するチャンスがあればと思います。

- ・小学生の頃から公共的な所で手伝いを出来るといのは、とても良い勉強になるだろうし、先生以外の大人の方と接し、対応の仕方など学べる良い機会を得て大変感謝しております。

- ・申込みをするときは全く張り気ではなかったのですが、行き始めたら、予定の日以外も行くようになり、本当に楽しそうでした。こっそり様子を見に行ったら、家では見られないキビキビした姿が目にする事が出来ました。

- ・学校・学年・性別を超えて子ども同士がふれ合い、たてもの園の方々やお客様との関係や自分の任務を意識することの出来るこのようなチャンスを今後も提供していただきたいです。

- ・毎回娘から報告を受けてはいましたが、園から各子どもの様子を最後にでもお知らせいただけたら有り難いと思いました。反省会の日にも親子で出席可能であれば、子どもたちの様子を知ることができたかな？と思います。

- ・東京に引っ越して2年半、まだ来園すらもしていない所に初めて参加させてもらった。「ポランディア」というものをどのように理解するのか、何をして行くのか、親も心配や不安もあったが、子どもが積極的に参加している様子で安心した。期間中、子どもたちの様子を見に行っておけば良かったと思った。

- ・「ひじろっ子」の活動を少しでも覚えていくくれたらいい。色々な事を経

- ・ひじろっ子の説明がわかっておもしろかった(9才 女)
- ・夏休みの間のボランティアの子どもたちがかわいかった(小金井市 19才 女)

IV 事業の実践(大根の育成と大根干し)

- 1 たてもの園の大根干し展示の経過と課題
 - ①年中行事展示の反省点

年中行事という言葉は、季節季節の出来事と毎年繰り返される習慣を示す言葉である。収蔵建造物・網島家で実施する年中行事は、小正月飾りや月見飾りなど儀礼的な行事の他に、広義には、干し柿や炊飯をつくるための大根干しなど季節にとらえて毎年繰り返される食習慣的なものまでを含んでいる。園では、過去3年間にわたり、園内の畑で育てた大根や園で採れた漬物を網島家軒先に干す展示を成人ボランティアの協力を得て実施してきた。年中行事展示は、建造物の儀礼や日常生活の中での空間認識を理解するために、干す位置や民俗的技術にも注意を払って行っている。しかし、数回に及ぶ実施で、年中行事という親しみのある展示の実施姿勢について、実施する側でも認識に差があることがわかった。児童の参加を促し、博物館における「楽しい」行事展示をめぐる対応を整理すること大きな目標の一つとした。
 - ②博物館と食物・食文化展示

先述の通り、園の大根や干し柿の展示は古民家の軒先の利用の仕方を知るために行うものであり、保存食を製造したりその成果品を口に入れることが目的ではない。ましてや、園スタッフが食の成果品を楽しむために展示を実施することが目的ではない。しかし、従来の展示では、この点を取り違えた対話が多々見受けられ、調理をとまなう事業を展開する設備条件をまったく備えていない園の状況からも、食文化に対する園スタッフの意識と対応を改善する必要がある。とくに、実際にみられるほどに徹底的に干し尽くした上で徹底的に回収する必要がある。回収後の処理に展示の本菜の主旨を見失った意見が出やすくなる傾向を懸念するものであった。以下事業で大根対処に対する各事項は改善状態にあった。

- 1) 来園者へ加工配布する(←園の設備が未整備であり違法行為)
- 2) 「勿体ない」ので園内スタッフで分配する(←公共的な立場から考えても惜むべき行為である。)
- 3) 館外者へ生干しのまま寄贈(←生干し大根は利用や受け渡し期間が限定される。短期に多量の素人生産大根を、一括引き取りできる取引先の選定が困難)
- 4) 既製(畑を耕すボランティアの心づから拒絶反応が強く、対処案議論が前掲3点へと戻り繰り返す結果となる)

たてもの園周辺には自校形式の学校給食で児童が育てた野菜を育てた野菜をおかずとして調理

している学校もあり、また、水分の減少と保存の要領等理科の教材としての可能性などが、研究主任への意見聴取でも指摘されていた。このことから、参加校には建造物の軒先利用や年中行事や食文化理解の要素としての大根干しと大根吊しへの参加に加え、大根の引き取りを、園からの必要最低限の条件として調整した。

2 連携校の募集と決定

育成過程で観察や手入れなどの幅が広がるように、身近に観察菜園が可能な範囲の教育委員会に協力を仰ぐこととし、園の育成やひじろっ子の募集とあわせて小平・小金井市に参加募集をかけた。とくに、大根の生産が盛んな小平市には指導課に繰り返し調整を依頼し、指導主事からの各校宛の研修講演時にアナウンス協力いただいた。畑の規模を考慮し、園の当初予定では、1校(50名程度)の受け入れ員数を予定していたが、小平第五小学校4学年51名、小平第八小学校3学年82名、小平市立花小金井小学校3学年27名・4学年26名一と予定を大幅に上回る応募となった。市教委から各校の事情を聞き取り、応募校には、校内に広大な畑を所有しており反復学習としての利用を希望する学校や、小金井公園全体を利用した学習の一環として来園予定等、教材の準備の仕方に幅があったため、その特徴を生かして、最終的に3校とも連携先として決定した。

3 授業内容

募集にあたり園から当初目安として提示した着眼点を基本に、各校の来園頻度や学習希望内容を考慮し日程を組んだ。また、応募各校は、9月中旬以降の申し出となつたため、播種時期を過ぎていたため、育成過程の「間引き」あたりからの参加である。

(1) たてもの園の当初の提示内容

「衣・食・住の文化を学ぶ：大根の育成と大根干し」

たてもの園の農家の軒先の使用方の展示(大根干し)を行うために園内の畑で大根を育て、収穫した大根を干す作業に参加します。大根乾や観察だけではなく、日本の農家の間取りや軒・庭の使われ方や日本人の食生活の特徴などについて、実際の民家を見ながら話を聞いたり調べたりできます。

募集規模：1校50名程度(クラス単位でもグループでも可)

内容・期間：①大根の種まき(9月初頃1日)

②大根の観察、草取り、間引き、虫とり(種まき以降適宜)

③大根乾きと大根干し・吊し干し(11月末～12月頃1日)

④大根の引き取り活用(干してから1・2週間後)

*来園テーマがたてもの園スタッフの専門に近いものについては、関連説明や授業の特別設定が可能(注：食の話・農家の間取りの図など)

*収穫した大根は自由利用可(給食や家庭用、理科の実験などに使用できます)

*種まきからの参加が出来る参加になる場合も、②の大根干しと④の大根の活用が出来る場合には応募できます。

*参加費を公開授業やレポートにまとめる条件はありません。

- (2) 小平第五小学校・東園希望案と実施結果
- 学校提言案「発見・たんけん・小金井公園」4 学年 52 名 ●
 小金井公園を利用した中学年ブロック（3 年生 43 名、4 年生 52 名、全校級 8 名）の生活科・総合的な学習のグループ学習。
- 全体的な目標「身近な人とかかわりを通して思いやりのある子を育てる」
 単元目標「自分たちの身近にある公園について追究したり、課題を見いだし、調べたり疑問を解決したりしていくなかで、自然のもつ良さや、自分たちの生活が先人の知恵と努力の積み重ねの上に成り立っていることに気付く」
- 「課題を追究するため、様々な人と出会ったり、関わったりして、学んだことを、これからの自分の生活に活かしていこうとする」
- 指導計画
 9 月 20 日を来園初日予定とし、各グループが自然や施設や大根、昔の道具など、各グループで決めたテーマで毎週公園等に出かけて調べ、11 月 28 日の校内の発表会で発表する。大根栽培については、校内に 2 畝程の地があり、そこでの栽培を併せて実施予定。初日の公園への来園は 4 学年だけではなく中学年ブロック全員で来園。
- 第一次（つかむ）：小金井公園についてのアンケート、小金井公園・江戸東京たてもの園の見学、学習したい内容を決める。
- 第二次（調べる）：現地調査（公園・たてもの園）、聞き取り調査（たてもの園の人・公園管理の人・お店の人・都電の人・地域の人の、他の場所への現地調査（都電・お店等）
- 第三次（まとめる）：図書・資料・インターネット等による調べ学習、写真・絵・新聞・クイズ・実験等様々な方法でまとめる。
- 第四次（発表する）：グループ毎に発表する。
- （園との調整）→大根や農家だけではなく、たてもの園内の樹木（ネームプレート付）を利用して公園の樹木の名前が分からないときに利用するなどの方法があることを園よりアドバースし、上記の指導計画に至った。大根については聞き取りから参加。植栽校の参加希望があるため、学校菜園の存在も視野に入れ、園内では代表体験の形で体験し、余裕があれば全員体験とする。初日のテーマ探しのための公園散策の結果で、その他の視点のたてもの園の調査学習の有無が決まるため、方向が決定した時点で別途対応が必要な場合は対処を検討する形で進行する。古い道具の体験希望があったため、スタッフの管理なしでの体験が可能なクズハキ用籠や背負籠の体験を組み入れる形をとる。
- 実施結果○

- 54 -

- ・期間：9 月 21 日～12 月 23 日（大根引き取り）団体で 5 回（伸べ 26 名参加）
- ・内容：大根引き（代表体験）／観察／農家の軒先の利用の話、保存食・大根の種類の話と大根抜きと洗い（薬のたわしで洗う）干し（全員）／自由見学（建造物、展示資料、職員等への質問）での自主課題見学・特徴：たてもの園の意図以外の視点で園を多様に課題活用しており、植物や施設の設備、施設の運営など様々な学べる景観の特色をうまく活用している。
- ：自由課題を見学が調査する際、案内係職員への対応を非常に効果的に利用している。
- ：背負籠体験と園内散策の説明に特別に園の職員の追加対応を行った。園の利用は、その後の発表会で自ら凡観を探して展示実演するなど発展させている。
- ：大根引き取り後、学校で漬物物体験に活用。
- ：学校での発表会は小平市研究授業（11 月 28 日）として大きく公開。
- (3) 小平第八小学校・来園希望案と実施結果
- 学校提言案 3 学年 52 名 ●
 体験学習の内容を全体的に低学年であり、校庭に畑もないため、大根栽培、大根吊しなどの体験的な事項を是非とも取り入れて児童に体験の機会を与えたい。大根については保存食等食文化についての知識を得ることを目的の一つとし、あわせて園の古道具・生活用品の展示を通じて郷土学習の一助とする。近距離に位置するため、希望する児童個別の観察菜園の機会も検討したい。
- （園との調整）→畑の面積から 82 名全員が市域に大根栽培についての作業を体験するのは困難なため、内容によって代表体験を行う。聞き取りから参加する形となるので、聞き取りを代表体験。農業士をつくるための落ち葉はき（クズハキ＝熊手や竹藪、クズハキ用の箕の使用。ハチホンカゴや様々な背負籠の体験）は全員で学習体験可能である。全員でやるものと代表がやるもののメリハリをつける。一斉に見学・体験ができないため、待ち時間に古道具の観察などを行うようにする。
- 実施結果○
- ・期間：9 月 27 日～12 月 20 日（大根引き取り）団体で 3 回、その他放課後観察児童の参加あり（延べ 272 名参加）
- ・内容：大根引き（代表体験）／観察／堆肥作りのためのオチバハキ／農家の軒先の利用の話、保存食・大根の種類の話と大根抜きと洗い（薬のたわしで洗う）干し（全員）／自由見学（建造物、展示資料、職員等への質問）での自主課題や課題見学／「緑のいろいろ」見学と緑の置きクイズ。
- ・特徴：外部での総合的な学習・体験的な学習の実践例が少ないということであつたので、準備打ち合わせや教師への必要物品の連絡などを極力こ

- 55 -

まめに行うようにした。
：園推奨のオチバハキにおいて、熊手や竹藪、背負い籠、ハチボンを
使う体験を行った。

：古い道具を学ぶ学習では、園内民家の籠や鍋釜等の道具類の見学を
実施し、園のアドバイスも含めて教諭が作成した「いなり・かまどク
イズ」を見学時に実施した。

：開催中のギャラリー展「緑のいろいろ」の見学とあわせて、実際に
緑の重さを知る作業を、園から体験用の籠を提供し、見学時間内に教
諭の主催で実施した。

：放課後等の観察来園希望者のため、観察のための入園証を学校宛発
行し、児童の来園の動機付けに努めた。

：大根引き取り後、授業の手打ちもうどん作りの鑑に使用。

(4) 小平市立花小金井小学校・来園希望案と実施結果

●学校側提案 3 学年 27 名・4 学年 26 名 ●

敷地内に広大な畑を持っているため、自校での栽培の学習として大根畑の見
学を位置づける。このため、複数校の参加で体験部分が困難な場合は見学と説
明のみで可。沢庵などの保存食の学習の一環とするため、干し柿展示などその
他の予定がある場合は参加は希望する。単式学級のため、校外学習は2学年が
ともに行動する形をとっている。このため、低学年への説明内容にとくに配慮
を希望する。

(園との調整) → 干し柿の展示は園内の相が不作の場合は実施不可。学年別の講
話の工夫は出来る範囲で実施。

○実施結果○

- ・期間：10月11日～12月19日 団体で2回(延べ110名参加)
- ・内容：種まきの体験・有機農法講話と大根間引き(代表体験)、大根抜き
の注意点講話と大根抜き(代表体験)、五小八小の吊した大根の見学
(農家の祖先の利用の仕方(学習・大根の吊し方の学習)、保存食の
学習(保存食文化の話、小寺橋油店・網島家などの見学)、古民家・
生活用具の見学と解説員への質問体験)
- ・特徴：体験が少ない分、現物を見学しながら講話をきく部分が多かったが、
学校所有の畑について教諭が陰で準備している事柄の存在を児童が何
い知ることねらいとした。
：三校参加の最後に来園する形となったため、吊されて数日へた大根
の様子など観察面を充実するように講話の内容に配慮した。
：干し柿不作のため、干し柿体験は中止

4 事業の特徴・反省・課題

たてもの園が当初予定した大根の育成と観察事業は、じつくり腰を据えて一定のグル
ープが行うに適した形といえるが、各校の意見や動きを見ると、授業の要所の視覚・体
験的補充要素として、わずかな内容に触れるだけでも期待されていることが感ぜられた。

いいかえれば、一定の要素のすべてを園で一括セットとして構築することは、却って児
童や各校の個性を考慮し準備をしている教諭にとり負担であり利用しにくい場合があ
るといふことである。事業としてお任せ的な利用にも耐える完成度を用意可能であつた
としても自らの立場だけに固執せず、各利用校の個性を鑑みて絶えず柔軟に対処する姿
勢こそが重要であると思われ。また、応募各校に複数校の希望があり調整を要すると
の事前アナウンスをしたことにより、先生方から複数校参加に向けての工夫のヒントを
たくさん発言いただいたことと、各校の授業準備や工夫があり、授業のねらいに個性・
差異があつたことが、全校を受け入れる調整を可能ならしめたといえる。画一的な対応
は、実施する側にとってはこの上もなく努力したいものである。画一的な対応は、
がとて、常に工夫を怠らぬよう努力したいものである。

今回の大根の授業では、小平市教育委員会指導課の好意的な市内各校への宣伝に応え
て、参加希望全校の受け入れに努力した結果、それぞれ個性ある形で成果を上げた
と考える。このことは、参加者がたてもの園の対外的な価値ときめ細かなサービスを再認
識する契機となり、園も、先生方との様々なやりとりや、授業の見学、発表時に集まる
多くの学校教員関係者との意見交換など、今後の方向性を検討するにあたり、かけがえ
のない機会を得るものとなった。

その他にも、実作業面と同じ植物を扱う輩の育成と鑑賞と比べて次のような特徴や
課題が見受けられた。

1) 必要スタッフの員数

畑が小規模であることや育成時の各段階の作業が明確で機械ではないため、鑑賞め
よりも対応ボランティアの員数は少なく済む。このため、職員の調整の労が少なくない。
反面、栽培に関する確実な知識を有する者が限られるため、有識者が不在時の職員の
フォローは鑑より過分に必要となった。

2) 視点・活用法の発展

時期的に1学期よりも授業計画が徹底してきてきているため、来園校は、大根の観察と
合わせて、その他の授業内容でもたてもの園の活用によるさまざまな可能性があることを
認識し、当初予定を変更・工夫をし、発展的に来園するようになった。とくに、五小
の来園のほとんどは、大根ではなく自主課題によるものであり、植物、農家(大根含
む)、昔の道具、昔のお店、稲電、鳥、文化施設、文化行事、トイレなど、多様な観
点から公園・たてもの園を捉えらえて調査を行った。園の視点からは大根が中心だつた
ため、その他のテーマについては、要請があれば、解説や資料の提供を行う形をとつ
た。第八小は、来園につれ、滞在時間を連携開始時の予定よりも延長する形で取り廻
むようになり、最終来園日も変更し、冬季の地坂バス見学の一端として来園するなど、
大きな学年行事にとりこむ形での来園に至った。

3) 案内解説員の有効性

園内自由見学時のサポート体制として、各校教諭からは、ボランティアの活躍より
も、むしろ、案内解説員の対応に高い評価と期待が寄せられていた。適切な解説と対
応(=職業的に禁止事項をきちんと明示し叱れる・緊急対応・緊急連絡・紛失物の対
応など)、児童の滞在時間を考慮した手際の良い対応、など、素朴な対応が長所では
あるが要所を確実に時間内に押さえるのは苦手なボランティアを補う存在が光つた様

つてゐた。各教師が必ず説明の限りやすを渡し、それを含めて先生の裁量で行つてもよろしい形式である。模造を見せるのみに止つて説明がなくなつてゐる。効果上、模造を見てから、手さつておろすに比べて、手さつておろす方が、対象が手のうちに持つてゐるやうな感じがあつた。うゝ意をしようとしたにも関わらず、児童がどうしても土を掘つてしまふ體があつた。園内は幼手土を掘ることにはかゝらない、美観場所や美術方法の指導が望まれる。

7) 自由個別観察のための入園カードについて

盟同様放課後観望を希望する学校があったため、観察証と称した入園カードを学校宛発行した。カードの発行意図は、カードを持つことにより入園観察を促し、園と児童や保護者は本来入園料免除対象であるが、有料と勘違いし二の足を踏むケースがあるため、このカードがあれば無料であることを示して観察意欲を高めるものである。また、近年地域社会と学校の関係が設立にくくい実状も踏まえて、保護者が公立の幼稚園や補助者の協力無くしては授業が成立しにくい現状も踏まえて、保護者が公立の幼稚園の教育活動の安全を計るために放課後観察につきあう際に無駄な出費を避けて遊園地・公園で遊ぶようにすることを目的とした。ただし、カード持参で家庭と入園入園料はまったく見ずに開る例も少なからず見受けられた。乱用を避けるために当該カードに枚数を限り、発行しずみ放課後入園人数が分かればファアシキリで連絡していた。第一等、注意喚起に努めていたが、保護者引連への対処は今後は継続的資料すべき課題である。

【海軍内務省】

H13年4月12日	小金井市教育委員会会長云	学校連携事業連携募集説明(三:研)
5月14日	小金井市研究主任会事業説明・連携対募集(三:研・通研班)	
6月12日	小金井第一中学校研究主任打合せ・事業説明(三:研)	
6月19日	小金井第二中学校研究主任打合せ・事業説明(三:研・通研班)	
6月20日	小金井市立南中学校研究主任打合せ・事業説明(三:研)	
6月21日	小平市教育委員会指導課中学校連携事業打合せ(三:研・通研班)	
6月22日	小平市教育委員会指導課事業説明・募集依頼(三:研)	
8月13日	小平市教育委員会指導課事業説明・募集依頼(三:研)	
9月14日	小平第八小学校連携事業来園打合せ(研)	
9月20日	小平第五小学校連携事業来園打合せ(研)	
9月27日	小平第八小学校連携事業来園打合せ(研)	
9月28日	小平第五小学校連携事業来園打合せ(研)	
10月4日	小平第五小学校来園ワークショップ(三:研・通研班・通研班)	
10月5日	小平市立花小金井小学校来園打合せ(研)	
10月11日	花小金井小学校来園ワークショップ(研・研777:研・研)	
10月13日	小平第八幼稚園後大根観察対応(三:研・通研班)	
10月14日	小平第八幼稚園後大根観察対応(食検)	
10月20日	小平第八小学校連携事業打合せ(食検・根・通研班・三:研)	
10月21日	小平第八小学校連携後観察対応(三:研・通研班)	

[illegible]

4) ボランティアの限界と研修・バックアップ体制

ボランティアはあくまでボランティアとしての参加であり、義務と責任を負わないことの大原則を保持したボランティアも存在する。また、従来通り、気ままに好きな時間と考える引当きが出ればやりやすいが、いかに時期を合わせるというには、学校に都合に合わせて行うのは面倒さいとの見解を持つ者もいる。それだけでなく、ボランティアの最近の活動時間は園の間週時間帯に比して圧倒的に短いため、学校対応の打合せや対応に限界がある。また、急病時の代替えがきかないなど、1校ずつ園を訪ねた出来不出来によって決まされたい学校対応にとって、大きな危険をはらんでいる。ボランティアが組んでいては「大根を育てる」という行為自体は変わらないと、園の置かれた状況や方針は刻々と進化しており、古くから活動をしていたボランティアの中には意欲のズレが生じている場合がある。このためボランティアの「慣れた便利さ」に依存せず、繰り返し研修・育成をめぐり、園の指針を示していくことが肝要である。指針や技術的研修を受け入る場数を踏む中で生かすように設定すれば、より良い場合が相推されるのは事実である。体制面の工夫では、有職者の知識の分岐が進んでいる場合や、季節的に風邪などひどくやすい時には、職員への疾病情報と昇降の連絡や、職員を必ず交えたプアロー体制など工夫が必要である（つまり、「並立な」ボランティアは常に想定する必要があるが、ボランティアといえれば状況が成立した場合の代替え対応は常に想定すべきである）。今回の大根受け入れ期間にも、一部の有職者が長期ア至（主として研修に出席すべきである）。今回の大根受け入れ期間にも、一部の有職者が長期入院する事態となったため、地味作りを強く推断し不在時の対応とするなど調整を行うようだった。また、教務技術面では、花小金井の3、4年生生えれぞれへの説明の難易度のつけ方が難しかったとの感想が解読にあたったボランティアの有識者からあり、引率教諭からもし説明がとくに3年生には確しあったことの意があった。

5) クズハキ・ハチホン・背負い籠

竹箸と膳手、クス用の笈を使用したハチホボノ籠や背負い籠への寄木葉（クス）の詰め込み体験は、職員1名、大規模校の先生も可能であり、内容的にも地域環境や地域文化に惹きつけ、かつ、普通道の体験としても貴重な道具も持ち帰ることができる。希望を逃したくない事業であるとの結論に至った。但し、内容が地味な印象を与えるため、希望校が少ない傾向等があり、今後の宣伝方法の策定がある。季節的には園内の落ち葉が最も豊かで少ない頃向等であり、12月上旬辺りが最も望ましい。

5) 銀を持つ体験

大隈重信の来盟のクラス交代の待ち時間に、飯仕事の行為と、人の使う道具の重さを含めた質感を捉えにくい環境になっているため、同じように見えて実は変化のある鋸のいろいろな展示を見学し、付設の飯の重さクイズで予習をしようで、農家の農産物のいろいろな展示の説明を聞き、一人一人懸ってみて重さを当てるクイズをしてもらってから先生の手で説明を聞き、

2 準備経過

(1) 物品準備

必要物品については、平成12年度試行実施時に大部分を用意していたため、反省点等からの不足分を補った。

①石臼関係

体験に利用する石臼2基の目減りが激しかったため、7月に目立てを実施し、あわせて挽き手次根部の復元、台の新設を行った。台への石臼固定方法については、前年度の児童の動きを見て、粉が下臼底面に付着することにより動くことのないよう、1基の台に措置を施した。固定しすぎることにより勢い込み外れた場合危険性が増すことも考えられるため、もう1基については、前年度通り、下臼四方に必要に応じて木片で突っ張りを施す形とした。石

②ハチホン・背負い籠の用意

体験メニューの組み合わせや引率員数により調整のための待ち時間が必要となるため、スタッフ抜きで安全に体験できる道具としてハチホン・背負い籠を蒲須市職人に発注し用意した。ハチホン籠の製作時期が限られるため、前年度末(平成13年1月)に製作させた。

③貸し出し用物品の用意

集習として校内で平床道具を使用したい場合や、貸し出しの用意があるか問い合わせが集中する石臼について、石臼、石臼用の台、木鉢、小櫛、粉篩を二式、園内で従来体験使用しているものと別に用意した。これらは、園内での利用と異なり、貸し出した先で日に入れたことを想定して例を無く場合が多いため、園外展示場に展示してあるものや体験利用に使用している道具類と異なり、燃煮等の消滅を行わず管理することを徹底している。また、古い道具の転用による欠損の見落としから生じる事故を回避するため、すべて新しいものを購入し準備した。

(2) 従事スタッフの予習と園内事務連絡準備

体験事業の現場で当日の整配にあたる職員全員とボランティア、案内解説員について、事前講習および説明会を実施した。事前講習会は職員およびボランティアについては、全員出席とした。

①ボランティアへの講習

前年度の講習会へのボランティアの出席率が低かった結果、曜日別に分かれて火曜日から金曜日まで連日講習を行う結果となった反省点を鑑み、12月に1日と直前に1日の2日間(計4回)の講習日を用意し、教諭用講習会を兼ねてボランティアには当日の児童対応を高めるように工夫した。講習会に参加しないボランティアには当日の児童対応を遠慮してもらう形としたので、各活動班とも児童の対応を希望する者や児童対応を得手とする推薦された者を積極的に講習会に派遣し、参加できない場合には特別講習会を希望してきた。全員参加が難しい部分をボランティアなりに考えた対応であったが、反面、自分は関係ない一との安心感から注意事項を暗まににくい者も出たため、不測事態も頻発する児童対応については今後とも繰り返す講習が必要である。しかし、講習の周知により、経験則からの過信や年輩者は必ず古い道具の使い方を知っているという職員の誤解から

11月1日 小平第五小学校東園ワークショップ(読:ポラテイ3、新編5)

11月13日 小平第八小学校園ワークショップ(落:葉鑑査)(読:新編771)

11月28日 小平第五小学校総合的な学習発表会訪問調査・講義(読)

12月6日 小平第八小・五小共同打合せ(大根抜き・干し)(読:ポラテイ:新・新編)

12月11日 小平第八小学校東園(大根抜き・大根洗い・大根干し)(読:ポラテイ:新・新編)

12月14日 小平第五小学校東園(大根抜き・大根洗い・大根干し)(読:ポラテイ:新・新編)

12月19日 花小金井小学校東園(大根吊し見学・保存食学習)(読:新・新編5)

12月20日 小平第五小学校大根引き取り(読:ポラテイ1)

12月23日 小平第五小学校大根引き取り(読:ポラテイ3)

12月25日 小平第五小学校 沢庵漬け(学校授業)

H14年 1月以降 小平第八小学校 給食さんびら、うどん作り体験・種への大根利用

V 事業の実際(「昔くらし体験」と「昔の暮らしと道具展」)

1 事業の目的

本事業は、教育現場の平成14年度の総合的な学習本格実施をにらんで、日常の学校教育利用への対応を具体的に検討するため、平成12年度に小金井市教育委員会の協力を得て試行実施したものである。平成13年度は、本格実施年と位置づけ、対象とする連携先を小平・小金井両教育委員会に拡大し実施した。日東の利用が可能な範囲の学校でとくに申し出がある場合は相談の上、受け入れ形をとった。本事業の目的は、園内の建造物の構造や空間認識、その中で暮らすしぶりを理解するために、実際に建造物の中でかつての道具類を扱う体験をするというものである。これにより、たてもの図が展示する古建造物に対する理解が深まれば何よりである。昔の道具を使う授業は従前から小学校3年生の郷土学習を中心に取入れられており、単に昔の道具を使用するだけならば、学校の教室の中でも実施できるため、どの学校も毎年くり返して行っていた事例である。しかし、実際の寒さや晴さ、煙の煙たさなどを実際の古建造物の中で五感でもって体験することは、その行為から派生して周辺事項を想像し、興味を持つことにつながりやすく、児童に与える印象もより強いものとなる。教室内での対応よりも手車の手間や時間はかかるが、現場での生の体験の価値を認識する先生が活用に至っている。また、この時期(三学期)に郷土学習のために一過性の社会科見学的に東園をする遠方の小学校の中には、滞在時間はとれないが、体験的な要素を希望する学校が数あることが、平成12年度の試行実施の結果判明した。このため、短時間滞在在校のために、常設展示室において常設展示の延長として、民俗資料を中心とした展示と付随した体験コーナーを設け、野外展示場とあわせて見学できるコース設定をした。

の安寧な依頼を回避することができたと考える。また、12月中に各班長へは所属班の活動日の学校の来園状況とカリキュラムを周知し、あわせて、前の週にカリキュラムの最終確認を班員の目前で必ず行うようにした。班長の勘違いや周知漏れをカバーし、ボランティアから出される個別質問に答えるためである。

事前講習会参加ボランティア（内曜日班総人数）	
火曜日班	10名（23名）
水曜日班	8名（25名）
木曜日班	8名（25名）
金曜日班	9名（23名）

② 職員への講習

児童の体験事業の進行管理をする学芸員をはじめとする学校係員への実技講習、未経験者への実技指導、注意事項の伝達を、職員個別に主担学芸員から行う形をとった。各自の経験や習熟度により講習時間は異なるものがあったが、当日の動きの説明と実技の習得が目的である。この時、前年度の実施結果からの園内の他のスタッフ（案内解説員・ボランティア）についての対応上の注意点と各校の想定される待機についてあわせて説明を行っている。実技をともなう授業の場合、引率教諭の経験や力量により現場の対応が変わってくるケースがあるからである。また、来園の員数的な規模や給食指導時間までに滞在予定か否かが、当日火急な変更が生じた際の授業内容の優先順位決定の重要なポイントとなるのだ。この点の説明は徹底できなかった。予定変更をせざるを得ない場合の臨機応変な動きは、担当する学芸員の経験量や専門性・実技経験に依る面が大きく、説明さえすれば即応可能とは限らないからである。様々な人の中には、予定された内容を時間とスタッフ数の変更なしに堅実に対応することを得手とする人もあり、逆に、迅速な判断が困難なケースが想定されたからである。現場での変更事項への即応は教育普及事業系の学芸員に不可欠な資質であるが、江戸東京博物館の学芸員は教育普及事業経験を多様に持っているとは言えず、いずれかといえは細かな対応や変更事項を有する普及事業は重視されてきたとは言えないため、実施上の心構えとともに今後の課題として残される。

一方、事務的な課題は前年度と比べ大きく改善された。昔くらし体験事業の実施時期は、参加校以外の郷土学習英園が多く、平成12年度は、問い合わせ対応や書類事務が管理部門・学芸部門双方に振り分けられたため、混乱する事態が定まらなかった。このため、園管理側の団体見学担当者には、昔くらし体験参加校決定後の動きを前年度より2ヶ月程早く連絡調整するように改善した。この結果、教育利用減免申請の遅れなどの事務書類上の課題が前年度に比して格段に減少し、学校への関係の督促もなくなった。授業として遂行しなくてはならない学校連携事業を実施する際、園連泊滞の協力対応は他事業と比しても格段に重要度を増す。あくまで担当者間の努力のレベルの対応の徹底であったが、これにより余裕をもった対応ができ、学校側から見た園の書類処理の煩雑さのイメージが払拭された

と思われる。担当者の機転の有無と綿密な連絡が学校英園の敷居を低くするためには不可欠である。

③案内解説員への意見聴取・講習・説明

昔くらし体験の実施会場となる、延徳御殿所に配置されている案内解説員から事前に各建造物の状態（最近の修繕具合、来園者の動向からの注意点等）について申告させ、会場の変更点や雨戸の開け閉め体験の可否について審議材料を収集した。とくに、破損状況や人の滞留回避のために図面上に細かく注意点を現場から見た希望を記入して提出するようにした。その上で、決定事項について連絡し、それをもとに案内解説員間で当日の配膳の調整に入った様子である。また、前年度、昔くらし体験実施中に担当学芸員へ外線電話を総合案内の案内解説員が回してしまうということが幾度あったため、他の事業と異なり、事業実施中の別対応が不可能なため、外線電話のベンディングを徹底させた。

また、団体教育利用の手続きの当初の受付は、総合案内の案内解説員となるため、「昔くらし体験」来園の団体が、学芸員と打ち合わせの際、団体受付の諸用紙を受理してしまうと、後らの事務手続きの整理番号が飛んでしまい、その結果、連絡もれが生じることが試行時にままたあった。これらの連絡を密に行うように相互に注意を払いこれらの課題を解決すべく、該当校の校名を早めに案内解説員にまわすよう心がけた。その他にも、連絡校は子どもが向けガイドブックを他校と異なり実施時に受け取って帰る傾向があり、来園時に二重に渡さないように受付では注意が必要であったようである。このため、再々確認連絡が寄せられた。顧慮のない対応をするために、案内解説員の頃から声をかけてくれることは心強いものである。

(3) 募集方法と引率教諭事前講習

平成13年度は、試行実施時の小倉井市教育委員会からのアドバイスを受け、連携委経由で参加校の募集と参加希望メニューを含めた応募とりまとめを予め用意した参加申込書を配布・回収する形で行い、決定通知も各教委経由で通知する形をとった（★後掲参加申込書参照）。このため、試行時よりも3ヶ月早く募集し、最終日程の決定連絡作業に実施1ヶ月前に入ることができた。早期に準備を整えたため、教委から直下見や必要物品を含めた注意事項、各校個別のメニュー調整等順調に行うことができた。講習会日は2日間（計4回）設定したが、授業の都合で日曜が含まれない学校があり、その分別設け設定しなくてはならなかったため、教諭が参加クラスにボランティアの担任が参加する場合と、代表教諭1名の参加の場合と二通りであったが、各校メニューの説明と注意事項のレクチャー、現場実習、実技体験の詳細説明ができたため、昨年度、引率教諭から聞かれた、手を貸したくても文化財である建造物の中で踊る舞いに不慣れな点や、ボランティアに失礼ではないかと手を出すべきかどうか躊躇する一といった意見や、時間的に急ぎたい場合の打ち切り伝達の仕方など、校外授業で勝手な手が出しにくい事項について予め打ち合わせることができた。

事前説明・講習会参加状況 (〇印＝開設日、その他＝特別調整日)

12月12日	14:30～	小金井市立小金井第三小学校3学年教諭 2名
12月20日	14:00～	小金井市立緑小学校3学年教諭 3名
		小平市立小平第四小学校3学年教諭 3名
〇12月22日	13:00～	小金井市立前原小学校3学年教諭 1名
		小金井市立南小学校3学年教諭 2名
		小金井市立小金井第一小学校教諭 1名
		小平市立花小金井小学校教諭 1名
1月 9日	14:00～	西東京市立上向台小学校3学年教諭 2名
〇 1月10日	13:00～	小金井市立小金井第四小学校教諭 1名
	15:00～	小平市立小平第八小学校3学年教諭 2名

事前説明・講習会説明のうち、実技についてのコメント

実技講習は下記の内容を該当校の体験希望メニューにあわせて実施した。代表的な体験は以下の実技内容となる。

石臼体験	土間の実踏 (粉仕事に連している仕組みの理解) 石臼の実見と仕組みの説明→米を粉に挽く→小溝で目から掃き出す一掃に掛ける→挽き足りない物をまた挽く
火鉢体験	いろりの場所確認、火鉢のある筋屋の確認 種火にする炭 (燃えさし) を囲炉裏の火の周りに置いて着火→台付き十能と十能の使い方の説明→十能の上に火ばさみで火種を拾う→運ぶ→囲炉裏の炭を灰ならして整える→種火を火箸でいける→生炭を火種のまわりにつぐ→息を吹きかけて火を生炭に移す→火にあたる・火鉢のお膳→火箸で十能に火鉢内の炭を拾う→(火の始末) 灰ならして落した火の屑に灰をかける・火消し蓋に火ばさみで炭を入れ火を消す
雨戸体験	雨戸の実踏と扱いの注意説明 (触っていい雨戸とそうでないところ) 雨戸の仕組み見学 (戸袋・障子やガラス戸の発達を含めて) しめる→かんぬきをかける→電気を消して囲炉裏の火の体験→あける (戸袋に上手にしよう)

あわせて、実技の意味と以下の留意点について説明をした。

①石臼とは？ ・石臼は種火＝粉にする・石臼各部の名称 (上臼、下臼、挽き手)・目の切り方いろいろ (写真説明)・女の仕事・夜なべ仕事・粉食はこそう・くず米の利用・ボランティアの中で経験のある人は経験談を交えて良いが、地方色が濃いつづける (＝呼び名や使う季節など、小金井・小平の例でないことを必ず断ってから説明する) こと *石臼を生炭経験の中で焼いた人はボランティアにもまわって少ない ・目詰まりや粉を掃き出す際に上臼を持ち上げるこ

とがあれば、目をよく見せてもらうとよい

②石臼扱いの注意点 ・臼の間に手をはさまないように (ふざけない)・挽き手はなるべく下の方を持つ (力をいれやすいとともに、挽き手の上の方を持つと負荷がかり折れやすい)＝挽き手保護)・臼は時計と逆方向に回す・生米を粉にするのでなめさせない

③教職発達説明

1) 粉に挽いたものを口ににいれさせないこと

野外展示場に表示中の標識に記した石臼を焼くこと、また、園の施設は法整備としてこの機会を準備してはいないため、石臼体験で挽いた粉は口に入れる形での授業利用はおすすめてきない (標識がカモン関係等から煙草にかけたものは望ましくない)。持ち帰りを希望する場合は、この点を念頭に置いて授業展開を考えてもらいたい。口に入れる加工を希望する場合には、別の石臼を貸し出すので、学校の通じた別園で復習を兼ね行ってもらいたい。このため、園内の体験では、即座になめないように生米を粉にする形で限定している。米は時間があれば、水にさらしてから乾かして吟味すると砕けやすい。

2) 必要物品再確認 石臼体験校＝生米一人一握り

火鉢体験校＝生炭一人一握り (雨炭で可) 事前搬入可

④火鉢について ・ものの名称を説明する (十能、火起こし、台付十能、火箸、火鉢、長火鉢→火鉢の形、火ばさみ、灰ならし、火消し)・十能はガスコンロや七輪の上ののせて中に入れた炭に火をつけることが多い (何らかの事情で炭を拾う時間を経験させるを導く)・台付十能には台がついている・囲炉裏の薪るときは必ずこのことと伝えること)・台付十能には台がついている・火鉢の薪を組むときは種火の周りに空気が通るように薪をくべている。これと同じように火鉢の中で炭を組むと良い・火鉢の灰中央を種火を置くとやりやすい・火消し蓋 (空気をシャットアウトする。その炭を翌日の種火に使える)・火鉢を使用した経験談がある場合話してあげる (地方色の濃いものは出自を明らかに)

⑤火鉢扱いの注意点 ・建造物量保護のため、火鉢の下にごさを敷く・火鉢や十能などの金属は熱伝導するので人の方に向けないように注意させる・灰を吹き飛ばしてふざけたら必ず叱る (茅葺きに飛ぶと火事になる)・十能、台付き十能は両手でしっかりとせ、歩くときには数回に一つずつ必ず下には下に注意させる (敷居は踏まないもの)

⑥火鉢の火がなかなか種火から移らないときには？

話を多くして火がつくまで待たせる。「灰をとばさずそっと息を吹く」などこつと説明や、火鉢のおいてある建造物の話を。障子をしめて、実際の火の明るさを見せるなど。

⑦全体的な留意事項

1) 今回児童が体験する道具類は、冬季の学校運営等業務の特別対応として使用。このため、その他の機会に石臼をまわす、雨戸をしめる一等の対応はできません (低木の防止や建造物保護のため)。道具の事前点検がないため、

平成13年度「昔くらし体験」参加校の募集

平成13年10月
江戸東京たてもの園

江戸東京たてもの園では、昨年度に引き続き、3学期期間中、たてもの園の茅葺き民家を利用した学校連携事業「昔くらし体験」をおこないます。「昔くらし体験」では、茅葺き民家の観察や見学、民家内で車の通みを使った体験ができます。たてもの園の建造物や道具類は保存を目的とした文化財のため、とくに、学校の授業に限り当該事業の参加を募っています。参加希望校は申込み用紙に記入の上、お早めにお申し込み下さい。

なお、「昔くらし体験」募集の詳細は、以下のとおりです。

記

- 1 実施期間 平成14年1月16日（火）～3月20日（水）
*休園日（月曜日および2月12日（火））は除きます。
- 2 募集対象 小金井市内の学校の授業での参加（おもに小学生）
*学年、クラス、総合的な学習でのグループ参加は問いません。各校のカリキュラム体制に応じた形態での参加可。また、小学校に無い学校で参加希望がある場合はご相談下さい。
- 3 応募方法 別紙応募用紙にて申込み。
*この学校で、異なる学年・グループ別、複数の申し込み、別見を募集すること、申込みをいらないことも可能です。その場合、取れ入ります。申込用紙を必ず添付して下さい。
- 4 応募締め切り 平成13年11月12日（月）
- 5 応募用紙提出先 小金井市教育委員会指導室
- 6 参加の決定等 平成13年12月7日（金）までに教育委員会指導室を通じて連絡します（参加日の調整の都合上、決定前にたてもの園から直接お問い合わせをする場合があります）。
- 7 必要物品について 火鉢体験、石臼体験は、炭、挽く材料などをご用意願います。
- 8 事前説明会 12月22日（土）9：30～11：30、13：00～15：00
1月10日（木）9：30～11：30、13：00～15：00
*申し込みの方は、原則として、最速1回は説明会にご出席下さい。見学会がない場合はご参加ください。実施当日の注意点、実施内容をご説明、ご説明します。

問い合わせ先
江戸東京たてもの園
担当：三好・友野
TEL 042 (388) 3317

参考

その他の遠足児童の来園、休日の自由体験などではできないため、留意願います。とくに、ボランティアはこの点を徹底を。

- 2) 火吹き竹は吹き方により、大変火が上がつて危険なため、園内裏ではなく八王子千人同心組頭の家で体験すること。

- 3) 今年度の火鉢体験は、すべて、児童自身が自分でやるだけの時間をとっている（児童自身にやらせたい学校が多いため）。しかし、危険な時（不器用すぎてやけどをしそう）や、何らかの事情で遅れて到着し、急がざるを得ないときには手伝うこと。

- 4) 事情で急がねばならないときは、真に果て話しているときでも先生がお声がけすることがあります。そのようなときは、気を悪くせずうまくまとめ対応する。

- 5) 危険なことをしたときは、先生が気づかなくても叱ってよい（古建造物の強固な引掛者にはわかりにくく、注意しにくい。そのような時は、スタッフがきちんといいわらないとわからない）★

(4)「昔の暮らしと道具展」準備

① 展示調査

書くし体験事業中の参加校以外の学校の来園対応を考慮し、併行して民俗資料を中心とした展示や簡単な体験コーナーの設置を試行実施するため、他館の展示状況の調査を行った。調査先としては、県立規模の施設でこの種の展示を毎年行い実績を持つ施設として、群馬県立歴史博物館と栃木県立博物館、触れる展示を代表店だけではなく、学校への呼びかけの事務手続きや内部体制、触れる展示品の取り扱い上の注意点（児童にとっての安全性等）についてあわせて参考調査を行った。とくに、燃蒸と児童の手に触れるという事例については今の環境教育も含めた意識の高まりの中で注意を払うべき意見を得た。また、事務体制は、小規模な市町村レベルの人員体制しかない間からみると、整備状況に著しい差が認められたが、教育委員会部局ではないため園にとつて、園独自の手段を講じた上で教養との調整に入らないう限り、信頼を得ることは不可能であるかと判断し、参考となる事務手順は極力取り入れたよう努力した。

②展示の周辺教育委員会への周知

平成12年度書くし体験学習実施時の学校来園についての態体的な観察から、徒歩以外の交通手段を用いての来園団体のうちにも小平・小金井両市と同様な郷土学習目的の学校が多数存在していることがわかったため、周辺教育委員会へ手配りして、一方の学校は、随時増設し増しの許可をして管轄の学校に配布頂くこと、小平・小金井両市の学校は、建造物の中を歩くだけでも体験的に充足されることから、展示・小平・小金井両市の学校のように滞在時間が長くとれたい場合が多いことから、展示・小平・小金井両市の学校内に特別に古い生活用具の展示と触れる展示物（体験コーナー）があること、今年度の進捗先の緑小学校の総合的な学習発表展示があることをチラシに記載した。チラシ配布の効果は大きく、小金井市内の書くし体験不参加校や教員間のコミュニケーションが寄せられた。相当数の来園につなげることができた。比較的小さい学校の配布は依頼し、下部の来園のワークシートヨブで小学生来園数が比較的に多いと見られる傾向とした。配布の状況は以下の通りである。

小平市教育委員會、小金井市教育委員會、東久留米市教育委員會、清瀬市教育委員會、武藏野市教育委員會、府中市教育委員會、西東京市教育委員會、國分寺市教育委員會、三鷹市教育委員會

〔日誌抄（ ）内掲〕

H12年12月14日 クズハキ箕製作調査・製作依頼(娯)

クズハキ箕受け取り(婦・強)

2月9日 群馬県立歴史博物館学校対応展示・事務体制調査(三井・媛)

平成12年度書くら1・体験実施結果報告・平成13年度事務手順打ち合

わせ(小金井市教育委員会)(三・奨)

3月23日 ハチホン館類引き取り（郷・南）

3月27日 栃木県立博物館学校対応展示・事務体制調査(三・朝)

- 67 -

③ 17/10 (日) 13:00-13:50 (参)

④ 12/22 (日) 13:00-15:00 (参)

⑤ 17/10 (日) 9:30-11:30 (参)

⑥ 12/22 (日) 9:30-11:30 (参)

⑦ 17/10 (日) 13:00-15:00 (参)

⑧ 12/22 (日) 13:00-15:00 (参)

⑨ 17/10 (日) 9:30-11:30 (参)

⑩ 12/22 (日) 9:30-11:30 (参)

⑪ 17/10 (日) 13:00-15:00 (参)

⑫ 12/22 (日) 13:00-15:00 (参)

⑬ 17/10 (日) 9:30-11:30 (参)

⑭ 12/22 (日) 9:30-11:30 (参)

⑮ 17/10 (日) 13:00-15:00 (参)

⑯ 12/22 (日) 13:00-15:00 (参)

⑰ 17/10 (日) 9:30-11:30 (参)

⑱ 12/22 (日) 9:30-11:30 (参)

⑲ 17/10 (日) 13:00-15:00 (参)

⑳ 12/22 (日) 13:00-15:00 (参)

㉑ 17/10 (日) 9:30-11:30 (参)

㉒ 12/22 (日) 9:30-11:30 (参)

㉓ 17/10 (日) 13:00-15:00 (参)

㉔ 12/22 (日) 13:00-15:00 (参)

㉕ 17/10 (日) 9:30-11:30 (参)

㉖ 12/22 (日) 9:30-11:30 (参)

㉗ 17/10 (日) 13:00-15:00 (参)

㉘ 12/22 (日) 13:00-15:00 (参)

㉙ 17/10 (日) 9:30-11:30 (参)

㉚ 12/22 (日) 9:30-11:30 (参)

㉛ 17/10 (日) 13:00-15:00 (参)

㉜ 12/22 (日) 13:00-15:00 (参)

㉝ 17/10 (日) 9:30-11:30 (参)

㉞ 12/22 (日) 9:30-11:30 (参)

㉟ 17/10 (日) 13:00-15:00 (参)

㊱ 12/22 (日) 13:00-15:00 (参)

㊲ 17/10 (日) 9:30-11:30 (参)

㊳ 12/22 (日) 9:30-11:30 (参)

㊴ 17/10 (日) 13:00-15:00 (参)

㊵ 12/22 (日) 13:00-15:00 (参)

㊶ 17/10 (日) 9:30-11:30 (参)

㊷ 12/22 (日) 9:30-11:30 (参)

㊸ 17/10 (日) 13:00-15:00 (参)

㊹ 12/22 (日) 13:00-15:00 (参)

㊺ 17/10 (日) 9:30-11:30 (参)

㊻ 12/22 (日) 9:30-11:30 (参)

㊼ 17/10 (日) 13:00-15:00 (参)

㊽ 12/22 (日) 13:00-15:00 (参)

㊾ 17/10 (日) 9:30-11:30 (参)

㊿ 12/22 (日) 9:30-11:30 (参)

[illegible]

平成14年1月18日を初日として、1校881名を受け入れた。他に試行時以来
来園の私立女教女学院小学校、および、秋の社会科見学での歴戦本場の小学校等数校校
に若干の対応を行った。また、3学期に小学校3年生の郷土学習が行われる印象が強い
ため連携対象を校とも3学年に偏重的に説明を行った形跡があり、試行時に参加した小
金井市の小学校2年生（国語課程）の昔話の学習での活用が今回の申し込みには入らな
かった。授業の工夫はあくまで担当教師の責であることと、学校長からの周知があくま
であたりを今回のものであったため、2学年の国語での活用希望が遅れて寄せられた。
このため、今回は時期をずらして3月に受け入れる形とした。参加校の参加プログラム
と代表的な動きは以下のとおりである。

参加校実施プログラム	参加校	プログラム	昼食將在
1/18	小平市立小倉井小学校 3・4学年 53名 (10:30~12:00)	3学年：石臼体験・火鉢体験見学・園内 見学 4学年：火鉢体験・石臼体験(回転のみ) 園内見学 町会進行・解説・実技指導：友野(鶴島市) 高橋(江 野家)、体験介助：栗林剛海；ボランティア金澤重・ 葉内解説員2、西田浩祐、葉内解説員3	無
1/22	小倉井第一小学校3・4学年	園内見学	有

7月6日	石臼製作・挽き手打ち合わせ（山政）(註)
7月12日	わら草履製作調査・引き取り（清瀬市）(註・註)
	石臼を立て調査・依頼（北川辺町）(註・註)
7月13日	わら草履製作調査・引き取り（小平市）(註)
8月2日	石臼台受け取り（註）
8月13日	小平市教育委員会指導課事業説明、募集事務依頼（三井・野田）
8月23日	石臼を立て完了引き取り（北川辺町）(註・註)
9月21日	小平市・小金井市教育委員会に契約とりまとめ用紙受け渡し
9月9日	西東京市立上向小学校3学年実践発表(註)
11月12日	小平市・小金井市教育委員会本部とりましたこと終了
11月22日	西東京市立東伏見小学校3学年郷土学習茅草葺き農家解説(註・三)
11月27日	小平市・小金井市教育委員会参加加日程決定連絡
12月12日	小金井市立小金井第三小学校教諭宛事前説明・講習会(註)
12月20日	小金井市立緑小学校、小平市立小平第四小学校教諭宛事前説明・講習会(註・三)
12月22日	小金井市立南原小学校、南小学校、小金井第一小学校、小平市立花小金井小学校教諭宛事前説明・講習会来たての園ボランティア宛事前説明・講習会(註)
1月9日	西東京市立上向小学校教諭宛事前説明・講習会(註・三)
1月10日	小金井市立小金井第四小学校、小平市立小平第八小学校教諭宛事前説明・講習会来たての園ボランティア宛事前説明・講習回(註)
1月11日	花小金井小資料搬入ペンブ引き取り(卸)
1月13日	小金井第一小資料搬入ペンブ引き取り(卸)
1月16日	緑小5年生班「昔の暮らしと道具展」学校施設表示用資料借用(註・脚)
1月17日	小平第四小資料搬入ペンブ引き取り(卸)
1月18日	小平市立花小金井小学校3、4年生普くらし体験(註・脚、おひろい館蔵、録音)
1月19日	「昔の暮らしと道具展」周辺部教育委員会チラシ配布依頼(註)
1月22日	小金井第一小学校3年生普くらしし体験(註・三、下、おひろい館蔵、録音)
1月23日	小金井市立南小学校3年生普くらしし体験(註・三、理、おひろい館蔵、録音)
1月24日	小金井市立立原小学校3年生普くらしし体験(註・三、おひろい館蔵、録音)
1月25日	小平第四小学校3年生普くらしし体験(註・三、おひろい館蔵、録音)
1月29日	小金井第三小学校3年生(2クラス)普くらしし体験(註・三、おひろい館蔵、録音)
1月30日	小金井第四小学校3年生普くらしし体験(註・三、おひろい館蔵、録音)
1月31日	西東京市立上向小学校3年生普くらしし体験(脚・編、おひろい館蔵、録音)
2月1日	「昔の暮らしと道具展」案内解説員視見レクチャー(註・三、下)
	「昔の暮らしと道具展」案内解説員視見レクチャー(註・三、下、おひろい館蔵、録音)
	小金井第三小学校3年生(2クラス)普くらしし体験(註・三、おひろい館蔵、録音)

9.9名 (10:00~13:45)	学・樟科クイズ (単位の話)	有	由体験
1/23 小金井市立南小学校 3 学年 7 6 名 (10:00~14:00)	火鉢体験・石臼体験・雨戸の開け閉め体験・樟科クイズ (単位の話)・園内見学 司会進行・解説・実技指導: 高橋 (御島家)、三好 (吉野家)、友野 (天明家)、体験介助・実技指導: ボランティア火縄班、案内解説員 3、受付連絡: 案内解説員 3	有	無
1/24 小金井市立南小学校 3 学年 8 5 名 (9:30~11:45)	火鉢体験・石臼体験・園内見学 (教諭準備のクイズラリー)・背負い籠自由体験 司会進行・解説・実技指導: 友野 (御島家)、三好 (吉野家)、体験介助・実技指導: ボランティア火縄班、案内解説員 3、受付連絡: 案内解説員 3	有	無
1/25 小平第四小学校 3 学年 8 9 名 (9:40~14:00)	雨戸の開け閉め体験 (背負い籠体験)・石臼体験・火鉢体験・園内見学 司会進行・解説・実技指導: 高橋 (御島家)、三好 (吉野家)、友野 (天明家)、体験介助・実技指導: ボランティア火縄班、案内解説員 3、受付連絡: 案内解説員 3	有	有
1/29 小金井第三小学校 3 学年 7 1 名 2 クラス (10:00~13:00)	火鉢体験・石臼体験・雨戸の開け閉め体験・樟科クイズ (単位の話)・園内見学・背負い籠自由体験 司会進行・解説・実技指導: 高橋 (御島家)、三好 (吉野家)、友野 (天明家)、体験介助・実技指導: ボランティア火縄班、案内解説員 3、受付連絡: 案内解説員 3	有	有
1/30 小金井第四小学校 3 学年 8 3 名 (9:40~12:30)	火鉢体験・石臼体験・園内見学 司会進行・解説・実技指導: 高橋 (御島家)、三好 (吉野家)、体験介助・実技指導: ボランティア火縄班、案内解説員 2、受付連絡: 案内解説員 3	有	無
1/31 西東京市立上向台小学校 3 学年 7 5 名 (9:30~12:00)	火鉢体験・園内見学 (教諭準備の課題)・火鉢体験・石臼体験・雨戸の開け閉め体験・樟科クイズ (単位の話)・園内見学 案内解説員 2、受付連絡: 案内解説員 3	無	無
2/1 小金井第三小学校 3 学年 7 0 名 2 クラス (10:00~13:00)	火鉢体験・石臼体験・雨戸の開け閉め体験・樟科クイズ (単位の話)・園内見学 (昔の暮らしと道具展)・背負い籠自由体験 司会進行・解説・実技指導: 友野 (御島家)、三好 (吉野家)、体験介助・実技指導: ボランティア火縄班、案内解説員 3	有	有

2/5 小金井市立緑小学校 3 年 1 組 3 3 名 (9:45~12:00)	火鉢体験・石臼体験・園内見学 (昔の暮らしと道具展)・樟科クイズ (単位の話) 司会進行・解説・実技指導: 友野 (御島家)、三好 (吉野家)、体験介助・実技指導: ボランティア火縄班、案内解説員 1、受付連絡: 案内解説員 3	無	由体験
2/7 小金井市立緑小学校 3 年 3 組 3 3 名 (9:45~12:00)	火鉢体験・石臼体験・園内見学 (昔の暮らしと道具展)・樟科クイズ (単位の話) 司会進行・解説・実技指導: 友野 (御島家)、三好 (吉野家)、体験介助・実技指導: ボランティア火縄班、案内解説員 1、受付連絡: 案内解説員 3	無	有
2/13 小平第八小学校 3 学年 8 2 名 (9:30~13:00)	園内見学 (昔の暮らしと道具展) 火鉢体験・石臼体験・雨戸の開け閉め体験・樟科クイズ (単位の話) 司会進行・解説・実技指導: 高橋 (御島家)、三好 (吉野家)、友野 (天明家)、体験介助・実技指導: ボランティア火縄班、案内解説員 3、受付連絡: 案内解説員 3	有	有
2/19 府中市立若松小学校 3 学年 1 0 3 名	自由見学 (教諭準備の非探し/昔の暮らしと道具展)・背負い籠体験 (千人同心館にて自由体験)・ボランティアガイド 随手配: 友野、ガイド: ボランティアガイド当日担当	有	有
2/20 小金井市立緑小学校 3 年 2 組 3 2 名 (9:45~12:00)	火鉢体験・石臼体験・園内見学 (昔の暮らしと道具展)・樟科クイズ (単位の話) 司会進行・解説・実技指導: 友野 (御島家)、三好 (吉野家)、体験介助・実技指導: ボランティア火縄班、案内解説員 1、受付連絡: 案内解説員 3	無	無
2/22 立教女学院小学校 3 学年	自由見学 (昔の暮らしと道具展) ボランティアガイド・背負い籠自由体験 (千人同心館) 随手配: 友野、ガイド: ボランティアガイド当日担当	有	有

☆☆

昔くらし体験事業参加校のみなさまへ

平成13年12月 江戸東京たてもの園

- 1 必要物品 火鉢体験：段（1人1個）
石臼体験：生米（1人一握り）

※段はくす版で充分です。大きな等について心配な点がありましたら、確認いたします。
※生米は一度水につけて乾燥させて持参のこと。

2 注意事項

①建造物は文化財です。丁寧に扱おうようお願いいたします。触ってはいけない箇所も多くあります。また、建造物内での飲食は禁止です。

②服装の注意：暖かい服装で。ただし、袖・裾が長い上着などは、火を扱う体験の際に危険です。必要に応じて着脱のご指示をお願いいたします。引火しやすい素材がないかご注意ください。

③建造物内で火を扱う行為は、通常たてもの園スタッフに限り認めております。学校連携事業中は特別に児童・引継者の方々に火や雨戸などに触れていただいておりますが、下記の点にごくにご留意願います。

- 1) 普段は扱えないことを児童にも御認識願います。
- 2) 火鉢やいろりの灰をかき回してはいけません（危険）。
- 3) 火鉢やいろりは学校連携事業においても履のみに限定していただきます。囲炉裏で児童等が扱わないようにご注意下さい（周囲に囲いが無いところでは、火の手が勢いよくあがってしまうため大変危険です）。
- ④各建造物は高低差があるものが多く、古材でできているため、建造物内で暴れたり、走ったりすると大変危険です。落ち着いて行動しましょう。とくに火の周りは危険です。火の周りでふざけたりしないようご注意ください。

3 自由見学時間について

体験にかかる時間はほぼ決まっておりますので、自由見学時間を確保したい場合は、体験の種類を被らす形となります。優先的に落としたいいメニューがある場合は事前にお知らせ下さい。また、自由見学の課題を掲載されるにあたって質問等ございましたら、ご遠慮なくお申し越し下さい。

4 その他

- ①見学のしおり：学校教育実用用に子ども向けの見学パンフをお渡ししています。当日来園時にお渡ししますが、予習用に予め必要な場合はお申し出下さい。不要な場合（前年度来園し入手しているため、物を大切にしたい、転入生の分の希望一帯）もお申し出下さい。先生の分もご入用の場合は冊数をご連絡下さい。
- ②放送について：必要に応じて園内放送を入れることができます。ご相願下さい。

参考

4 昔の暮らしと道具展（会期：平成14年2月1日～3月3日）

(1) 目的

平成14年1月20日終了の「東京建築展 小金井会場とたてもの園平成13年度特別展「大岡越前守と武蔵野の新田開発」展の間の常設展示室を利用し、当該時期に郷土学習来園をする小学校児童を照準とした民俗資料を活用した展示を試行実施し、同時期にたてもの園が実施している学校連携事業「昔くらし体験」連携校以外の学校の同時期の郷土学習来園や、滞在時間とれず「昔くらし体験」に応募が難しい来園校の郷土学習に対して効率的に対応できるサービス体制と、手近に所蔵する旧武蔵野郷土館資料の常設展示室での継続公開体制を整備する。

(2) 主な展示資料

①たてもの園の収蔵庫内にある旧武蔵野郷土館資料を中心に活用（約50点）。

キャブションについては、学芸員他職員が製作する。

衣関係資料（座敷、糸車、袴礼衣裳、印半纏、蓑草履等）

食関係資料（羽釜、飯櫃、おぼろ入れ、鉢、高脚膳等）

住関係資料（火鉢類、炬燵、銅取り器、縄とり籠等）

その他資料（運搬具：荷車、運搬み機、縄ない機等）

*類似展示資料やより多くの史料を展示している小平ふさと村・東京国立博物館・小金井市文化財センターを併せて紹介する。

②体験コーナー

体験用複製品の製作には、たてもの園ボランティアの協力を得て用意し、台所のしつらえについては「東京建築展」の展示造作を転用する形とした。また、縄叩き、縄振展示、短足などは、園の利用用備品等を転用し、学芸員他職員が造作を製作し、以下の体験内容を準備した。

手ない縄と機械ない縄を触って比べる、蓑草履・草鞋を履く、台所用品（立ち渡し・鍋・銅瓶）に触る、銅叩きで銅を叩く、縄に座ってみる

③連携校の発表コーナー

衣関係展示の中の藍染め製品である印半纏から発展させて、藍の育成と藍染めの連携校・小金井市立緑小5学年の緑展発表の一部を展示し、緑展で見学できなかった人たちに広く見学してもらうよう意図した。

緑小発表：児童刊行藍染め新聞・発表録新聞・藍染め製品（パッチワーク3クラス分）

(3) 会期中入園者

会期中入園者は15,488名であり、うち、学校団体は27団体来園した。緑展・宣伝等の緑費を全くかけない展示であったが、教育現場の意図を汲み知をはかっていたため、問い合わせの上来園した学校が多く含まれている。また、緑小関係者と小金井市教育委員会関係者の個別来園があった。

5 反省点と課題

(1) 昔くらし体験

①参加校アンケートから（10校回答）

- 1) 全体的流れはいかがでしたか? ①忙しかった 1
②ちょうど良かった 9
③長すぎた 0
- ・一人一人が体験できる時間が充分にとれ、余裕をもって進めることができ良かったです (小金井三小)。
- ・3、4年の車学級にあわせて能率よくスケジュールを友野さんに立てていただきましたのでとても助かりました。体験の合間や終わった後、園内の見学もできて良かったです (花小金井小)
- ・ボランティアの方々のお話を聞きつつ進めていただいたので、より印象的だったようです (小金井南小)。
- ・長いとおきてしまうので、次から次へと体験できて2年生は良かったです (小金井二小)。
- ・少人数 (クラスごと) に行ったので一人一人ゆっくりに体験する事ができた (小金井緑小)。
- ・盛り返さんで計画したので忙しかった。でも、全員がいろいろなことを体験でき、児童は良かったと言っている (小平四小)。
- 2) ボランティアや職員の説明で気づいた点は?
- ・わかりやすく説明できていた。棒程の説明がちょうど良かったようです。小さな袖章がいくつあっても実際に置かれたら良かったと思います (小金井三小)。
- ・とても詳しく丁寧に説明していただけて良かったです。もっと時間が欲しいくらいでしたが、他の体験のことを考えるとちょうど良かったです (小金井南原小)。
- ・ボランティアの方々、友野さん、職員の方がとても子ども達にわかりやすく親切に説明して下さいとても嬉しかったです。子ども達もみんな夢中になって、真剣に体験することができました。グループごとに分かれて教えていただきましたが、どの方も子ども達にも優しく接して下さり、暖かさを感じました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです (花小金井小)。
- ・火を扱うときの注意を昔の暮らし方を交えて話していただき、児童一人一人にしっかりと注意したようだった。もっともっと長い時間滞在したいというほど素晴らしいものでした (小金井南小)。
- ・「かさこじぞう」を読んでいただいたのが、昔のお年寄りが話しているようにゆったりとしたスピードで話っていたいただき、大変良かったです。なまりが味わい深く、子ども達は本当のじいさまとばあさまが話しているようだったと感動していました (小金井二小)。
- ・子どもに沢山声をかけて下さったので、よくわかり良かったです (小金井緑小)。
- ・とてもわかりやすかったです。子どもにも、大人の来園者に対すると同じように接していただき、博物館や美術館のようなちょっと引き締まる感じも体験で

- 74 -

- きました。子どもの自主性も尊重していただき感謝しています (小平四小)。
- ・5、6人に一人の割合で (人がついて) 説明してもらえて、子ども達が理解しやすかったと思います (小金井一小)。
- ・ボランティアの方によって説明の内容が多量な違った (それも学習だから良いのだが、時間が違うのが気になった) (小金井三小)。
- 3) 野外展示場の案内解説員の対応はいかがでしたか?
- ・「千と千尋」が主題になり子ども達も大変関心を持って見学しましたが、説明の量が「千と千尋」をあまり前に出た説明に思っています。「昔の道具を展示しよう」というテーマでの見学でしたので、おねらいが少しばやけてしまったかなと思います (小金井三小)。
- ・良かったのですが、もう少し人数がいてくださると有り難かったです (無理と思います) (南原小)。
- ・みなさんとおともつてもわかりやすく子ども達に説明して下さいました。展示内をただ見学するだけよりも、説明をしてもらうと見る点が違ってきました。時間を分とつてゆっくりにのんびり楽しみながら、再び見学したいです (花小金井小)。
- ・押しつけがましくなくて、でも、内容はきちんと整理されて理解しやすく説明していただきました (小金井南小)。
- ・親切に接して下さる中、ルール違反の子どもにはきちんと注意していただき、有り難かったです (小金井二小)。
- ・良くも、保護者同伴で良い (教員でなくても) としてくださり助かりました。引率者は教員とは限らないので、大人と一緒にならば良いというのでしたら、自由度も広がります (小平四小)。
- 4) 子ども達の反応は?
- ・火鉢や囲炉裏は家で体験できないことでした。火を扱う機会もありませんので、良い体験ができました。石臼を回すのも滅多にできないことで素晴らしい体験ができました。子ども達も大変喜び、火を扱うことを興奮気味に話していました (小金井三小)。
- ・詳しく聞けて、また、聞きすぎて、案内の方を困らせてしまって申し訳ありません。子ども達も満足していました (南原小)。
- ・子ども達はどの子も興味・関心を持って体験することができました。やはり目で見る、耳で聞くだけでなく、体験することによって多くのことを学ぶことができたと感じました。知識の習得だけではなく、この体験ができて大喜びをしていました (花小金井小)。
- ・大変楽しく充実していたようでした。火鉢が一番楽しかった用です。学校での七輪体験時に、ご指導受けた事柄が役立つ、全員が自信を持って行動していました (小金井南小)。
- ・楽しかったようでした。見学だけでなく体験が心に残った用でした (小金井四小)。

- 75 -

- ・近接の学校に在校しているのに、たてもの園に入園したことのある児童が意外に少なく、初めての体験で大変興味がある様子でした（小金井二小）。
- ・楽しく体験ができ、とても喜んでいました（小金井緑小）。
- ・とても楽しかったと言っています。どこも自由に見せていただき、自分達で計画したことを実現できたというのも嬉しかったようです（小平四小）。
- ・とても興味深く、楽しんで体験できていました（小金井一小）。
- ・楽しく体験したり、話を聞いたり、見学したりしていた（小平八小）。

5) 事前講習会はいかがでしたか（日程等希望があれば）？

- ・時間を特別に取っていただき有り難うございました。事前に説明をしていただき、また、体験させていただき指導のポイントがつかめ、子ども達にも前もって説明でき大変有り難かったです。お忙しい中をご配慮いただき深く感謝申し上げます。友野さんの様々なお心遣いを感じました。有り難うございます（小金井三小）。
- ・とても良かったです。勤務時間とのかねあいで参加できない人もいましたが、12月の20日～23日頃の午後でしたら、比較的参加可能だったかも知れません。なかなか日程を都合づけるのは、お互い難しいですね（前原小）。
- ・きちんと丁寧に事前講習会をしていただきまして良かったです。おかげさまで子ども達に事前指導も詳しくしてあげることができました。学校のお休みの土曜日にしていただいたので、学校の仕事に支障なく参加できて良かったです。時間も良かったです（花小金井小）。
- ・事前に充分打ち合わせできたので、児童への事前学習の準備ができ、より楽しい一日となったと思います（小金井南小）。
- ・良かったです。1時からの講習会は授業があるので難しいです。できれば、3時からがいいです（小金井四小）。
- ・とても丁寧に説明していただき、流れがよくわかり有り難かったです（緑小）。
- ・必要だと思います。全体の流れがつかみやすかったです（小平四小）。
- ・参加して、内容・やり方がわかって良かったです。雨かく流れを覚えてもらえ、最後にフアックスまでいただいて大変有り難かったです（小金井一小）。
- ・参加したことで事前指導がきちんとできて良かったです（小平八小）。

○アンケート内その他の意見

- ・今年度はとくにお預かりして背負い箱を体験させていただき有り難うございました。龍が大きく荷物を入れて背負うのも大変だったのですが、農家の人の苦勞が少しわかったようで「昔の人はすごいね」と話していました。いい体験ができて良かったです（小金井三）。
- ・今年度初めて参加しましたが、やはり、聞くとは大違いです。石臼も貸し出していただき、有り難うございました。引き続き来年も、3年生だけでなく4年生（伝統工芸的なもの）もお願いします。前原小は歩く片道45分かかるので安全面からの引率（親御さんの引率つきさい）の入場料を無料にし

- 76 -

ていただけて良かったです。是非、今後も見学のチャンスを生かしたいのをお願いします（小金井前原小）。

- ・本当に、お忙しい中このような体験をさせていただき有り難うございました。今後このような体験ができたらと思います。また、いろいろなたてもの園での楽しい計画などありまじりましたらご案内いただけますと嬉しいです（小平花小金井小）。
- ・2年生の体験としては、時間・内容とも良かったと思います。3年生になると社会科、総合科の学習があるので、その学習になった時「たてもの園に行ってみればわかるかも知れない」という意識づけにもなつたと思います。細かいところまでいろいろなご配慮いただきありがとうございます。来年は応募して参加できるように校内の連絡をより密にしたいと思います（小金井二小）。
- ・昔の暮らしのことなど、お話を聞ける時間があつたら聞きたかったです（小金井緑小）。
- ・わら細工・竹細工などの工的なものもやってみたい。また、季節にもよりますが、着物（袴衣でもいい）などを着て、本当になりきって一日を過ごさせるのもいいなあ一と考えています。学校側の方がまを聞いてくださり、初めてでしたいとなんと充実した時間でした。友野さんをはじめ、たてもの園の皆さん本当にお世話になりました（小平四小）。
- ・学校にきていただいで、折り紙教室を行っていただいたり、事前の計画をしっかりと考え連絡していただいで、とても助かりました。これからよろしくお願ひいたします（小金井一小）。
- ・いろいろなご配慮いただき、学校として大変助かった。今後是非積極的に利用してきたいと思っています（小平八小）。

②その他の所感・まとめ等

各校からのアンケートに見られるとおり、平成13年度の「昔くらし体験」本格実施は、試行時の反省点を踏まえ、各教員会との連携体制の整備確立に向けて格別努力を凝らし、講習会の開催による事前指導・学校とのコミュニケーションの充足等、時間をかけて準備をした成果があらわれおおむね成功であった。「物質文化を交えた郷土学習のために児童の自宅から物品を抽出することが困難になっている（前原小試行時の指摘）」昨今、博物館の中でも住文化そのものを実物の迫力をもつて展示しているたてもの園の存在は、地域の教育機関にとって心強いものといえる。今後も一層の努力を続けるべく、その他とくに気づいた課題を以下に記載する。

1) 事務連絡遅れの発生

「昔くらし体験」の申し込み期限を見落としてしまった学校が2校あった。いずれも、試行実施には参加していた学校であり、多くのアドバイスをいただいていた学校である。うち、1校は調整中に先方からまたまた間違い合わせがあったため、先方の見落としが判明し、敬愛と園への同時連絡を受け付ける形で対処できた。残り1校は、完全に見逃がして

- 77 -

し、ある程度の技術や作業について習得し、労を惜しむ姿勢をあらためれば、今後の指導や発展的な事業展開は困難と思われる。「生きている力」を育てる」総合的な学習を行う教諭自身の「生きている力」は声高に問われているが、その受け入れ先の一つとなつた博物館学芸員も例外ではないと思われる。教育普及事業を担当する学芸員職員の資質として今後きちんと検討・評価されねばならないと考えられる。ちなみに、「生きている力」とは何が培われつつ事業準備を行う中で、博物館自身の「生きている力」の欠如からの他者依存の盲点や、児童を受け入れるにあたって最低限の条件等、いくつか課題・検討すべきではないかと思われる点があった。以下の2点である。

○ボランティア等外注スタッフへの過信をせずに対応する

教育普及は手間がかかることから、員数不足やスタッフの能力の欠如をボランティア等のスタッフで補えば事足りるなどの安易な意見が聞かれることがある。とくに、生活習慣的な実技は「ただやればできる」との印象がありこの傾向が強い。しかし、生活習慣の中の実技には、その実技を育んできた背景があり、背景が合致しない限り、この考え方が即座にあてはまらないことは、博物館として押さえるべきポイントである。この点をはずさずに園の方針を定めていくことが肝要である。たとえば、園のボランティアスタッフにはさまざまな特技があり、外面からは、すべての者が園仕事ができ、火鉢の扱いも慣れどおり、「昔の暮らし」については対応できるとの見方をされる場合がある。しかし、全員が園路こぼしできないのは言うまでもない。また、小学校教育でいう「昔の暮らし」も、副読本で「ちよつと昔のくらし（おじいさん・おばあさん）」「もつと昔のくらし（ひいおじいさん・ひいおばあさん）」と区分けをして「昔」を語るまでに、使用する道具類の変化が短い間にも存在しているのである。職訓をリタイアしボランティア活動に臨む（仮に白さが目立つ年輩の）方々のすべてが「火鉢を使い」「石臼をまわしていた」世代とは限らない。ましてや、その幼い頃育った環境が、東京の産製品と機能は似ていても形態が同じであるとは限らないことを、「博物館」としては強く認識すべきである。

試行・本格実施一と学校連携事業をボランティアとともに進めた結果、担当する学芸員からは、地域性の変化の指摘やそれに見合った実物製作の練習指導の必要性が度々叫ばれ、笑顔、幾度となく、ボランティアの士気を低下させぬように理由を講義した上で、園としての方針をアドバイスする局面が生じた。また、ボランティアとの交流の中で、明らかにボランティアの子どもの世代にある職員の方が、日常の薪での風呂火鉢や火鉢での生炭の利用（＝薪炭ではない生炭を火鉢で利用した経験のない年輩も多い）など、都会育ちのボランティアよりも「昔の道具」の使用経験があることが判明し愕然としたこともあった。これらは、東京のある程度都市化した立地に住む高齢者に当然見られる現象であり、目をそらしてはいけぬ事実である。つまり、職員は、この点を常に踏まえて研鑽を積む必要がある。職員の中に「古来は生活様式の古いことは何でも了解している」という丸投げなボランティア至上主義・信仰が見受けられることがあるが、自らがまず、「生きている力」をつけない限り、この陥穽にすら気づけないと思われる。ことに、若い教諭はその点

のため、時期を大幅にずらして特例で受け付けることとした。学校事務の多忙さや、とくに、多く希望がある3学年以外の教諭からの希望である場合、校内で対象外と判断されてしまい回覧が回りにくいことに起因する。園としては小学校3学年に当該事業を限定しているわけではなく、今後、事業の歴史を築いていく中でこれらは解決されると思われる。事業への応募は、校長会・教頭会においての呼びかけでありルートがわかっていったため、各教諭から自校の管理職に今後注意を払ってもらようお願いした。

2) 子ども向けガイドブックの教諭向け配布・児童事前配布

教育利用時配布する子ども向けガイドブックを、従来のように来園時に渡すのではなく、連携事業で来園する学校には、事前に教諭分も含めて渡すように心がけた。これらは、昨年度来園校から強く希望があったものである。事前指導の充実に役立てることができたと思われる。また、この注意を払うことが、連携事業で複数回来園している団体と同じ資料を複数回渡すというミスを回避する作業につながった。これには、総合案内の案内係職員との内情調整が必要であり、ポスト数の少ない案内係職員に大変努力を要している点があることを明記しておく。

3) 引率者の入園料減免措置（＝学校だけでは行えない総合的な学習）

昔くらし体験に限らず、体験に着眼する傾向のある「総合的な学習」は、手間がかかるだけでなく、体験や外部引率の手はずや安全確保を考えると、教員だけではなく地域社会の協力が不可欠となっている。園の主催事業外で来園する総合的な学習実施校も、しばしば引率補助として保護者や地域住民の協力を仰いでいる。現在の園の減免措置は「引率者」を条件としており、文章上は引率担当の保護者は適用外ではないが、体験や見学の場合により、保護者引率の率が低い場合がありしばしば議論となった。グループに一人は引率者をつけたという形式が多く見受けられたため、児童数を5～6名に班分けした場合に、教諭引率に追加で何名が必要になるかという形で判断し、減免措置を下す形をとった。ただし、児童の年齢や健康状態によって必要引率員数は増える場合があるため、今後の検討事項として扱われる。

4) 教育普及を担当する学芸員の研鑽と事業の心構え

学校連携事業はさまざまな種類のものがあるが、とくに、たてものの園の環境を生かし、また、建造物理解にもつながる体験的な事業については、事前の準備や安全の確保など細かな作業が講義式事業よりも多く発生する。また、ともに活動する教諭、ボランティアや案内係職員も必ずしも慣れているとは限らない状況では研修・研鑽の手間も大きい。江戸東京博物館のような大規模施設では、外部委託やその他の事業へのすりかえで、これらの細かな部分を回避してきた傾向もあるため、従来の不足部分を専門スタッフ自身が認識

の事前学習が時間的にも物理的にも困難であり、その分、博物館にそれらを補い、学習形態で補完を希望、期待している。真に学校連携を考えると教育利用を望むならば、その期待を裏切ることのないよう、児童を引率する教諭以上に職員間の努力や意識改革が必要である場合があると思われる。

○安全体制の確保

①安全監視・連絡・誘導体制

教諭からのアンケートにもあったが、野外展示場の案内解説員の員数が不足していることなど、園内の安全確保の欠如がある。今年度、池田小の児童虐待事件以来、来園する各校の警備体制は強化されたが、それに比して、教育団体の来園等が増加している園の警備体制は低下の一途をたどっている。また、園内、建造物内の避難誘導増強も最善である（通常「避難先 ひろば → 」程度の認識、2階の場合どこから出るかの矢印表示程度は必要である）。現在は、案内解説員が主要な棟に配置されているため、室外への脱出は補えるが、園内放送で「ひろばへ」とアナウンスしても、そもそも「ひろば」の方向がどちらにあるのか分からない来園者がほとんどであるため、外部に解説員が不在となるあかつきには、何ら誘導手段がなくなる結果となる。度重なる案内解説員のポスト減をくり返す場合、経済的な利益だけでなく、来園者の安全確保という実利と義務も念頭に検討されたい。

学校連携事業に関して言えば、事業中に自由見学の児童が、下町ソーンの休憩棟のドアに手をはさんで怪我をしたことがあった。このような事故の場合、即座に園の職員と児童・教諭で、まず現場確認をすることがその後の動きの上で必要である。少なくとも、教育現場ではそのような対応となる。しかし、事業の進行指導に通常1人であつた来園者やボランティアは事業を止めることができなかつた。また、学芸員とともに事業を行っていたボランティアも状況的に手が離せず、連絡をすべきその他の職員も席に待機する態勢が業務上のその他の来園者対応上とれなかつた。このため、このケースでは、体験をしていた岡島家の案内解説員にポストを離れてもらい、教諭とともに避難体制に入ってもらいことを得た。が、その程度の怪我であつても、かように安全の確認体制は貧弱なものであつた。おそらく、今後、一度でも大きな事故が生じた場合は、連携事業自体中止せざるを得ない判断も必要となつていくと思われる。学校の受け入れは、単に、園の名誉や来園者の増加の視点だけで行えるものではない。来園者を預かる側として、児童・生徒の積極的な受け入れを検討するならば、備えるべき最低限の用意をすることを切に願うものである。

②設備の充足・限界の自覚

たてもの園は残念ながら、「体験棟」のような、公衆館レベル程度をクリアしている施設ができていない。また、第三セクター運営であり、直営施設よりも調理事業に対する衛生基準が厳しい。これらは、法的条件を施設・組織がクリアしないことには実施できない事業があることを示している。また、爆熱を耐えた鍋釜での飲食物の配布は、環境ホルモンのような環境教育が盛んとなった昨今、状況を説明すれば学校関係者からは無理に希望が出ることはない体験事業である。これら、当然ともいえる対応が、内部では調整が難しいことがあつた。食物事業は大きな魅力の

ある事業であるが、条件が整わない施設では来園者の安全や児童の将来を考えると実施できない点を、くりかえしボランティアにも研修を施している。が、手順を踏む用意なきに、管理者が代わるたび同様の希望がくり返され内部の動きが混乱動揺し、学校連携事業や児童を迎える事業にあたり、教諭がとりこむ担当が苦勞する局面があつた。現状の設備のままの実施は、「楽しそうな事業をやっている」という、園の体裁を表面的に整える以外の何者でもない。にもかかわらず実施する場合は、責任の所在を明らかにした上で、学校・児童にも予め状況をきちんと説明し、その上で、参加の意思を問うべきであらう。平成13年度の石臼体験は、試行時と異なり、黄粉（大豆）から生米へ、その場でなめぬように材料を変更した。講習会で説明を施した結果、各校からは、前年度出ていたような「現場で黄粉をなめさせたい」、「米の粉を持ち帰り加工したい」といった希望は一切なくなつた。現在の教育現場では、食教育について、かなり慎重・真剣に検討しており、「楽しい」という思いだけでは動きにくいことを基礎知識として踏まえる必要がある。

5) 来園希望日の調整

各校の来園希望日を調整の結果、たまたま、ほぼ1ヶ月間程度、平日の開館日に連続して普くらし体験を行うこととなつた。休館平日がない状況は、ボランティアへの事前連絡調整や使用物品の点検も担当している主担学芸員にとつて負担が大きいものがあつた。解決策として、次年度以降、1月は小平市対象月、2月は小金井市対象月という具合に、開催期間の中で予め連携先教諭ごとに広範囲可能期間を区切り、担当にとつての休館期間を設ける方法も考えられる。ただし、どの学校も郷土学習の導入部で動機付けとしての見聞を行うために来園を希望している様子であり、1月の来園が好まれる傾向があつたことも否めない。また、冬季の寒さもあつて雨天雪天延期、風邪などによる学級閉鎖延期の例もあり、現在の陣容では1日1校（3クラスまで）の連携が限界であるため、延期希望日が他校の来園日がぶつた場合の対応が心配であつた。つまり、学校教員から見ると必要とされる事業であつても、多くの学校を受け付けられる能力を残念ながら備えていないといふことである。今年度は、順延希望校の日程と他校の日程が重なることはなく大きな調整は必要になつたが、今後の課題である。

(2) 「串の巻らしと道具展」

①来園者アンケートから（22校回答）

普くらし体験参加校と開催期間に同時来園した学校にアンケートを送付した。

1) 来園時、「昔の暮らしと道具展」を見学しましたか？

①普くらし体験来園時に開催されていたので見学しない	5
②普くらし体験来園時に開催されていたが見学しない	3
③普くらし体験参加とともに見学した	2
④自由来園校 見学した	12
⑤自由来園校 見学しない	0

⑥昔くらし体験時に未開催のため、児童に臨時見学を推薦した 1
*昔くらし体験来館時に展示期間だったにも関わらず見学しなかった学校は「時間がなかった」との説明を併記している。

- 2) 展示内容はいかがでしたか? ①よかった 8
②まあまあ 6
③もの足りなかった 0
- ・生活に密着した道具がもう少しあるとよかった (小金井緑小)。
 - ・体験コーナーが良かった (小金井本町小)。
 - ・昔の暮らしで使っていた道具を実際に見ることができたから (武蔵野市立桜野小こぶし学校)
 - ・「わらじ」の体験、「籠」の体験、昔の道具の展示が良かった (三鷹市立井口小)
 - ・学習した内容の実物が展示されていた。多すぎず、子どもが見学するのにちょうど良い (中野区立新山小)。
 - ・昔の道具が一所で派山見られたこと。鍋、草鞋などの体験もできたこと。説明もしっかりしていた (府中市立若松小)。
 - ・体験コーナーで実際に触ることができたこと (国分寺第七小)。
 - ・知的障害校の子ども達にとっても展示に触っても良いという空間がある。子ども達も実際に触れ、発見があった (都立小金井養護学校)。
 - ・大人には興味深かったが3年生の子ども達にはそれほど興味をもたなかった (小平鈴木小)。
 - ・「昔の暮らしと道具展」を見るためにやってきました。展示数の少なさに少々がっかり。くらしが中心なのか、農業が中心なのかはつきりしていません (小平鈴木小)。

- 3) 体験コーナーはいかかでしたか?
(手ない縄と機械ない縄を比べる・籠に座る・昔の立ち流しにたってみる・垣根をあけてみる・鉄線を持ち上げる・扇叩き・草鞋や草蓆をはく)
- 量が ①多すぎ 0 ②少ない 3 ③ちょうど良い 8
 - 種類が ①多すぎ 1 ②少ない 5 ③ちょうど良い 5
 - 体験場所の広さは? ①広すぎる 0 ②狭い 3 ③ちょうど良い 8
- 他に希望、気づいた点は?
- ・昔の食生活に関する体験や道具 (小金井市本町小)。
 - ・農製品に触れられてとても良かった (小平十小)。
 - ・作ろうとしているため (小平十小)。
 - ・井戸の汲み上げ、昔の机に座る、洗濯体験 (洗濯板)、くるり棒を使った体験 (三鷹市井口小)。
 - ・一度に大人数が見るときがあるので体験場所が狭すぎたと思う (府中市立若松小)。

- 82 -

- ・体験道具がいろいろあって良かった (府中市立若松小)。
 - ・体験できるものの種類がもっとあると嬉しい (国分寺市第七小)。
 - ・たまたま2、3校が重なってしまったこととあって体験場所が狭かった (国分寺市第七小)。
 - ・水汲み体験など、昔の子どもがやっていたような作業をさせてみたい (三鷹市中原小)。
 - ・時間が無くできなかった (三鷹市東台小)。
 - ・わらじをはくイスなどがあれば良かった (都立小金井養護学校)。
 - ・わらじをはく体験はとても喜びました。五感で体験できるものが派山あればいいなと思いました。「くちくち蒲い」「すくくち蒲い」一体験してみなければわからないことを実感しました (小平鈴木小)
 - ・機械り体験をしたい (高倉小)
 - ・道具の数は少なかったが、籠に座ったりを隅を引っ張ったりできて良かった (小金井三小)。
 - ・わらじ、わらじうりが良かった (小金井緑小)。
- 4) 展示資料についてご意見があれば?
- ・古い順に並べて欲しい (小金井本町小)
 - ・短い時間だったので金でがらうと良い感じでした。不登校の子どもが多く、見ると、体験することが少ないので良い機会となりました。欠席児童の資料もいたき有り難うございました (武蔵野市桜野小こぶし学校)。
 - ・縄取り器は、とても児童にとっても興味があったようです (小平十小)。
 - ・箱の脱殻の進化について、発動機までの展示が見たい (三鷹市井口小)。
 - ・いろいろな物になるべく多くあった方がよい (府中市若松小)。
 - ・実際に触れることのできる資料が派山あると良い。展示方法としては、一つの道具の時代による移り変わりのわかるような展示がされていると良い。説明書きも見やすく、また、簡潔にまとめて表示していただけると有り難い (国分寺第七小)。
 - ・たまたまたまたまの園を利用し、展示室もぞいでみました。貴重な体験ができました。わらじを織足ではいてみて「チクチクする」と感じた子どももいました。ありがとうございました (都立小金井養護学校)。
 - ・昔の道具だけでなく、たとえば、昔から今までの道具の変遷がわかるような展示があれば、子ども達の興味をひくかなと思いました。道具だけでなく、くらしが想像できるような展示があったらすごいと思うのですが、ケースの中では難しいでしょうね (小平鈴木小)。
 - ・昔の道具展一見したかったです。昔くらし体験応募申し込みの時に、展示室の予定なども教えていただけたらと都合がつきやすいと思います。お願いします (小金井四小)。
 - ・同じ道具の移り変わりと小学生にはもっとわかりやすいと思いた (小金井緑小)。
 - ・展示資料をもっと多くし内容を充実して欲しい (小金井三小)。

- 83 -

②その他の所感・まとめ等

アンケートの結果は大部分想定されたものであった。まず、学校関係者からは、アンケートの結果は満足した感想を得たが、一般来館で普通品の学習を目的とする成人見学者には物足りなさが大きかったことがある。これは、展示資料品数が少ないという点と、展示資料を、あくまでたてもの園が園内に収蔵する旧武蔵野郷土館という所蔵資料に限ったことに起因する。時系列的なものの変遷を見せるに欠けていた。展示ストーリーより望ましい資料が欲しい場合も、江戸東京博物館本館より借用する形ではなく、展示ストーリーを曲げて、野外展示場の類似資料や野外展示場の同時代の建造物を見えるように解説文等で流れを振り分けた。あえて流れを変えるために、野外展示場の復元建造物で居住者が使用していた道具を「前川園秀邸」で使っていた銅とリ器」という解説つきで提示することもあった。このため、ストーリーを追って整理したい見学者には散漫な印象を与えている。ただし、教諭のアンケートにあった「もっといろいろ見たい」という意見の一部にある資料は、野外展示場の建造物内に展示されているため、見学時間の余裕があれば本来解決されているべき意見である。

今回の展示は、担当学芸員（友野）を中心に、たてもの園在籍学芸員が資料開列・キャプション制作・展示室設置を手分けをして効率的に行い、経費を全くかけない形で実施したが、物理的に江戸東京博物館本館まで追加の資料を確保に出向き逐次搬出する時間がとれなかった。このため、展示ストーリーに大きく拘泥することはあきらめた。当該展示については、年度当初から担当レベルでは提案ではなかったが、実質の決定は実質的には展示開始半月前となった。このため、昔くらし体験参加校の一部から、展示もあるならば展示期間に体験東園を希望し、多い展示ではあったが、教委経由の連絡開始の集客力の証明と、わずかな資料（館内ではあまり利用されていない武蔵野郷土館旧蔵資料）でも大差置はれ役立つかという事実が判明したということ、また、緑小の歴史作品展示のように、昨年度実施の「子どもミュージアムトーク」とは別の形の発表利用の場を設けることができたという多数の成果を得たこと（緑小の労をいとおねえ年間の発表協力には大変感謝している）。次年度以降、今回の蓄積をもとに資料を補充しつつ、続けていきたい展示である。

その他に展示期間中に散見した改善点は以下のものである。

●体験コーナーの管理

体験コーナーは、常設展示室後方の中央部に設定し、遊を6枚程度置き、上に、解説付きの手洗い・鏡・靴を脱いで自由に上がった履き、靴を脱いで遊に上がることができるようにした。また、周囲にわら草履と草鞋を置き、靴を脱いで遊に上がり、履きおろして草鞋を履く体験ができるようにしつらえた。草鞋掛け見本を2点置き、草鞋についてはそれをみながら装着するようにした。アンケートに希望があった着子はスペースの関係で設置できなかった。その他に、台所関係のものとして、

立ち渡し（建築復元造作転用）、鉄鍋、蠟燭（おかずの絵を作成して中に入れたもの）、銅叩き木製道具（銅叩きの先に用糸で細い底人形をつけたもの）3点、銅叩き専用台を用意している。管理は、常設展示室案内解説員1名が行った。

・わら草履・草鞋の不足

複数が時間にかかると、わら草履・草鞋が足りないことがあった。これらの製作はボランティアに依頼していたが、複数名の協力を得ていたため、遅れて提出した方の製品などで不足できた。また、草鞋の紐が扱いの力がわからないことや展示室の乾燥からしばしば切れた。補修はボランティアに依頼した。これらの迅速な発見管理は案内解説員の力による。

・銅叩きの故障

銅叩きは大変人気があり、当初、古い金剛製銅叩きを複数入手したためそれを設置していたが、半日ほどで児童に叩き壊される（叩き尽くされる）こととなった。このため、プラスチック製の現代の製品にとりかえ、台に銅はつぶさないようにそっと叩くものであることや、壊れた銅叩きを悪い叩き方の見本として展示することとなった。ただし、これは、ある程度銅叩きが来ている金剛製の古い製品は、児童の使用に耐えなかったという証であり、当初、冬場でも銅叩きの新品販売先がなかなか見つからなかったことから古い製品を使用したことが、児童の体験学習用には新たな物品を整備しなくては使用に耐えないことがあらためて検証された（野外体験の範囲ならば、壊損や安全性の問題から極力新品に本職の職人に発注して作ってもらっており、職人によっては、事情を話すと、児童にとってもより安全で丈夫に使えるように銅叩きの木製を工夫するなどしている場合がある。既製品としての大産生で販売し、一に果せるのではなく個人個人が注文に来る場合は、昔からこうして作っていた一等、貴重なお話をうかがう調査機会でもあった）。体験はもの古さではなくものの機能や手応え、使われる環境を体験するものである。古い道具の方が体験に留まらないうという思いこみは避けて御座すべきである。

・体験コーナーのこまめな清掃

常設展示室はタイルカーペット張りであり、筵や遊製品の置屑が床にへばりついてしまいう点があった。体験のために人が触ったり履いたり乗ったりする分摩擦するため、筵屑の散乱は避けて通れない。屑が散った展示室は見栄えがよいとはいえず、また、体験者の意欲をそぐこともあるため、案内解説員がガムテープでこまめに屑を集めることとなった。ゴミの出しにくいというところが今後の課題である。

・案内解説員（運営管理者）の必要性

物品管理と管理状況の報告、清掃、混雑時の人の整理など、体験コーナーに起こりがちな諸問題を案内解説員にすべて解決してもらうこととなった。また、体験をするか否かを躊躇している来園者ややり方がわからない児童は、案内解説員が一声かけることにより体験につながる局面が多くあった。安全に有効に体験するためには、多様な役目を持つ補助者の存在が大きい。体験させ放しにしない体制を今後模索したい。

VI その他の事業

1 稲の脱穀調整体験の試行実施

（小金井二小5年生：総合的な学習「稲の育成」→脱穀調整体験）

芽暮き農家の綱島家移築英儀時に、農家の祖先の作業の体験用として千盧根きを用意しており、引き継ぎさせた。その他の世帯も遊藝用具の収集に努め、稼働可能な唐臼と唐臼を入手することができた。唐臼は国立民俗学館居住者の収集により体験用に前年まで使用していたものを寄贈を受け、唐臼は埼玉県立民俗文化センターの紹介で埼玉県厚田町保原の唐臼製作可能な白藪人の新作製品を体験用に寄贈いただいた。とくに、唐臼については、製作可能な人物が寄贈者以外現存しない製品であり、稼働可能な新作製品としては最後のものと考える（現在の館有資料のうち、大館にも大切に保存された製品である）、なかなかない機会であるため、当面の間、体験学習に大切に活用しようとした。唐臼による稲の剥穀はずいぶん、ドマステックに変革した作業であり、現在はすべてオートメーション化してしまったため、千盧根きによる作業の体験が難しい状況となつていくのを希望して英儀が英儀の希望には、ずいぶん唐臼を利用した印刷外しを勧める（なつていている）。このため、唐臼の入手には絶好の機会であった。

土製の唐臼（作者は「どうす（土臼）」と呼んでいる）は譲れ易いため、①来園で土製調整に使用する稲の用意があること、③来園者が群れると事故につながるため小園の来遊に注意を要する時間割のクラスであること、を条件に、実行委員会として小園日南市教育委員会と協賛校を選定、応募いたこと。二小5年生は平成17年度も市の総合的な学習実践研究校に予定、応募いたこと、稲の栽培（バケツ稲育成）、稲刈り・脱穀・調整（小田原市農協利用）、米や麦の活用・調査（市内公立調査やてももの園からのわら稲工芸館公開授業）で、教育委員会の研究公開授業に園芸芸員とボランティアが協力した学校である。また、今年度9月には、同学年に募集の出張講義に園芸芸員が半日出席していたが、先生からの染めものの授業の相談にも度々ついているため、譲れ易い資料の活用についてある程度の情報を得、雰囲気も把握していたこと、

唐土の使用法・使用車の手順は、製作者・定宿室で学芸員が情報を得ていたため、準備設置は職員側で行い、装飾にはボランティア2名の協力を得た。ただし、2人とともに唐土の使用は初めてあり、久しぶりのことであつたため、扱いの注意事項も、唐土の扱い、それに基く手伝つて貰う形をとった。また、当初、学校が希望した時期に園の行事が多く1月程実施予定をずらしていただいたため、その間、児童が校内に干した脛が痛に違つて目減りしたり、下足の結束帯が速く空回り多量に受けたために、不足分敷束を新五県児童団はんぽボランティア事業からいただいた事ができた。

最低1斗は唐白や唐茶体験のために初が必要となるが、英國校はそれと知らない者合や今までの西備ができることが多ある。このため、必要量の伝達や確認は欠かせないものである。今回は、英後協力としての試行実施のため、閣職員の下士を駆使して、稲束の運送に努めた。

- 86 -

[日誌抄 () 内堀嘉]

H12年9月21日 唐白製作者調査(三姉妹)

10月18日 唐臼引き取り（上里町）（姉・婿三男）

12月8日 唐臼関係資料引き取り（上里町）（社・福三・増）

12月12日 唐白寄贈感謝狀事務(三・姓)

天保13年6月6日 唐臼挽き手設備場所始打ち合わせ(大工山秋) (題)

6月10日 見沼田んぼボランティア田植え調査(調)

7月8日 豊田さん、ぽぽらん、ディーン、ア田の賛助で調査の

8月1日 唐笠引き取り(満・姫)

8月2日 度白挽き手取り付け作業(山秋実施)(澤)

8月19日 豊沼田んぼボランティアイの集政り/畦草刈り調査(通)

8月19日 元祖田心は小ノノイノ曰ひ事取りて主事より調査あり

9月 小倉市教育委員会議設置協力校推薦依頼(横)

小笠井市教育委員云就教員待遇の交渉に際しては、
10月7日、豊田公使館長より謝意状を呈送した。

10月 7日 元田心は小ノノイノ相対リ調査,相対受領(出)

10月 30日 小倉井第二小股松葉打を合わ井(注・出・調)

10月30日 小笠井第二小脱獄反来打ち合わせ(廣・喜・勤)

11月1日 康筆使用準備(喜)

11月1日 唐其使用章圖(新)

11月3日 目沼田久保、三ノ子、ア、秘事、密達佐、新、引き、取り、(新)

11月3日 兄弟田んぼボランティアが福果譲渡区組、引き取り（新
康白準備（水打ち）（生野）

11月4日	鎌倉海濱	(水打ち)	(安野)
同日準備		(水打ち)	(安野)

11月4日	唐田幸福 (永打ち) (最期)
11日	唐田幸福 (永打ち) (二回)
11日	唐田幸福 (永打ち) (三回)

11月3日	唐田連備 (采刈ち) (3回)
11月6日	唐田連備 (采刈ち) (4回)

11月6日	唐目連篇 (水打ち)	(研)
11月7日	唐目連篇	(十)

11月7日 唐日準備(水打ち) (観)

二小	三小	四小	五小	六小	七小	八小	九小	十小	十一小	十二小	十三小	十四小	十五小	十六小	十七小	十八小	十九小	二十小	二十一小	二十二小	二十三小	二十四小	二十五小	二十六小	二十七小	二十八小	二十九小	三十小	三十一小	三十二小	三十三小	三十四小	三十五小	三十六小	三十七小	三十八小	三十九小	四十小	四十一小	四十二小	四十三小	四十四小	四十五小	四十六小	四十七小	四十八小	四十九小	五十小	五十一小	五十二小	五十三小	五十四小	五十五小	五十六小	五十七小	五十八小	五十九小	六十小	六十一小	六十二小	六十三小	六十四小	六十五小	六十六小	六十七小	六十八小	六十九小	七十小	七十一小	七十二小	七十三小	七十四小	七十五小	七十六小	七十七小	七十八小	七十九小	八十小	八十一小	八十二小	八十三小	八十四小	八十五小	八十六小	八十七小	八十八小	八十九小	九十小	九十一小	九十二小	九十三小	九十四小	九十五小	九十六小	九十七小	九十八小	九十九小	一百小
二小	三小	四小	五小	六小	七小	八小	九小	十小	十一小	十二小	十三小	十四小	十五小	十六小	十七小	十八小	十九小	二十小	二十一小	二十二小	二十三小	二十四小	二十五小	二十六小	二十七小	二十八小	二十九小	三十小	三十一小	三十二小	三十三小	三十四小	三十五小	三十六小	三十七小	三十八小	三十九小	四十小	四十一小	四十二小	四十三小	四十四小	四十五小	四十六小	四十七小	四十八小	四十九小	五十小	五十一小	五十二小	五十三小	五十四小	五十五小	五十六小	五十七小	五十八小	五十九小	六十小	六十一小	六十二小	六十三小	六十四小	六十五小	六十六小	六十七小	六十八小	六十九小	七十小	七十一小	七十二小	七十三小	七十四小	七十五小	七十六小	七十七小	七十八小	七十九小	八十小	八十一小	八十二小	八十三小	八十四小	八十五小	八十六小	八十七小	八十八小	八十九小	九十小	九十一小	九十二小	九十三小	九十四小	九十五小	九十六小	九十七小	九十八小	九十九小	一百小

11月8日 唐巨準備(水打ち) (晴)

小金井四小5学年 稲の育成事業報告受領(謝儀額1)

11月9日 唐臼準備(水打ち)(婦)

11月10日 唐臼準備(水打ち)(湯鉢)

11月11日 唐臼準備(水打ち) (三前)

11月12日 稲脱穀調整実験施設・片づけ(稲・藁・ホエデイダ)

小金井二小協力脱殻調整実験授業（三浦・藤、ほか）

11月21日 二小黨・玄米引き取り來團受け渡し（翌・本團）

天保14年1月8日 唐臼挽き手修正、臼修理打ち合わせ・実施(山秋)(婦)

2月5日 ボランティア勉強会「民俗文化財とその活用Ⅱ—唐白解説と資料見学」(昼)

○スケジュール○ 分相：千世扱き＝三好、唐臼＝友野、ポランティア（図部）、林先生

唐菰＝ポランティア（服部・広畑）、望月先生

兒童誘導＝ポランディア（川本） 望月先生

公司進行・解設=友群

13:30到着 注意とやることのお話(友野)

- 87 -

- 89 -

- 88 -

他者に驚くほどの講義を依頼する際の、周辺作業の存在や作業にかかる時間配分、作業のための必要員数など、従来先生方が黙然としたイメージで相談してきた部分が、多少改善されると思われる。また、準備作業や実際の良技の指導が校内スナップでも可能となれば、一層授業展開に広がりが出るであろう。

アンケート回答(4名)

○講習会参加動機は？

- ・親の世代までではできない自分ができないのは残念だと感じていた。
- ・痛を育った中で薬があります。何か作りたいと思ったので。
- ・総合的な学習への導入を考えています。
- ・ものづくりに好きなので、個人的にもやりたいと思っていました。
- ・薬を触って作業したことがなかったです。
- ・総合的な学習の中で注進欄作を行う予定なので。
- ・私自身は触らないの経験はなかったです。

○所属校でどのような扱いで参加していますか？

- | | |
|-------------|---|
| ②研修 | 0 |
| ③個人の参加 | 4 |
| ④調整せず関係なく参加 | 0 |

○参加にあたって気になった点は？

- ・休みの日の参加は出張にならないと言われた。
- ・特になし。他に来ないと思った人もいたが、休日（運休中日）で都合がつかないのて来られたのかと聞いていました。
- ・休日であり、参加の要はいとくに考えずしていました。本来なら出張かなとも思います。

○講習会期日・時刻はいかかでしたか？

- ・勤務時間中に研修で来れるのもいいと思う。
 - ・平日にもと思いますが、実際には忙しい時彼女で出られそうにありませんでした。
- ②他の日時にして欲しい 0

- ・平日の午後に設定していただけと研修で出られる教員も多いと思う。

- 講習会の時間はいかがでしたか？ ①ちょうど良い 3
②長すぎる 0

○講話内容はいかがでしたか？

- ②役に立たなそうである
③どちらでもない
④わからない

- ・早速取り組んでみます。
 - ・実物があったのでわかりやすかった。
- 実技の内容はいかがでしたか？ ①やさしかった 1

- 16 -

運搬には至らなかった。この以来は、國が就けてきた運搬姿勢を考慮しての申し出であり、三市の年間計画策定の時期であるため、詳細内容を継続検討する条件で受理している。

(2) 園企画の講習「学校職員を対象とした蕨の取り扱い講習」

(平成13年11月24日 9:45~)

●目的

学校現場から個別の質問が多い趣の取扱い（蔵紐工を含む）の實踐について、従来実施してきた個別対応指導の効果を高めるため、希望教職員をとらためて講習を実施し、蔵を活用した授業準備に必要な知識・技術の習得とたまためて講習を実施し、蔵を活用した授業準備に必要な知識・技術の習得とたまためて講習を実施し、蔵を活用した授業準備に必要な知識・技術の習得とたまためて講習を実施し、蔵を活用した授業準備に必要な知識・技術の習得と

附

- ① 蕨の種類と栽培工の地域性について
(講話と資料例示、博物館の活用の有効性) (講師：友野)
- ② 蕨の下根増殖 (蕨すずり、釐打ち、道具の説明、道具の工夫ドバイス)
(講師：ガラランディヤ (原部他・動物学専攻)、友野学芸員)
- ③ 端ない講習 (右ない、左ない、その意味) (講師：同上3名)

*②③は、12月に実施予定の情景再現事業「正月お飾り作り」の裏の下準備の一部に協力いただく形で実施する。

●募集方法

従来問い合わせを多く寄せてきている、小平・小金両教育委員会に申込用紙を配布・周知依頼し、用紙を使用したための圖直接申込みの形をとる（締め切り11月9日）。

●実施結果

応募者：5名、出席者4名（小平四小・八小、小金井一小・本町小教諭）

●実施所感・アンケート結果等

参考実験の位置づけで実施し、政策事務局開始（10月9日）から締め切りまで1ヶ月なかったため、応募者は少なかったが参加者全員技術習得を達成した。また、市の年間研修計画にとりあげた関係を各教委と整備段階の実行的ため、各高校とも教諭の有志参加となった。このため、休日の実施となる方が参加希望者には授業を欠かす必要がなくなり、平日の少人数のアドバイスを加えたいだが、園のその他事業の都合から連休中日の実施となったため、参加するには所用が入りやすい時期であったかと思われる。また、講師協力ボランティアには、園職工資料の地域性がよく出ている資料数点を予め見て研修し、同様な作りのサンプル資料を（手に触れ、先生方がよく見る）ことができるよう作成してもらった。つまり、お国自慢の自己の作り方に誇りを持っているところではなく、同型に見えぬ民俗資料の細かな差異の存在を尊重して実技指導の根幹を持つて協力してもらったようがお願いしたい。この講習会の実施によって、

- 90 -

で行事について説明を施した。仕上げとして三学期に入り、昔くらし体験事業に参加する形で表紙にたてもの園を見学する要項を進められた。

①七夕行事の学習（7月7日（土））

たてもの園を巡る「七夕折り紙教室」担当職員を中心に授業体制を組んで実施。出張事業の本格実施であり児童の員数も今までと比べて多く準備を必要があるため、職員だけで講師をつとめ、現場の先生と保護者の方にも折り紙を覚えていただき協力を得て実施した。折り紙など材料類は学校が用意した。七夕や軒の説明に使用する教材・配布テキストはたてもの園で用意し、当日教材提示装置をお借りして解説した。

○授業内容

七夕行事についてお話

・たてもの園のものを朝に七夕飾りを飾る場所、「軒」の説明

・折り紙遊び（座畳と織姫、桔と彦彦）

（講師：真下・阿部・三好・友野、学校担当教諭3名、保護者10名）

※議題：折り紙の用意についての予算制限を学校がしておらず、保護者連絡の更新に依りて準備したとの話を聞いた。おすかなものでも教材準備が予算的に追いつかない学校があることが出張学習の課題となる。また、約2コマずつクラスに時間をとったが、小学校的な短い授業時間内に実施を完成させるのは緊張の連続であった。保護者の介添えが不可欠な作業であった。授業後、同校校長へ同校ヒアリングもあわせて行えた。

※講師面では、七夕折り紙教室運営者（真下・阿部）を中心講師にすえ実施したが、補助講師（三好・友野）の折り紙の習得練習が課題の課題となり苦労があった。

②月見行事の学習

綱島家担当学芸員が平成11年度以来年中行事としてお月見飾りの企画を実施しているため、綱島家担当を中心に調整を行った。月見団子を作るにともない粉挽きをしたという学校の意向があったため、新たに準備を整えていた貸し出し用の石臼2基をはじめとする製粉道具一式を貸し出し、授業を進めてもらう形で協力をした。当該時期は綱島家担当が兼任の甘藷らし体験連絡調整に入る時期であり、出張協力は見送ったが、先生宛に、月見行事の解説、石臼の使用法講習と臼解説、粉挽き仕事と土間の説明などを参考意見として伝える形で協力している。

③正月行事—正月飾り作り

稲葉を使った藁細工作りの体験を行いたいとの学校の希望があり、網ない体験とあわせて正月飾り（網を使用した輪飾り）の製作を行った。当初、教諭からは藁草履・草鞋などを作りたいとの相談があったが、必要講師の員数や、まず、網をなえないと作れないことを説明し、年中行事教習にあわせて正月飾りに落ち着いた。材料は学校で用意し、稲葉の下準備は学校である程度済ませておいて頂く予定で準備を進めた。また、この時期は、園の藁細工講習を実施している学芸担当が正月お飾り作りワークショップに従事するため、代役で司会・解説に派遣する担当者（学芸係長）とボランティアの藁仕事経験者（一部（残りは園にてワークショップ実施））を派遣する形となったため、先生方もの技術習得も強くお願いした。事前には下準備手順や網ないを覚えていただくために、園主催の藁の取り扱い講習に1名参加して

②むずかしかった

③ふつつ

・草鞋もしくは藁草履くらいまでやってみてみたかった（下手でもいいので）。

○実技講師の対応はいかがでしたか？

①技術習得に充分だった

②技術習得に不足だった

③まあまあであった

0

0

・大変丁寧に教えて頂きました。草鞋とぞうりの見本も有り難かったです。

・参加人数の割に講師の方が多く、とても質的な研修でした。

・丁寧で、不器用な者にもわかった。

・短時間でもある程度見通しがたつたので有り難かったです。

○今後たてもの園に希望する講習は？

・養蚕の用具が小平十二小にもあるのですが、作り方や用途がわかりにくい

ので子どもと見学に行つたときに説明してあげられるように勉強したい。

・他にも、昔の暮らし体験的なもの、たくさん、干し柿など。

・いつも3年生がお世話になってます。次は修業見学、たてもの園での取

り組みが学校でもよく話題になります。子ども達のことを考えた適切な内

容、アドバイスが有り難いです。

【日誌抄（り）中田真】

H13年 10月 2日 薬講習打ち合わせ（小平/小金井）（研）

11月 20日 薬講習ボランティア打ち合わせ（研）

11月 22日 同上

小金井第三小学校教師研修会（研）

11月 24日 教職員を対象とした藁の取り扱ひ講習会（調布/狹谷/4、新緑組1）

H14年 3月 4日 区分市/小平市/小金井市合同教職員研修会打ち合わせ（小平市役所）

（三好・阿部・三好・友野）

3 周辺校への出張授業

現在のスタッフ数からは限界があるため、毎年1校程度を早期の連絡調整の上、出張授業対象として出向いている。これは、平成12年度に出張試行をした結果、出張授業による学校との信頼関係を構築するための有効性の認識と、校長会長等から連絡の姿勢として不可欠である指図を受けたことにもよる。また、園にとっては学校の状況（児童の気候・安全管理に対する心構え他）を学ぶ好機会であるが、園内がもぬの空に近い状況となるため、事業体制を整えるためにも早期調整を行った可能な範囲の授業しか実施できない。今年度は、前出の連絡めでの小金井二小への出張と伝統行事を意図した年間を通じての小金井一小への出張協力を行った。なお、この出張授業の依頼は、年度当初の教頭会や研究主任会での園の既存事業説明にヒントを得て寄せられた。既存事業のノウハウを発展させる形で対応している。

（1）小金井一小3学年への出張授業

年間を通じての年中行事学習に協力をした。たてもの園の建造物の構造とあわせ

る。それぞれがテーマをもっており、それについて職員に質問をしたいというものである。職員の人数が限られているが、生徒の授業時間のやりくりはむずかしいので全て園内部のやりくりで対応する形で調整した。

- 世田谷区立駒留中学校総合的な学習フイールドアーク
テーマ「建築について」：生徒からの質問対応
10月17日、31日、11月14日、21日（高橋学芸員）
○小平市立上水中学校「総合的な学習」職場訪問：生徒からの質問対応
11月16日（真下学芸員）

- (2) 卒業記念ボランティア（小金井市立南中学校）
小金井市立南中学校では毎年卒業記念のボランティア活動を2日間生徒に課している。従来ボランティア活動先は養護施設などが多く、異なる展開も模索していた。市研究主任会での事業説明を基盤に各中学校の研究主任へのヒアリング活動を行った結果、南中研究主任から園の活用が強く示されたため、中学校との連携の初めてのケースとして受け入れを決定した。なお、研究主任から希望事業は次のものである。
①中学生は生涯可能な簡単なものではなめてかかっているので真剣にできる高度さ、希少価値、厳しさなどが必要。
②展示してある本物をさわるなど注意をすればきちんとできるのでやせたい。
そのため、事前に注意点を学校も徹底して伝える。

これらのアドバイスを参考に、取壊建造物の清掃活動（文化財に触れる機会一環の芽生え）、展示場へ実際に展示する資料を製作する（成果品が公的意味合いを持つことの意義、喜び・責任を感じさせる）活動をお願いすることとした。なお、野外建造物は腐みも激しいため、清掃する建造物と清掃方法は学芸員が事前に清掃スタッフと調整の上決定した。また、現在の子ども達は星のはき方、はたきのかけ方などを知らないとの教諭のアドバイスがあり、手順や使い方を図解で示した物を事前レクチャーとして渡した。展示物の製作は、小寺醬油店の本箱へ清酒等の名称を型紙を作ってスプレーペンキできれいに吹き付けの作業を依頼した。来園時、型紙作りから開始する方法であったが、箱組として事前に作ってくるよう教諭から生徒に指示があり、スムーズに進めることができた。また、大学生の博物館実習生が行ったものと同じ作業（小寺醬油店展示物である塩蔵のラベルの貼り替え）も行った。時間の余裕を見て、団体見学者向けの解説文の仕上げもすることができた。

清掃担当建造物	製作担当資料	担当生徒名
小出邸	塩蔵ラベルはがし、貼り替え	橋本・大川・岡部
吉野家	キリンビール箱名称型紙きと 吹きつけ	山口・山本・佐藤
鯛烏家	鯛烏箱名称型紙きと吹きつけ	田中・西村

いただき、学校でその他の先生に講習を施す形で準備をした。当日の裏面内容は次のように予定し、担当学芸員から説明内容等を派遣講師（三好）にレクチャーの上実施した。

- (授業内容と担当)
・正月飾りの意味の説明、たてものへのとりつけ例（門口、井戸等）（三好講師）
・憲法の手順の説明と実演（三好、よしもと講師ラゲイ6名）
・縄ない講習（三好、よしもと講師ラゲイ6名）
・飾りのとりつけ（各自教室で：クラス担任の指導による）

出張講師は担当授業終了後、即帰園したため、飾りの完成を見ていない。後日一小教諭から成果の写真連絡をいただいた。これら授業協力は、様子を掌握するための職員主体の形や、道具協力、ボランティア講師を数多くそろえ職員を校務第一等、さまざまな形態を工夫する経験となった。

- 【日程表（ ）内担当】
H13年 6月27日 授業打ち合わせ（於：たてもの園）（三好・町・橋・一橋3）
6月30日 授業打ち合わせ（於：一小）（町・橋・一橋3）
7月6日 講師予定者宛実技講習会（三好・町・橋・一橋）
7月7日 セブタ授業係宛実技講習（一小）（三好・町・橋・一橋）
セブタ授業（一小）（三好・町・橋・一橋・中橋・橋本講師）
9月12日 石臼取り扱い等講習、貸し出し（三好）
9月21日 石臼返却受け取り（三好）
11月24日 教職員を対象とした裏の取り扱い講習会、一小組授業内容打ち合わせ（三好）
12月4日 一小組ない授業打ち合わせ調整（三好・ラゲイ7・橋本）
12月11日 一小組ない授業打ち合わせ調整（三好・ラゲイ7・橋本）
12月14日 一小組ない授業打ち合わせ実技講習（三好3）
12月15日 一小組ない授業（一小）（三好・ラゲイ7・6・一橋4）

- 4 中学生への対応
総合的な学習では児童・生徒の自主性を尊重するが、小学校児童の団体引率と異なり、中学生は各自の個別行動、グループ行動の両方が高まることから、他者との連携調整の困難さや、たてもの園の従来事業もより工夫をこなさねば中学生には対応できないとの小金井市立南中学校の研究主任からの指摘がいくつか寄せられた。このため、個別の中学校の来園希望に極力応じ、また、園を活用する意欲のある研究主任との調整を中心に方法を模索した。

- (1) 個別の来園
個別グループ等の来園は昨年度あたりからほぼ見られるようになってきてい

【日誌抄（ ）内粗点】

- H13年 5月14日 小金井市研究主任会事業説明/打ち合わせ(三郎・静)
6月20日 小金井市南中果樹研究主任訪問事業説明/打ち合わせ(三郎・静・静)
10月17日 世田谷区立駒留中学校総合的な学習対応(編)
10月31日 世田谷区立駒留中学校総合的な学習対応(編)
11月14日 世田谷区立駒留中学校総合的な学習対応(編)
11月16日 世田谷区立駒留中学校総合的な学習対応(編)
11月21日 世田谷区立駒留中学校総合的な学習対応(編)
H14年 2月2日 前中研究主任卒業記念ボランティア打ち合わせ(三郎・静・静)
3月3日 清掃スタッフ情報講習所/打ち合わせ(三郎・静・静)
3月4日 前中ボランティア生徒事前説明会/打ち合わせ(三郎・静・静)
3月6日 前中卒業記念ボランティア活動(三郎・静・静)
3月7日 前中卒業記念ボランティア活動(三郎・静・静)
3月8日 小金井市教育委員会指導要領審議会/打ち合わせ(三郎・静・静)

5 高校生への対応

平成13年度は高等学校の来園は自由見学が主体であったが、平成14年度の私立桐ヶ丘高校単位制授業の受け入れを調整し、カリキュラムを確定した。桐ヶ丘高校の受け入れは、江戸東京博物館本館とともに実施するものであるが、たてもの園での授業滞在の比率を鑑みても、園の学校連携事業への真摯な取り組みが生きていく。なお、桐ヶ丘高校は、たてもの園の対応スタッフの授業から30名が受け入れ限度との希望に示して、江戸博物館と分館セットの授業であるため、園の希望員数にあわせて調整する形で年度カリキュラム予算調整に入っている。

桐ヶ丘高校は美術実技的な側面を多く持つ学校であり、縄文土器作りを担当学芸員(友野)がカリキュラムを設定し、成形した土器を預かって、後日実施される園の土器焼きとともに完成品を持ち帰る形で予定した。土器焼成日の生徒達の再度の来園を期待しての案である。また、併せて、常設展示等で実感を模索していた「勾玉作り」のたてもの製作用具(まがいざり)を自己の分と園の分を製作してもらおう形で設定した。

【日誌抄（ ）内粗点】

- H12年度 勾玉まがいざり調査(三郎)
H13年 12月14日 都立桐ヶ丘高校単位制授業依頼来園・打ち合わせ(三郎)
*以降、電話・ファクシミリ連絡(三郎)

○桐ヶ丘高校授業予定○

- ・日程 平成14年7月9日(火)～12日(金)
・予定カリキュラム(次ページ表参照。うち、たてもの園分は園館言カリキュラムの承諾)

前川邸	園冠箱名称型抜きと吹きつけ	向後・山上
子宝湯	美園園冠箱名称型抜きと吹きつけ	石崎・切手・藤森
花市生花店	月桂冠箱名称型抜きと吹きつけ	山下・園木・荒島
天明家	カモジ冠箱名称型抜きと吹きつけ	園分・森田・藤森
八王子千人同心の家	カモジ冠箱名称型抜きと吹きつけ	飯島・山内

*当日立ち会い：三好・友野、南中：眞井

○清掃基本型

- ①ハタキをかける(機はかけなくてよいと指示したところはしない、花市生花店は生花模型にもはたきかけ)
②庭敷等で掃く(塵の目にそう、散居も掃き出す)
③敷を雑巾で乾拭き
④坂の間の雑巾を拭く(袋は縫ってこくこと)
⑤坂の間の雑巾を拭く(袋は縫ってこくこと)
・柱や板戸で④⑤の指示がある場合有
⑥土間(コンクリートたたき)に水を打つ
・花市生花店はデッキブラシを使用(汚水を壁にはねかさないように注意)

○箱製作基本形

- ①厚紙などに園袋の文字トレーシングペーパーから文字を写して型抜きを作る(宿題)
②現在展示中の箱と文字の位置をよくはかかって型紙を白地の箱に設置、スプレーペンキで文字を印字する。
③小寺醤油店に展示する

○缶詰のラベルはりかえ

- ①小寺醤油店の指示した缶詰を撤収する(場所をよく覚えておく)
②缶詰の箱をブラシでおとす
③水に缶詰をつけてラベルをはがす(何のラベルだったかマジックでシールの下にメモ)
④新しい同じラベルを貼る
⑤小寺醤油店のものとの場所に展示

実施初日、園の立ち会い担当1名の都合がつかなくなったため、眞井教諭には当日の職員会議をキャンセルして立ち会い協力をいただいた。また、清掃スタッフからも時間的な関係から雑巾での拭き掃除や雑居は行えないため、中学生の力で働いたことにより大変感謝状が美しくなったと喜ばれた。缶詰ラベルの貼りは、大学生の博物館実習生より、手際・出来映えともに良かったことにも驚かされた。文化財の美化・保護活動としても面白い活動である。南中からは清掃終了後、雑巾と履袋をご寄付いただいた。

うことは、申請した企画に関して追加付帯事項の依頼等、様々な注文・アドバイスが生じることであり、たてもの園の職員数では、それら他館からのベースで報告される変更事項に即応しつつ、その他の園事業を含めて回すことは及びもつかないことであった。このため、名より実をとる形で自分たちの足下を固め、漸々と進める途を採択した。

東京都施設の実施事業の中には、このようにたてもの園と同様な状況で行われている、地域の教育力にかかわる有意義な事業が、まだまだ沢山隠れていると思われる。大切に育てていってほしいという思いと切に願うものである。

都立阿ヶ丘高校外単位協賛江戸東京博物館受け入れ案（平成13年1月）				
7月9日 江戸本館 （半日）	7月10日 たてもの園	7月11日 たてもの園	7月12日 たてもの園	
映像ライブラリー観 覧（テーマ展示のた めの観覧）	①収蔵建造物情報活動 （指導：学芸員） ②ポランディアガイドと 園内見学（ポランディア ガイド）	①収蔵建造物情報活動 ②縄文土器制作（指 導：学芸員） ③縄文粘土こねと縄文土 器作り（指導：学芸員）	①収蔵建造物情報活動 ②勾玉作りの道具製作・ 勾玉製作（指導：学芸員） ③勾玉キャンペーン貼り 紙製作（指導：学芸員） ④来園者に勾玉作りを教 える活動（指導：学芸員）	
（半日） ポランディアガイド による展示見学	③ポランディアと活動 （ポランディア） ④展示鑑賞と土器のス ケッチ（指導：学芸員）			

6 子どもミュージアムトーク

平成12年度と異なり、今年度は子どもミュージアムトークへの応募は、さまざまな連携校があつたにもかかわらず全くなかった。連携事業への参加集金を滞らすため、レポートなどの発表行為を園は義務づけていないが、強制できないが、校内での発表だけでなく、校外でのあらたまった気持ちでの児童の発表も意義があることである。昨年度試行実施に応募いただいた小金井三小からは、3月上旬の実施は、各校教諭とも次年度カリキュラムの策定に入る時期と重なり手が回らなくなるため、実施時期をもっと早く設定すれば参加しやすいとの指摘があつた。各授業のとりまの時間からあまりに遅れた発表は削ぎ捨てし、児童の集中力や意識がつかないケースがあるため、連携校から希望があるたびに園内で実施する形を来年度以降検討する必要があると思われ、子どもミュージアムトークにかかわる発表要素として、「昔の暮らしと道具展」での線小の発表展示を行った。

VII まとめにかえて一東京都事業上の課題

各事業の記録の中で、個別の課題や注意を私った事項について述べてきたため、ここでは、都の施策の中にたてもの園の取組みを位置づけ検討した課題について記す。

たてもの園は、江戸東京博物館所蔵財団の中では、最も早期に学校連携についての体制を整え、また、自館の特質を見据えて児童・生徒に関わる事業を展開してきた。その中で、試行実施時から重々担当側では課題に上がり、その度に園の全体状況を鑑み、見送らざるを得ないと判断してきたことがある。都の施策「心の東京革命」への事業としての応募・参加である。これは、広域の声を上げることさえ控えてきた。

園の連携事業や子どもポランディア・ひびろっ子活動は、まさに「心の東京革命」の趣旨そのものの事業といえる。本来ならば参加希望を出し、事業の展開例を広く東京都内部でも示すことにより、その他の参加事業にも刺激を与え、ともに発展して行ければ何よりであろう。しかし、東京都が大きく声を上げて遂行している事業に参画するとい

一編集後記一

総合的な学習本格実施に向け周囲の協力を得て、学校連携事業を育てて参りました。各校委本部、各校先生方の温かい励まし、言葉、見舞、生徒の励ましと姿を見るにつけ、当園の持つ価値には類似できない特質と社会的に置かれたあるべき責務を強く感じます。平成13年度は、保育園（お芋堀り）から中学生までの幅広い受け入れが、次年度の高校生を受け入れ準備に入れたことも、当園の存在価値を示すものといえましょう。

担当体制等に大きな変化があったため、平成13年度報告が大きく遅れましたが、博物館自身が、自身の持つかけがえのない資料特性と学校連携への影響を考慮し、公的な責務を自覚した体制を整えることが、これからの学校連携には不可欠といえるでしょう。

たてもの園学校連携事業は、たてもの園だけの努力で築いてきたものではありません。

各教育委員会指導主事のみならず、各校研究主任をはじめとする多くの先生方—さまざまなみなさまとの連携があって初めて成し得た事業です。今後も、この何ものにも代え難い蓄積を続けていければ何よりと思います。

平成13年度たてもの園学校連携事業実施担当

総括：林朝次郎

教育委員会連絡調整：学芸係 三好武司・友野千鶴子

事業企画・まとめ担当：学芸係 友野千鶴子

学校連絡・実務調整：学芸係 三好武司・友野千鶴子・高橋英久

教育活動領域免除事務：管理係 森田静子

教育活動・イベント調整事務：管理係 森田静子・川上香・池辺美枝子

来園時体験・解説等実務進行：学芸係 三好武司・栗屋静子・友野千鶴子（えとまるこ担当）・

真下祥幸・阿部由紀子・高橋英久（えとまるたろう担当）

たてもの園案内解説員：たてもの園ボランティア

管理係：後藤武男（資料設置補助）

職場体験調整：真下祥幸

単位授業カリキュラム調整・「昔の暮らしと道具展」担当：友野千鶴子

伝統工芸実演スケジューリング・学校連絡：阿部由紀子

江戸東京たてもの園
平成14年3月

〒184-0005小倉井市神町3-7-1

☎042(388)3300